

# 土佐国衙跡発掘調査報告書

## 第8集

—松ノ下・金屋地区の調査—

昭和63年3月

高知県教育委員会

# 土佐国衙跡発掘調査報告書

## 第8集

—松ノ下・金屋地区の調査—

昭和63年3月

高知県教育委員会

## 序

昭和54年度から国庫補助を受けて実施してまいりました土佐国府跡の発掘調査は、本年度で8年目を迎えました。

これまでの発掘調査では、奈良時代から平安時代にかけての官衙に関連すると考えられる多数の掘立柱建物跡を確認し、また、政庁の位置を示唆すると思われる溝跡など重要な遺構が発見され、国府城の様相も解明されつつあります、多大な成果を上げてまいりました。

本年度は、これまでの成果をふまえた上で政庁を確認すべく、松ノ下（横マクラ）地区と金屋地区の2ヶ所を調査対象地として、発掘が行われました。その結果、官衙に関連すると考えられる掘立柱建物跡7棟及び柵列、土壙等を検出することができました。さらには、東西に延びる溝跡も確認されており、政庁発見も間近ではないかと思われ、今後の調査に大きな期待が持たれます。

本書は、今回の貴重な発掘成果をまとめたものであり、土佐国府跡の保護に関して各方面で活用していただくとともに、埋蔵文化財の保存、普及並びに学術研究の分野においても役立てていただければ幸甚に存じます。

最後に、今回の調査にあたりご指導いただいた文化庁、奈良国立文化財研究所をはじめ、ご教示をいただいた先生方、終始ご協力を頼った南国市教育委員会ならびに地権者の方々、そして調査にご協力下さった地元比江地区及び「國府史跡保存会」の皆様方に心から感謝を申し上げる次第です。

昭和63年3月31日

高知県教育委員会

教育長 中澤秀夫

## 例　　言

- 1 本書は、高知県教育委員会が国庫補助を受けて、昭和62年度に実施した土佐國衙跡発掘調査（重要遺跡確認調査）の概要報告である。
- 2 発掘調査は、南国市教育委員会の協力を得て実施し、調査顧問である岡本健児氏の指導を得た。
- 3 発掘調査体制は次のとおりである。

　　調査顧問　岡本健児（高松短期大学教授・高知県文化財保護審議会会長）

　　調　　査　員　森田尚宏（高知県教育委員会文化振興課主事）

　　"　　廣田佳久（　　"　　"　　"　　）

　　庶　　務　楠瀬陽介（　　"　　"　　埋蔵文化財班長）

- 4 発掘調査にあたっては、松ノ下（横マクラ）地区を森田、金屋地区を廣田が担当し、執筆は次のとおり分担した。I－廣田、II－森田、III－廣田、IV－森田・廣田  
また、編集は森田と廣田が協議しこれを行った。
- 5 遺構については、ST（竪穴住居跡）、SB（櫛立柱建物跡）、SK（土壤）、SD（溝）SA（排列・堆）で標示し、遺構番号は『土佐國衙跡発掘調査報告書』第1～7集からの通し番号である。
- 6 出土遺物の写真図版中の番号については、実測図の番号と一致している。
- 7 本稿で述べる古代は、古墳時代を除くそれ以降の古代の分野をいう。
- 8 遺構の測量にあたっては、昭和58年度に設置した公共座標第IV系による基準点を使用し、実施した。なお、標高は海拔高である。
- 9 調査にあたっては、地権者の方々をはじめとする地元比江地区及び南国市教育委員会の御協力をいただいた。また、現場作業員並びに整理作業員の皆様の御援助に対し、記して感謝する次第である。
- 10 出土遺物、その他の資料は、高知県教育委員会において保管している。

## 本文目次

I 発掘調査にいたる経過 .....	1
II 松ノ下（横マクラ）地区 .....	5
1 調査方法と経過 .....	5
2 調査概要 .....	6
3 層序 .....	6
4 遺構と遺物 .....	8
(1) 包含層出土遺物 .....	8
(2) 古墳時代 .....	9
(3) 古代 .....	11
(4) 中世 .....	18
III 金屋地区 .....	21
1 調査方法と経過 .....	21
2 調査概要 .....	22
3 層序 .....	22
4 遺構と遺物 .....	25
(1) 包含層出土遺物 .....	25
(2) 古墳時代 .....	26
(3) 古代 .....	27
(4) 中世 .....	37
IV 総括 .....	41

## 挿図目次

- 第1図 土佐国府跡位置図  
第2図 土佐国府跡第1～21次発掘区設定図  
第3図 松ノ下（横マクラ）地区発掘区設定図  
第4図 " " セクション図  
第5図 " 遺構全体図  
第6図 S T - 19  
第7図 S T - 20・21  
第8図 S B - 49  
第9図 S B - 50  
第10図 S K - 67～69  
第11図 S E - 03  
第12図 金属地区発掘区設定図  
第13図 " " セクション図  
第14図 " 遺構全体図1  
第15図 " " 2  
第16図 S T - 22・24  
第17図 S B - 51・52  
第18図 S B - 53・54, S K - 70・72  
第19図 S A - 10～12  
第20図 S A - 13～15, S B - 55  
第21図 松ノ下（横マクラ）地区第III・IV層出土遺物  
第22図 " 第IV層, S T - 20・21, S B - 49・50, S K - 67出土遺物  
第23図 " S K - 68・69, S D - 46・48, P - 1～3出土遺物  
第24図 " P - 3～8出土遺物  
第25図 金属地区第II層出土遺物  
第26図 " 第II層, S K - 70出土遺物  
第27図 " S K - 70～72・74, S D - 51, S A - 13, P - 1・2出土遺物  
第28図 " P - 3～10出土遺物

## 表 目 次

- 第1表 土佐国府跡発掘調査一覧表（第1～21次調査）  
第2表 松ノ下（横マクラ）地区堅穴住居跡計測表  
第3表 “ 堀立柱建物跡計測表  
第4表 “ 土壌計測表  
第5表 “ 溝跡計測表  
第6表 金屋地区堅穴住居跡計測表  
第7表 “ 堀立柱建物跡計測表  
第8表 “ 土壌計測表  
第9表 “ 栅列計測表  
第10表 “ 溝跡計測表  
第11表 出土遺物計測表1～7

## 図 版 目 次

- 図版1 調査前全景（東より） 遺構検出状態（東より）  
図版2 遺構検出状態（西より） 拡張区遺構検出状態（東より）  
図版3 完掘全景（東より） 拡張区完掘（東より）  
図版4 東半部完掘（西より） ST-19（南より）  
図版5 ST-19（西より） ST-20（東より）  
図版6 ST-20（南より） ST-21遺物出土状態（東より）  
図版7 ST-21（南より） ST-21（南より）  
図版8 SB-49（西より） SB-50（東より）  
図版9 SK-67（南より） SK-68（北より）  
図版10 SK-69（南より） SK-69遺物出土状態  
図版11 SD-46（北より） SD-46北壁セクション  
図版12 SD-47（北より） SD-48（南より）  
図版13 SE-03検出状態 SE-03（北より）  
図版14 P-3 遺物出土状態（南より） P-3 出土遺物  
図版15 P-4 遺物出土状態（南より） 第IV層遺物出土状態  
図版16 拡張区第IV層遺物出土状態 “ ”  
図版17 調査前全景（北より） 調査前全景（北より）  
図版18 遺構検出状態（西より） 遺構完掘状態（西より）

図版19	A トレンチ（東より）	A トレンチ（西より）
図版20	B トレンチ遺構検出状態（西より）	B トレンチ完掘状態（西より）
図版21	C トレンチ遺構検出状態（西より）	C トレンチ完掘状態（西より）
図版22	D トレンチ遺構検出状態（西より）	D トレンチ完掘状態（西より）
図版23	E トレンチ遺構検出状態（西より）	E トレンチ完掘状態（西より）
図版24	F トレンチ遺構検出状態（北より）	F トレンチ完掘状態（北より）
図版25	C トレンチ拡張区遺構検出状態（北より）	C トレンチ拡張区完掘状態（北より）
図版26	E トレンチ拡張区遺構検出状態（北より）	E トレンチ拡張区完掘状態（北より）
図版27	F トレンチ北拡張区遺構検出状態（東より）	F トレンチ北拡張区完掘状態（北より）
図版28	F トレンチ南拡張区遺構検出状態（東より）	F トレンチ南拡張区完掘状態（東より）
図版29	S T - 22（南より）	S T - 24（東より）
図版30	S B - 51（西より）	S B - 53・54（北より）
図版31	S K - 70（西より）	S K - 71（西より）
図版32	S K - 72（北より）	S K - 72（北より）
図版33	S K - 74, S T - 24（北より）	S K - 74（東より）
図版34	S K - 75（西より）	S K - 76（南より）
図版35	S D - 49（西より）	S D - 49（西より）
図版36	S A - 10検出状態（北より）	S A - 10（北より）
図版37	S A - 10, P - 1（北より）	S A - 10, P - 2（北より）
図版38	S A - 11（西より）	S A - 12（西より）
図版39	S A - 13（西より）	S A - 14・15（北より）
図版40	S A - 14のピット（北より）	P - 6（東より）
図版41	P - 1遺物出土状態（北より）	P - 4遺物出土状態（北より）
図版42	P - 6遺物出土状態（南より）	P - 8遺物出土状態（東より）
図版43	第IV層, S B - 50, S K - 69, S D - 46, P - 3・6出土遺物	
図版44	第III層 山土遺物	第III層 出土遺物
図版45	第III・IV層出土遺物	第IV層出土遺物
図版46	第IV層, S T - 20・21出土遺物	S B - 49・50, S K - 67出土遺物
図版47	S K - 67・68出土遺物	S K - 67出土遺物
図版48	S K - 69出土遺物	S K - 69, S D - 48, P - 1・2出土遺物
図版49	P - 3・4出土遺物	P - 5・7・8出土遺物
図版50	第II層山土遺物	
図版51	第II層出土遺物	
図版52	第II層出土遺物	

- 图版53 S K - 71 • 74, S A - 13出土遗物
- 图版54 S K - 72出土遗物
- 图版55 S A - 13出土遗物 P - 2出土遗物
- 图版56 P - 6出土遗物 S K - 78出土遗物
- 图版57 第II层 S D - 51, P - 10出土遗物 S K - 72出土遗物
- 图版58 第II层出土遗物
- 图版59 第II层 S K - 70出土遗物
- 图版60 S K - 70 • 74, P - 7 • 8出土遗物

## I 発掘調査にいたる経過

土佐国府跡の発掘調査（重要遺跡確認調査）の8年目であり、事業費500万円、発掘面積は719.5m<sup>2</sup>であった。

昨年度の事業主体は南国市教育委員会であったが、本年度は再び高知県教育委員会が事業主体となり調査を実施した。調査対象地として昨年度の調査結果から、政庁跡の所在が推定される松ノ下（横マクラ）地区と金屋地区を選定した。この両地区は市道をはさんで隣接しており、周辺200m四方は未調査であり、立地からしても有望な地区の1つと考えられる。また、以前の発掘調査は地名（ホノギ<小字>）をもとに調査を進めて来たが、6年目の調査からは、未調査地区を対象地として調査を実施するようにした。これは、現存する地名が中世段階で移動した可能性があるためである。

調査は、松ノ下（横マクラ）地区から実施し、引き続き生姜の取り入れが終わってまもない金屋地区に移った。調査期間は、測量を含め昭和62年11月16日から昭和63年1月8日までであった。

調査にあたっては、南国市教育委員会の斡旋で土地所有者である小松幹愛氏及び永田都志夫氏に調査の快諾をいただいた。また、調査地周辺の土地所有者及び比江地区の方々、「国府史跡保存会」には多大な御協力をいただき、ここに記して感謝の意を表したい。

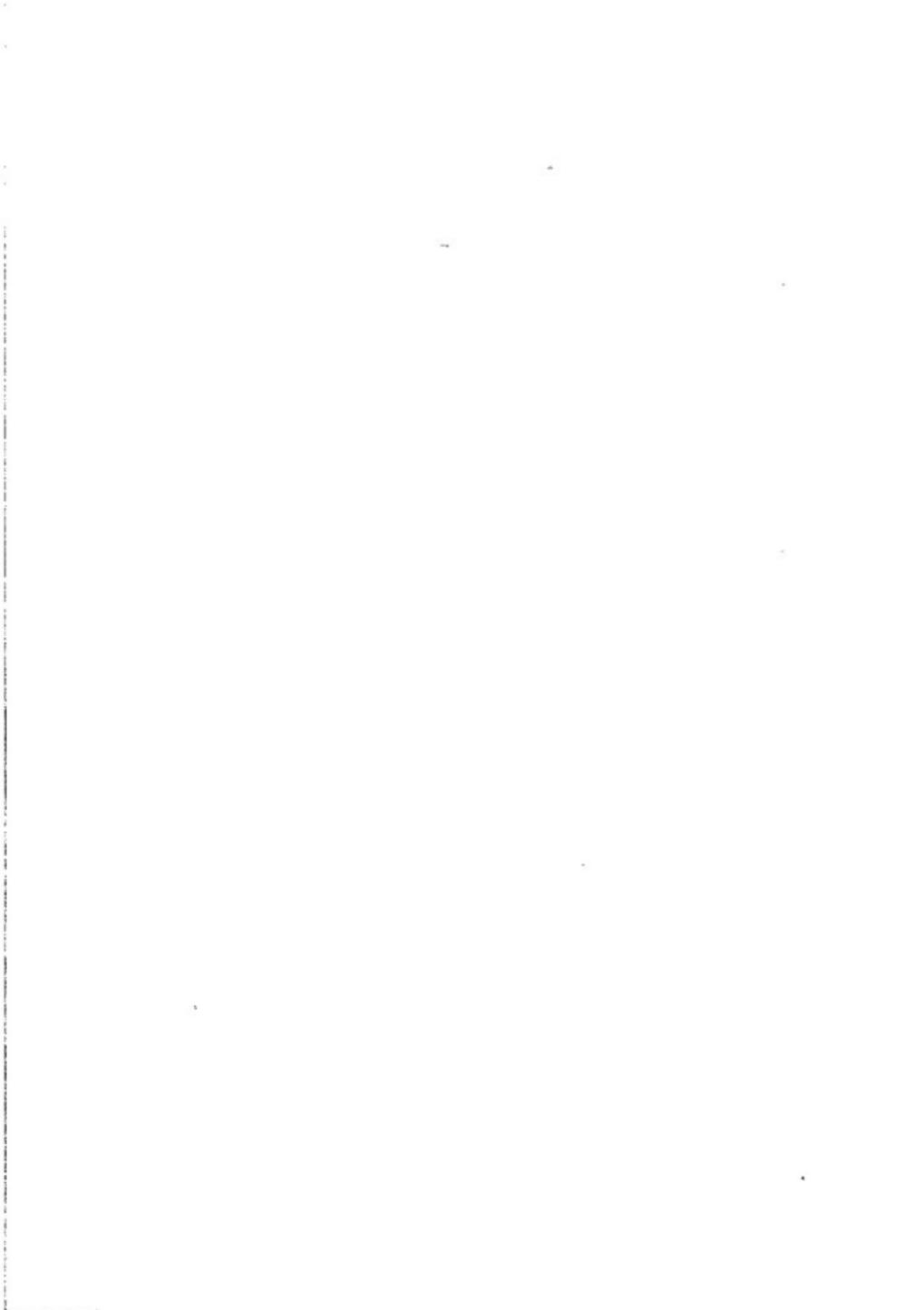
調査 次数	期 間	調査地区	調査の種類	検 出 遺 様			出土遺物
				掘立柱建物址	溝 跡	その他の	
1	52. 2. 1 ～ 52. 2. 3	新 ラ 田	緊急発掘調査 (市道改良工事)			柱 穴 緑釉陶器	
2	54. 1. 27 ～ 54. 2. 1	松 ノ 下 同 上		2 (中世)		柱 穴	
3	54. 2. 13 ～ 54. 3. 1	太郎三郎屋敷 同 上		3 (平安2)	2	土器窪 1 墨色土器・瓦器 土師器・鉄釘	
4	54. 4. 20 ～ 54. 5. 2	神 ノ 木 戸	重 要 遺 跡 確 認 調 査		3 (奈良末・ 平安初2)	土 墓 3 円面鏡・黒色土器 須恵器・土師器	
5	54. 8. 20 ～ 54. 9. 12	宮 ノ 西	緊急発掘調査 (市道改良工事)	2 (平安末 ～鎌倉)	4	土 墓 2 (奈良末) 円面鏡・転用鏡 墨書き土器 風字鏡・綠釉陶器	
6	54. 11. 6 ～ 54. 12. 11	ク 国 庁	重 要 遺 跡 確 認 調 査 (奈良末) (平安前1)	1	2 (中世)	柱 穴 円面鏡・青磁 白磁	

調査 次數	期 間	調査地目	調査の種類	検 出 逸 構			出土遺物
				掘立柱建物址	溝 跡	その他の	
7	55. 9. 28 ~ 55. 10. 4	クボノヤスキ 荷 左 が 内	緊急発掘調査 (市道改良工事)		1	土 壤 1	須恵器・青磁 常滑
8	55. 11. 17 ~ 55. 12. 15	ダ イ リ	重 要 逸 跡 確 認 調 査 (平安 3)	5	1	豊穴住居 3 貯藏穴 2	須恵器 (横糸) 縄輪陶器
9	56. 9. 10 ~ 56. 11. 4	内 日 吉 の うち 府 中	同 上	7	5	豊穴住居 2 土 壤 7	円面鏡 縄輪陶器
10	56. 10. 8 ~ 56. 10. 19	神 ノ 木 内 日 吉	緊急発掘調査 (市道改良工事)		1	柱 穴	
11	57. 9. 17 ~ 57. 11. 6	内 日 古 太郎三郎屋敷	重 要 逸 跡 確 認 調 査 (奈良 6. 平安 2)	11 (奈良 6. 平安 2)	13 (奈良 5.)	豊穴住居 2 土 壤 16	円面鏡・瓦器 青磁・白磁
12	58. 10. 5 ~ 58. 11. 7	内 堂 裏 室 ケ 内	同 上	6 (奈良~平安)	1 (6 C末~ 7 C初)	豊穴住居 5 土 壤 5	須恵器・土師器
13	58. 11. 22 ~ 58. 12. 10	内 日 古 ク ゲ	同 上	2 (奈良)	2 (中世)	井 戸 1 土 壤 8	須恵器・瓦器
14	59. 10. 1 ~ 59. 11. 1	一 ノ 坪	重 要 逸 跡 確 認 調 査 (奈良~平安)	5	3	豊穴住居 1 棚 列 5	須恵器・土師器 (奈良~平安)
15	59. 11. 16 ~ 59. 11. 22	錢 治 細	同 上	1 (奈良~平安)		土 壤 1	"
16	59. 11. 30 ~ 60. 1. 10	松 ノ 下	同 上	5 (奈良~平安)		豊穴住居 1 土 壤 4 棚 列 1	"
17	61. 10. 16 ~ 61. 11. 29	松 ノ 下	同 上	4 (奈良~平安)	4	豊穴住居 1 土 壤 10 (平安 3.)	刻書土器(須恵器)
18	61. 11. 12 ~ 61. 12. 19	南 屋 敷	同 上		1 (奈良)	土 壤 15	須恵器・土師器
19	61. 11. 20 ~ 61. 12. 15	内 日 吉	緊急発掘調査 (排水路 改修工事)		1 (平安~中世)		"
20	62. 11. 16 ~ 62. 12. 18	松 ノ 下 (横マクラ)	重 要 逸 跡 確 認 調 査 (奈良~平安)	2	3 (奈良~平安)	豊穴住居 3 土 壤 3	"
21	62. 12. 1 ~ 63. 1. 8	全 塀	同 上	5 (奈良~平安)	3 (奈良~平安)	豊穴住居 3 土 壤 7 棚 列 6	縄輪陶器

第1表 土佐国府跡発掘調査一覧表 (第1~21次調査)



第1図 土佐国府跡位置図 ( $S = 1/50,000$ )





第2図 土佐国府跡第1~21次発掘区設定図 (S=1/4,000)

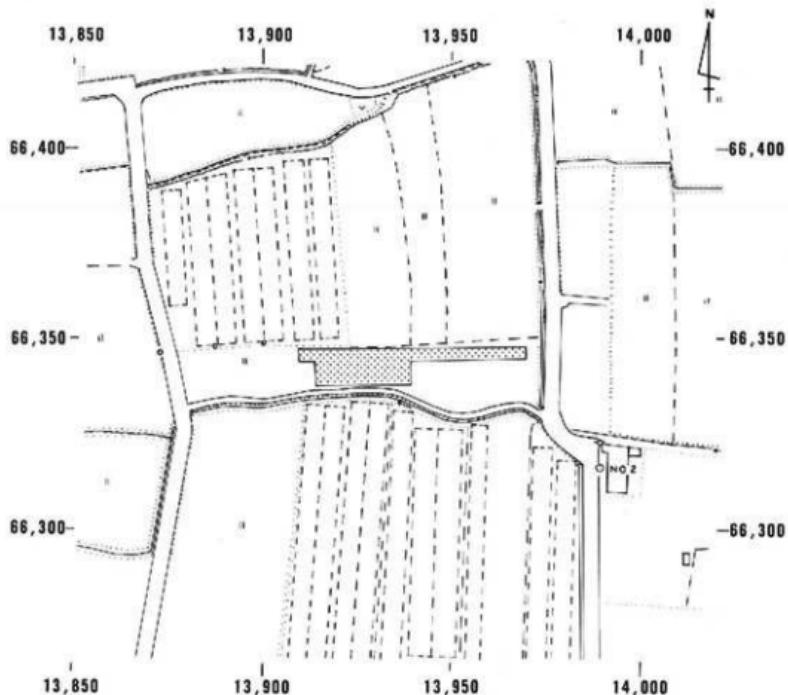
## II 松ノ下（横マクラ）地区

### 1 調査方法と経過

今回の発掘調査対象地は南国市比江字松ノ下512番地であり、標高17m前後を測る東西に長い水田である。小字（ホノギ）は横マクラと称し、昭和59・61年度に調査対象とした同じ松ノ下地区の水田の北に位置しており、その間には約0.7mの段差がみられる。また、国府推定城の中における全体的な位置としては、ほぼ中央部にあたっている。

発掘区は公共座標に準じて、幅3m、延長60mの東西方向のトレンチとし、北の畦畔に添って設定することにより、昨年度検出された溝の延長をつかむとともに、政府域に隣接する遺構の検出に努め、状況に応じて拡張を行った。

調査は東部から西部へと進め、耕作土及び床土の除去については機械力により行い、以下の



第3図 松ノ下(横マクラ)地区発掘区設定図 ( $S=1/1,500$ )

遺物包含層及び遺構検出面に至るまでは、人力により掘り下げた。その結果、やはり全面に古墳時代から中世にかけての遺構を検出したが、西半部は、東半部に比べ遺物包含層も厚く、柱穴、溝、竪穴住居址等の遺構が集中的に検出された。中でも2棟の掘立柱建物の柱穴及び南北方向の溝が検出された範囲については、官衙に関連する遺構群と推定されたので、南へ6.5m幅で長さ25mを拡張し、遺構の規模、性格を追求した。

調査期間は、遺構の実測等も含め昭和62年11月16日から12月18日までの32日間であり、最終的な調査面積は342.5m<sup>2</sup>であった。

## 2 調査概要

今回の発掘調査によって検出された遺構は、竪穴住居址3棟、掘立柱建物跡2棟、土壙3基、溝跡3条、井戸1基及び柱穴とみられるピット群である。出土遺物は、約800点と従来の調査に比べ少量であり、特に遺物包含層は薄く遺物の出土量が少ない。量的にみると中世の遺物は少なく、須恵器、土師器を中心とするが、細片であり摩耗しているものが多く、復元可能なものは少量であった。

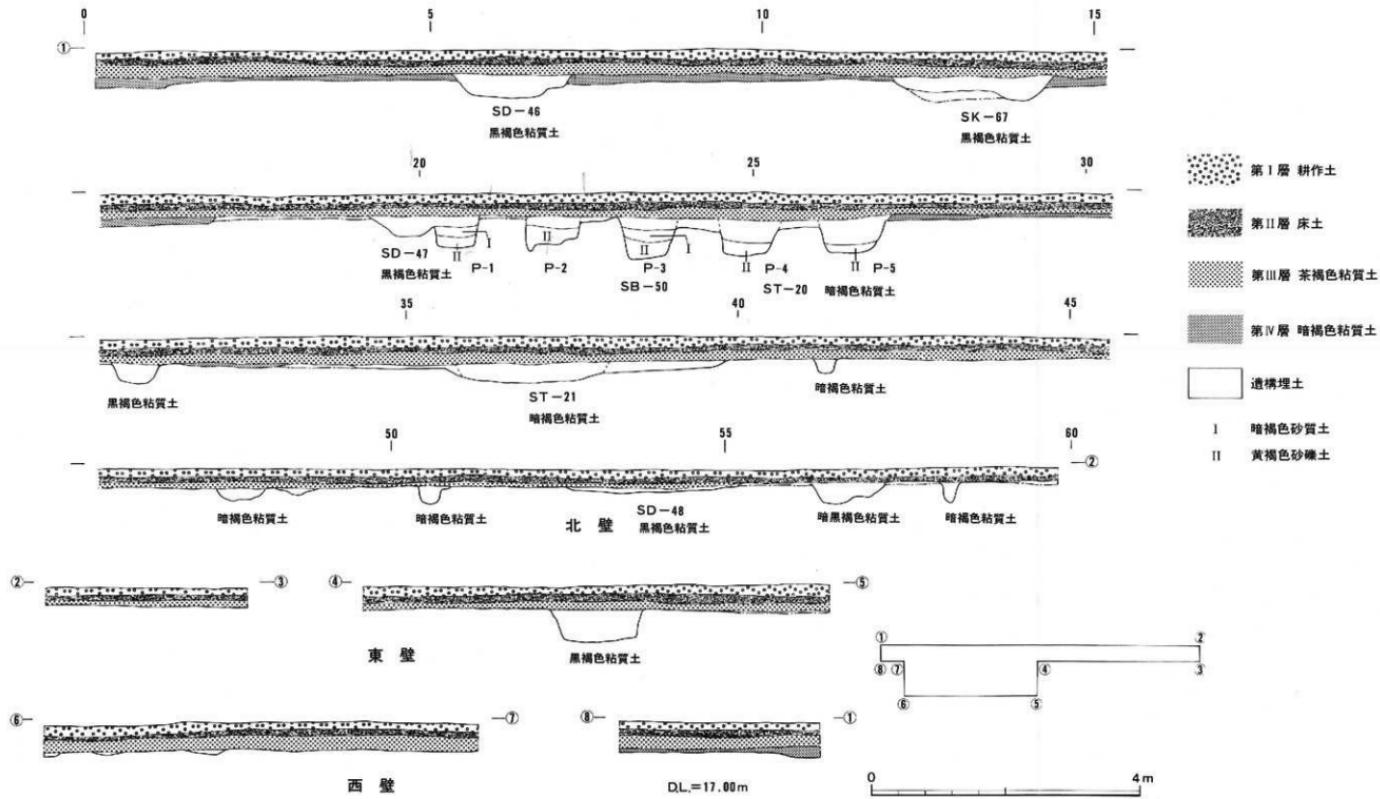
遺構は、発掘区の西半部に集中しており、拡張区においても同様であり、東部へと少なくなっている。遺構検出面は地山（第V層）上面であり、古墳時代から中世にかけての遺構が同一面で検出された。また、地山は東端部が最も高く、西部へと緩やかに傾斜している。古墳時代の遺構は竪穴住居址3棟であり、古代の遺構は掘立柱建物跡2棟、土壙3基、溝跡3条及び柱穴群である。中世の遺構としては井戸1基及び柱穴群が検出されている。なお、西半部においては自然地形とみられる不定形の落ち込みが検出されており、遺物がまとめて出土している。

## 3 層序

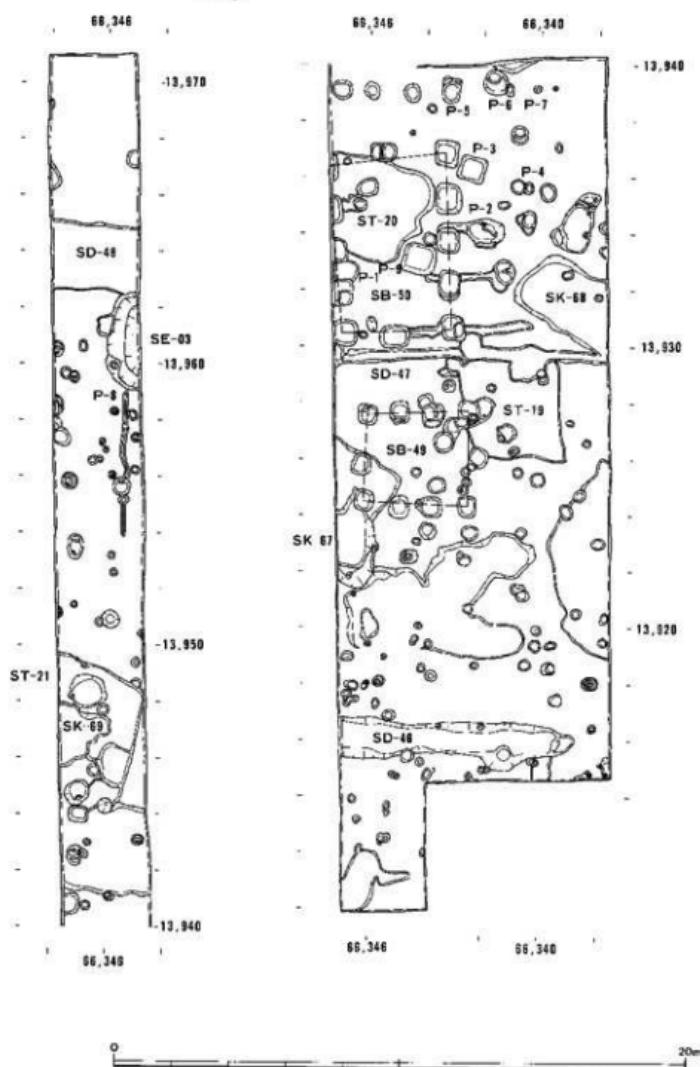
発掘区における基本層序は、次のとおりである。

- 第I層 耕作土
- 第II層 床上
- 第III層 茶褐色粘質土（遺物包含層）
- 第IV層 暗褐色粘質土（　　）
- 第V層 黄褐色粘質土（地山）

第I層は約15cm、第II層は5~10cmを測る。第III層は遺物包含層であり、西端部では約20cmを測るが、東部へと次第に薄くなり、東端部では消滅する。また、包含する遺物は他の発掘区の包含層にみられる土師質土器は非常に少なく、須恵器、土師器を中心であり、全体量も少ない。第IV層は地山である第V層への漸移層であり、やはり西端部で厚く10cm前後を測るが、中央部では消滅する。また、第III層と同じく遺物包含層であり、須恵器、土師器を中心とした遺物を出土している。西半部において検出された自然地形による落ち込みの埋土は第IV層と同じ



第4図 松ノ下(横マクラ)地区発掘区セクション図



第5図 松ノ下(横マクラ)地区造構全体図 ( $S=1/200$ )

であり、遺物も第IV層出土として取り扱った。第V層は地山であり、西端部では地表下50cm、東端部では同じく25cmで検出されており、西へと緩やかに傾斜する自然地形を呈している。また、遺構の壁面からみれば、第V層の20cm前後には砂疊層が存在しており、東端部ではこの砂疊層が一部第V層中に入り込んでいる。遺構の遺存状態は概ね良好であるが、窓穴住居址、溝及び一部の柱穴にはさわめて浅いものがあり、また、古墳時代から中世にかけての遺構検出面が第V層と同一面であるところから、やはり削平が行われたものと考えられる。

#### 4 遺構と遺物

##### (1) 包含層出土遺物

包含層出土遺物の大半は第III層出土であり、西半部において多く出土した。また、西半部の自然地形による落ち込みの埋土（第IV層）中からまとまって遺物が出土している。出土遺物の多くは須恵器、土師器であり、中世に関するものは少量であった。以下に第III・IV層出土の遺物について述べる。

##### 須恵器（第21図1～9・18～20）

1～9は第III層出土である。1～3は古墳時代の杯であり、1は蓋、2・3は身である。蓋は天井部が丸味をおびており、身の立ち上がりは短く内傾し、受部も短い。4～8は杯であり、4～6は蓋、7・8は身である。蓋は平坦な天井部をもち、口縁部はやや下方へと傾斜する。4の頂部には擬宝珠形のつまみがみられるが、5・6も同様のつまみをもつものであろう。7・8は高台をもつ底部であり、9も外傾する高台をもつが体部の立ち上り等からみれば蓋の底部であろう。18～20は第IV層出土である。18は古墳時代の杯身であり、やはり受部、立ち上りとともに短く、内傾しており器高は浅い。19は杯蓋であり、平坦な天井部と下方へ傾斜する口縁部をもっている。20は蓋の口縁部であり、大きく外反し開く。口縁端部は丸味をおびた面をなし、下端はやや垂下する。

##### 土師器（第21図10～12、第22図21）

10～12は第III層出土である。10は杯身の底部であり、やや外傾する高台をもつ。11は蓋、12は蓋の口縁部であり、頸部で屈曲し11は内湾気味に、12は直線的に開く。21は第IV層出土の蓋の口縁部であり、屈曲する頸部の外面に強くナテ調整を施す。

##### 土師質土器・瓦器（第21図14・16・17、第22図22）

14・16・17は第III層出土であり、14・17は土師質土器、16は瓦器である。14は緩やかに内湾し立ち上る体部から口縁部はやや外反する。17は回転糸切りの底部から直立気味に立ち上る体部をもち、内面にロクロ目を残す。16は粗雑な貼付高台をもつ底部であり、全面ともに摩耗している。22は第IV層出土の碗であり、回転糸切りの底部より緩やかに立ち上り直線的に開き、口縁部はやや外反し、外側にロクロ目を残す。

### 輸入陶磁器（第21図15）

15は第III層出土の白磁碗の口縁部であり、内湾気味に開く。施釉は白濁色に発色する。他に図示できなかったが濃緑色の施釉の青磁片が若干出土している。

### 土製品（第21図13、第22図23・24）

いずれも紡錘形の土鍤であり、13は第III層、23・24は第IV層出土である。23は42gと大形であるが、他の2点は16g、25gとやや小形であり、24は円筒形に近い。孔径は5~7mmである。

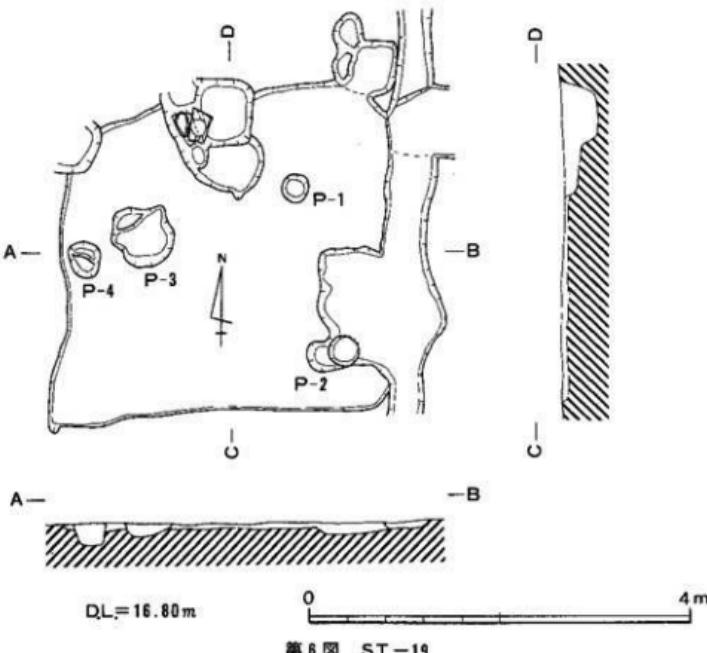
### (2) 古墳時代

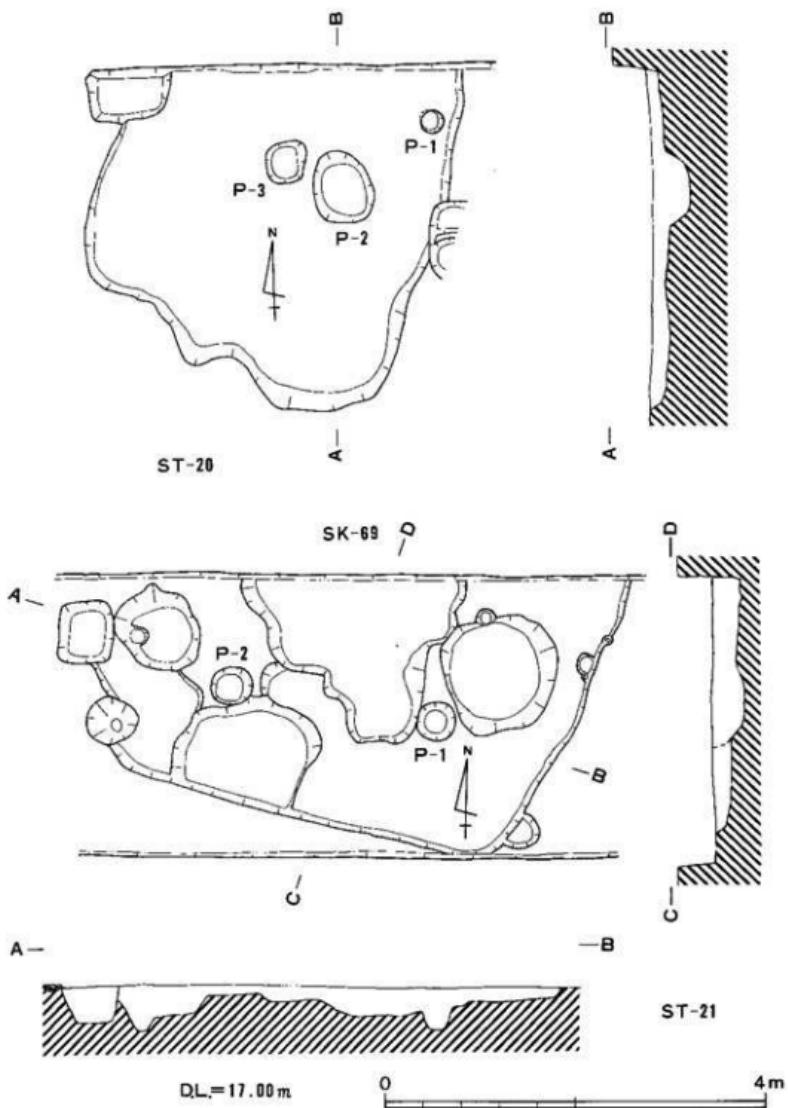
古墳時代の造構としては、竪穴住居址3棟（ST-19~21）を検出した。

#### 竪穴住居址

##### ST-19（第6図）

ST-19は発掘区の西半部、拡張区のはば中央部において検出された。平面形は一辺3.2~3.6mを測る不整方形であり、壁高は5~10cmときわめて浅い。床面上では、P1・2の2個の柱穴を確認したが他の柱穴は検出されなかった。P1は直径28cm、深さ23cm、P2は直径24cm、深





第7図 ST-20・21

さ7cmを測る。住居址の東壁はS D-47により切られており不明であり、北壁の一部はS B-49の柱穴により切られている。また、P3・4は住居址を切る新しい柱穴である。埋土は暗褐色粘質土の単一層である。

出土遺物は須恵器及び土師器の細片であり図示できるものはなかった。検山面上には古代の須恵器等が混在しており、きわめて浅いことからかなりの削平を受けていると考えられる。

#### S T-20 (第7図)

S T-20は発掘区の中央部において検出されており、北壁は発掘区にかかっており検出できなかった。平面形は一辺3.5~3.8mを測る不整方形であり、壁高は13~15cmを測り、S T-19に比べやや深い。床面上ではP-1~3の3個のピットを検出したが柱穴とみられるのはP-1のみであり、他の柱穴は確認できなかった。P-1は直径15cm、深さ14.6cmである。また、発掘区の北壁にそってS B-50に切られている。埋土は暗褐色粘質土の単一層である。

#### 出土遺物 (第22図25~27)

25~27はいずれも須恵器の杯であり、25は蓋、26・27は身である。蓋は丸味をおびた天井部をもつ。身の受部はほぼ水平にのび、立ち上がりは短く内傾する。

#### S T-21 (第7図)

S T-21は発掘区の中央部からやや東において検出された。拡張区の東に位置するため、南半部が3m幅のトレンチにかかり、北半部は発掘区の北に延びており検出できなかった。平面形は南壁が一辺4.1mを測ることから4m前後の方形と考えられる。壁高は13~15cmを測り、S T-20とほぼ同じ深さである。床面上の柱穴はP-1・2の2個が検山され、P-1は直径21cm、深さ41cmを測り、P-2は直径20cm、深さ29cmを測る。柱穴の配置からみれば、北半部にも2個の柱穴をもつと考えられ、合計4本の柱からなる竪穴住居とみられる。また、中央部のS K-69等の古代の土壤、ピットに切られており、西壁は新しい時期の集石に切られている。埋土は暗褐色粘質土の単一層である。

#### 出土遺物 (第22図28)

住居址内の重複する土壤、ピットからはかなりの量の遺物が出土しているが、S T-21に伴う遺物は少なく、少量の須恵器、土師器の細片と28の叩石が出土しているのみである。叩石は砂岩の偏平隕を使用しており、床面上から出土している。

### (3) 古代

古代の遺構としては、掘立柱建物跡3棟、土壤3基、溝跡3条を検出しており、他に建物としてはまとまらないが、多数の柱穴を確認した。

#### 掘立柱建物跡

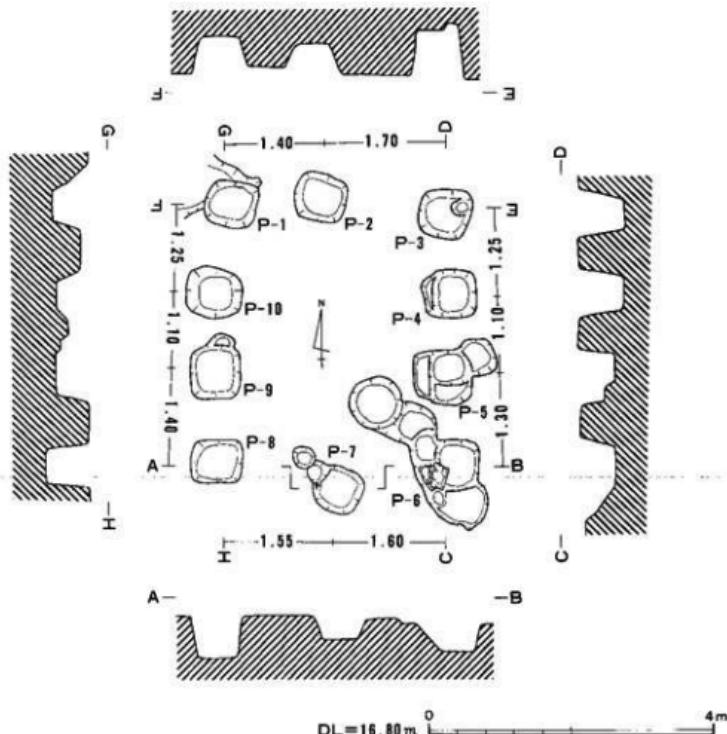
##### S B-49 (第8図)

S B-49は拡張区の中央部、やや北よりの位置において検出された。当初の3m幅のトレン

チでは北半部が確認されており、拡張することにより完掘した。

規模は梁間2間、桁行3間の南北棟であり、棟方向は柱穴の並びに乱れがあるが、ほぼ真北を示している。梁間は南北ともに3m(10尺)、桁行は東西ともに3.8m(12.6尺)を測る。柱間距離は1.10~1.70m(3.6~5.6尺)を測り、梁間に比べ桁行がやや狭い。また、北辺の中央穴(P-2)はやや西へ片寄っており、南辺の中央穴も(P-7)も南へと片寄っている。

柱穴の掘り方は一辺75~80cmの方形であり、深さは30~80cmを測るが、P-7・8を除いては48~80cmと深い。壁はほぼ垂直であり、底部は平坦である。埋土は黒褐色粘質土の單一層であるが、下部では若干の砂質土が混っている。これは、柱穴の下部%が地山の砂礫層を壁としているためである。また、柱痕はいずれの柱穴においても確認することができなかった。柱穴の中でP-1はSK-7と切り合っているが、埋土上に明瞭な差ではなく、新旧関係は不明である。なお、P-4・5には小さな段掘がみられる。



第8図 SB-49

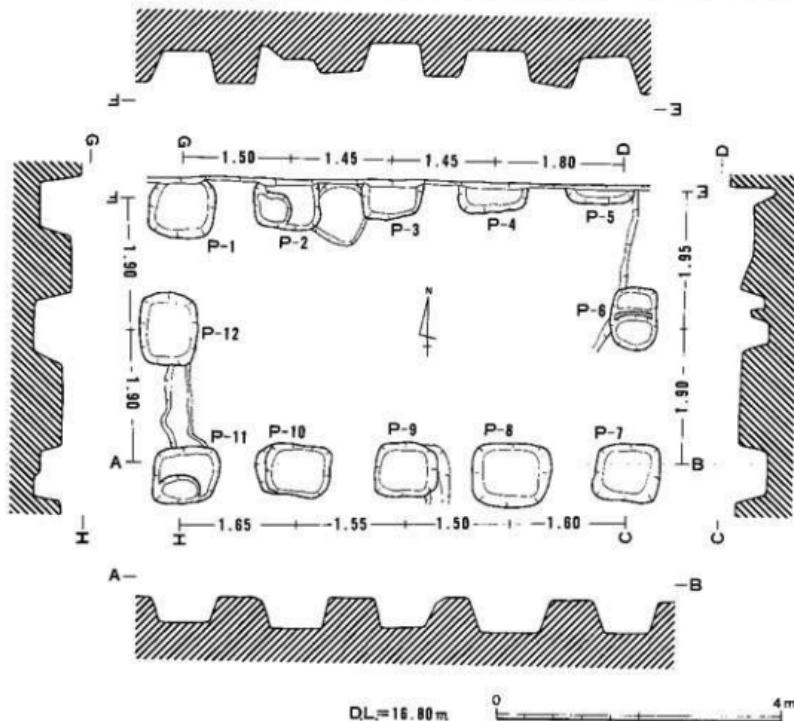
出土遺物（第22図29）

29は須恵器の杯身の底部であり、P-1の埋土を10cmほど掘り下げた位置で出土している。外傾する高台をもつ約%の破片である。P-1以外の柱穴では、P-3~5・7・10から須恵器、土師器が出土しているが、いずれも細片であり図示できるものはない。

SB-50（第9図）

SB-50は発掘区の中央部、SB-49から約2m東の位置において検出された。SB-50もSB-49と同じく3m幅のトレンチに北半部がかかっており、拡張することにより一応完掘したが、北辺の柱穴は発掘区の壁に斜めにかかっている。

規模は梁間2間、桁行4間の東西棟であり、棟方向はN-88°-Eを測り、真北に対しわずかに振れを生じている。梁間は西辺3.80m（12.6尺）及び東辺3.85m（12.8尺）を測り、桁行は北辺5.9m（19.6尺）及び南辺6.3m（21尺）を測る。柱間距離は1.45~1.95m（4.8~6.5尺）を測り、梁間は1.90m（6.3尺）及び1.95m（6.5尺）、これに対し桁行は1.45~1.65m（4.8~5.5尺）



第9図 SB-50

と梁間に比べ柱間距離は短くなっている。また、東辺の中央穴（P-6）は浅く、規模も小さくやや疑問を残すが、配置からみればSB-50の柱穴である。

柱穴の掘り方は一辺70~110cmを測り、SB-49に比べ規模が若干大きく、梁間、桁行ともに柱穴の並ぶ方向にやや長い方形を呈するものが多くみられる。壁は垂直に近く、底部は平坦である。埋土は、黒褐色粘質土の單一層のものと、黒褐色砂質土及び黄褐色砂礫土が埋土の下部にみられるものがあり、北辺の柱穴では後者の埋土がよく現れている。なお、柱痕はいずれの柱穴においても確認することができなかった。

#### 出土遺物（第22図30~32）

30・31はP-7からの出土である。30は土師器杯の口縁部であり、緩やかに内湾し一部にへう磨きがみられる。31は須恵器の高杯脚部であり、体部外側には乱雑なヘラ削りを残す粗雑な作りである。焼成も悪く摩耗している。32はP-5出土の土鍤であり、紡錘形を呈し約1/2を欠損している。孔径は5mmである。P-5・7以外の柱穴では、P-1~4・6・8・10・12から須恵器、土師器を出土しているがいずれも細片であり、図示できるものはない。

#### 土 壤

##### SK-67（第10図）

SK-67は発掘区の西半部、西寄りの位置で検出されており、北部は発掘区にかかっており完掘できなかった。

規模は長径3.5m、短径（検出長）1.35mを測り、平面形は東西に長い長楕円形を呈する。長軸方向はN-89°Eと、ほぼ東西方向を示している。深さは34cmを測り、底部は平坦である。壁は緩やかに立ち上り、西壁は段をもち掘り込まれている。埋土は黒褐色粘質土の單一層である。また、SB-49と重複しているが新旧関係は不明である。

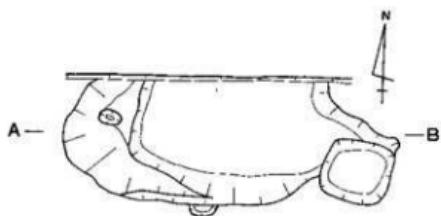
#### 出土遺物（第22図33~39）

33・34・36・37は須恵器である。33・34は杯蓋であり、33は擬立珠形のつまみをもち、34は口縁部が屈曲する。36・37は蓋である。36は台形を呈する安定した高台をもつ底部であり、37は直線的に開き端部がやや肥厚する口縁部である。35・38・39は土師器である。35は杯身の底部であり、やや外傾する高台をもち、体部は直立気味に立ち上る。38は高杯の杯部であり、口縁部は小さく屈曲し立ち上る。外側ともによく磨かれている。39は蓋の口縁部であり、強く屈曲し直線的に開き、端部は面をなす。

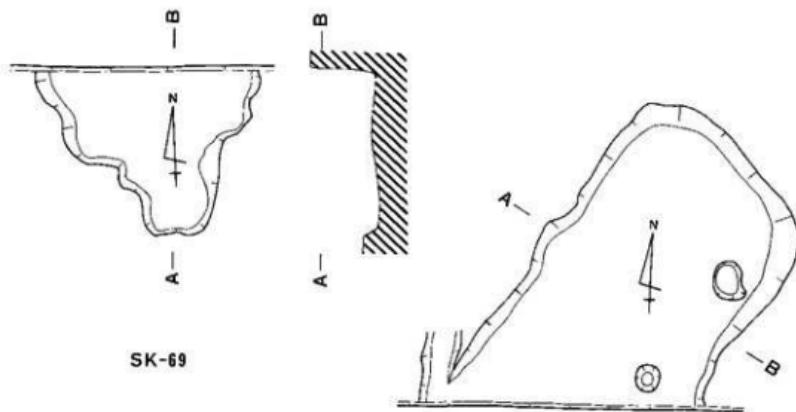
##### SK-68（第10図）

SK-68は拡張区において検出されており、やはり発掘区の南壁にかかっており、完掘できなかった。

規模は長径（検出長）3.5m、短径2.3mを測り、平面形は長方形である。長軸方向はN-35°Eであり、北西を示す。深さは17~20cmと浅く、底面は平坦である。埋土は黒褐色粘質土の單一層であり、底面上に2個のピットが確認された。なお、西端部ではSD-47と若干切り合っ



SK-67



SK-68



SK-68

DL = 16.80 m

0 4 m

第10図 SK-67・68・69

ているが、新旧関係は不明である。

#### 出土遺物（第23図40・41）

S K - 68からの出土遺物は少量である。40は須恵器の杯身であり、直立気味に立ち上がる口縁部である。41は紡錘形の土鉢であり、両端を欠損しているが22gと重く、孔径は5mmである。

#### S K - 69（第10図）

S K - 69はS T - 21の中央部において検出された。S T - 21のプランを確認した段階では、中央部に黒褐色のシミ状のプランを検出したが、明確なプランを検出したのは住居址の床面である。なお、発掘区の北壁にかかっており完掘できなかった。

規模は、検出長1.75mであり、不整形を呈している。深さは18cmを測り、底部は半坦である。埋土は黒褐色粘質土の単一層である。

#### 出土遺物（第23図42～51）

42～46は須恵器である。42・43は杯蓋であり、平坦な天井部をもち口縁部は下方へ傾斜する。44は杯身の口縁部であり、直線的に開く。45は緩やかに外反する甕の口縁部であり、端部が面をなす。46は甕と考えられる底部であり、外傾する高台をもち体部は直立し立ち上る。47～50は土師器である。47は低い高台をもつ底部であり、甕と考えられる。48は2cmを測る高く外傾する高台をもつ底部であり、やはり甕と考えられる。49・50は杯であり、口縁部はナデ調整により小さく内湾する。49の外外面には横方向のヘラ磨きが施されている。51は紡錘形の土鉢であり、6mmの孔径をもつ。

#### 溝跡

#### S D - 46（第5図）

S D - 46は発掘区の西部において検出された南北方向の溝跡である。南端部は拡張区内で自然に終わっており、北部は発掘区外へと延びている。

規模は幅0.95～1.45m、検出長8.31mを測る。深さは北端部で37.4cm、南端部では28.8cm測り、底部は半坦である。南北両端の比高差は10cm前後とわずかに南へと低くなっている。溝の方向はほぼ真北を示している。断面形は逆台形を呈し、南端部には小段がみられる。埋土は黒褐色粘質土の単一層であり、底部は地山の砂礫層である。

#### 出土遺物（第23図52）

出土遺物は少なく、埋土中からの出土であり、底面上の遺物はみられなかった。52は土師器の高杯の脚部であり、外反し直線的に開く。他に須恵器の甕、杯等が出土しているが細片のため図示できなかった。

#### S D - 47（第5図）

S D - 47は拡張区の中央部において検出された南北方向の溝跡である。S B - 49とS B - 50の中間に位置しており、S B - 50の西辺に接する。北部及び南部ともに発掘区外へと延びているが、南部は調査対象地の南辺で終わるものと考えられる。

規模は幅40~50cm、検出長9.5m、深さ10~15cmを測る。溝の方向はN-6°-ビとわずかに東へ振っている。断面形は逆台形を呈し、埋土は黒褐色粘質土の單一層である。北端部と南端部の比高差はほとんどなく底部は平坦である。また、北端部では柱穴、南端部ではSK-68と切り合っているが新旧関係は不明であり、中央部ではST-19を切っている。

出土遺物は須恵器、土師器であるが、いずれも細片であり、図示できるものではなく、出土量も少なかった。

#### SD-48(第5図)

SD-48は発掘区の東部において検出された南北方向の溝跡である。SD-48の西に接してSE-03が存在している。

規模は幅約2.4m、検出長3.0mを測り、深さは5~10cmときわめて浅い。溝の方向はN-5°-Eと、SD-47と同じくわずかに東へ振っている。底面は平坦であり、南北両端の比高差はほとんどなく水平である。埋土は黒褐色粘質土の單一層である。

#### 出土遺物(第23図53)

深さはきわめて浅いが、底面上からかなりの遺物が出土している。須恵器及び土師器の甕等が中心であるが細片が多い。53は須恵器の壺とみられ、外傾する高台をもつや大型の底部である。

#### その他の遺構

##### 造構

獨立柱建物跡以外の大半の柱穴から遺物を出土しているが、遺物を図示することができた柱穴を次ぎに述べる。

P-1~3・5は方形の掘り方をもつ柱穴である。P-1はSB-50のP-2・3に切られており、深さは18cmを測る。P-2は横円形に近い方形であり、西壁に小さく段掘がみられ、深さは26cmを測る。P-3は一边90cmを測る方形であり、深さは25cmである。壁面及び底面の一部に焼土がみられ、埋土中にも焼土と炭化物が混在していた。また、須恵器の大甕等が一括出土している。なお、P-9も一边1mの方形の柱穴であり、P-3と同じく壁面及び底面に焼土がみられ、埋土中にも焼土と炭化物が混在している。P-5は60×90cmの掘り方をもつ柱穴であり、深さは38cmを測る。P-4は円形の柱穴であり、直径40cm、深さ22cmを測る。埋土はすべて黒褐色粘質土である。

#### 出土遺物(第23図54~58、第24図59~62・64~66)

54はP-1出土の紡錘形の土壺であり、孔径は8mmと太い。55・56はP-2出土の土師器であり、55は斜格子の暗文をもつ碗、56は直線的に開く甕の口縁部である。57~60はP-3一括出土の須恵器であり、北半部に集中していた。57は長頸甕の頭部であり口縁部を欠損している。58は高台をもつ杯底部である。59は大きく外反し開く大形の甕の口縁部であり、外面に櫛描波状文が施される。60は鉢の口縁部であり、端部は丸味をおび、内外面にタタキ目を残す。61は

P-4出土の土師器甌であり、内外面に細いハケ調整が施される。62はP-5出土の須恵器杯身であり、外傾する高台をもつ。64~66はP-7出土であり、64は須恵器杯身の口縁部、65は土師器甌の高台をもつ底部であり、66は須恵器の高杯脚部である。

#### (4) 中世

中世に関する遺構は少なく、井戸1基及び柱穴群である。

##### 井戸

###### SE-03(第11図)

SE-03は発掘区の東部において南壁にかかり検出されており、完掘することはできなかつた。検出状態では20cm前後の円窪が集中しており、東端部はSD-48に接していた。

規模は直径約3.5mと推定され、深さは約90cmまでを確認することができた。上部の壁はスリット状に緩やかであるが、約50cm下からは急傾斜で落ちている。埋土は3層に分層され、I層は茶褐色粘質土であり、10~20cmの円窪を含む。II層は暗褐色粘質土であり、砂礫を含み、III層は黄褐色砂礫土である。

出土遺物は少なく、須恵器も若干含むが、土師質土器が大半を占めており、中世の井戸跡と考えられる。なお、遺物は細片であり、図示できるものはなかった。

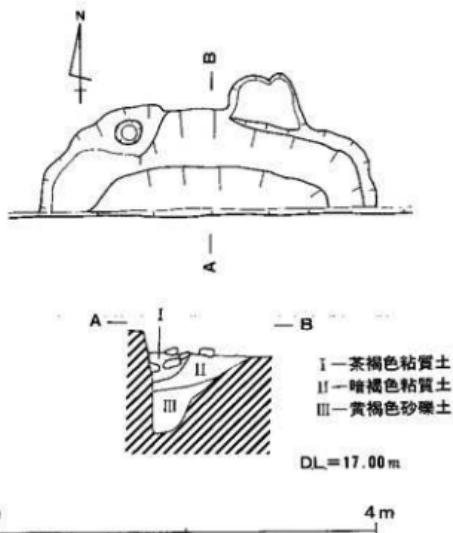
##### その他の遺構

###### 遺構

SE-03以外の中世の遺構としては、発掘区の東部と西部を中心として柱穴群が検出されている。P-6・8は出土遺物を図示した柱穴であるが、P-6は直径約80cm、深さ約30cmを測り、他の柱穴に比べ大きい。P-8は直径約30cm、深さ約20cmを測る。

###### 出土遺物(第24図63・67)

63はP-6出土の土師質土器の甌であり、回転糸切りの底部から緩やかに開く。外面にはロクロ目を残す。67はP-8出土の土師質土器の杯であり、回転糸切りの底部をもつ。



第11図 SE-03

遺構番号	平面形態	規 模 (m)	主軸方向 (Nは真北)	柱 穴 (主柱穴)	施設	面 積 (m <sup>2</sup> )	備考
S T -19	方 形	3.2×3.6	N-2°-E	2	-	11.52	
S T -20	不整方形	3.5×(3.8)	N-21°-E	1	-	(13.30)	
S T -21	"	4.1×(3.6)	N-28°-E	2	-	(11.48)	

第2表 松ノ下(横マクラ)地区堅穴住居跡計測表

遺構番号 (建物名)	梁 × 術 (間)(間)	規 模		棟 方向 (Nは真北)	面 積 (m <sup>2</sup> )	備考
		梁間 × 術行 m(尺) m(尺)	柱 間 距 離 梁 m(尺) 術行 m(尺)			
S B -49	2 × 3	3.00×3.80 (10)(12.6)	1.40～1.70 (4.6～5.6)	1.10～1.40 (3.6～4.6)	0°	11.40
S B -50	2 × 4	3.85×6.30 (12.8)(21)	1.90～1.95 (6.3～6.5)	1.45～1.65 (4.8～5.5)	N-88°-E	23.33

第3表 松ノ下(横マクラ)地区掘立柱建物跡計測表

遺構番号	平面形態	規 模			長軸方向 (Nは真北)	備 考
		長 辺 m	短 边 m	深 さ m		
S K -67	長 楼 円 形	3.50	(1.35)	0.34	N-89°-E	
S K -68	長 方 形	(3.50)	2.30	0.17～0.20	N-35°-E	
S K -69	不 整 形	(1.75)	-	0.18	-	

第4表 松ノ下(横マクラ)地区土塙計測表

遺構番号	規 模			断面形 (Nは真北)	方 向	備 考
	幅m	深 さ m	横川長m			
S D -46	0.95～1.45	0.31～0.29	8.34	逆台形	0°	南端部で終わる。
S D -47	0.40～0.50	0.10～0.15	9.50	"	N-6°-E	
S D -48	2.40	0.05～0.10	3.00		N-5°-E	非常に浅い。

第5表 松ノ下(横マクラ)地区溝跡計測表

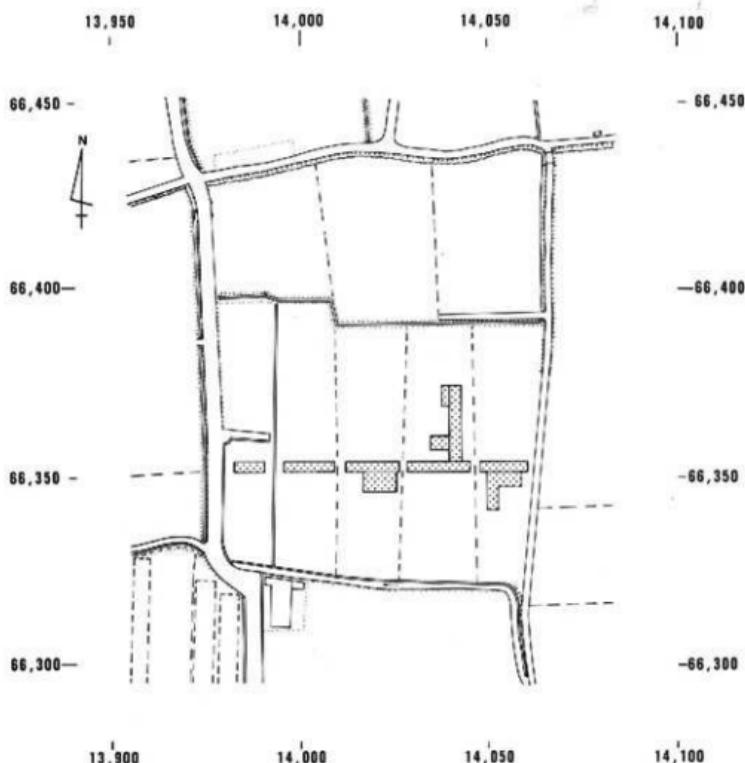


### III 金屋地区

#### 1 調査方法と経過

今次の発掘調査対象地は、ホノギ（小字）を金屋と称する南国市比江字金屋497-1・498～501番地で、第20次調査地区とは市道を挟んだ東側の標高16.9～17.5mを測る水田である。この金屋地区は、昨年度の調査結果によると政府跡が推定される有望な地区の1つであり、今次の調査まで、周辺約150m四方が未調査であった。

まず、発掘区として、公共座標を基準に調査区ほぼ中央部に、東西トレンチ5本を設定した。次に調査区北側へ南北トレンチ1本を設定した。各トレンチの規模は次の通りである。



第12図 金屋地区発掘区設定図 ( $S=1/1,500$ )

A レンチ	(東西レンチ)	3×8m
B レンチ	( " )	3×14m
C レンチ	( " )	3×14m 南側へ拡張
D レンチ	( " )	3×17m
E レンチ	( " )	3×13m 南側へ拡張
F レンチ	(南北レンチ)	3×20m 凸側へ2カ所一部拡張

調査は、A レンチから順次行い、A レンチ以外から、古墳時代から中世にかけての遺構を検出し、B・E・F レンチでは、遺構の規模確認のため拡張して調査を行った。これら遺構の検出面は、地表下約30cmから110cmと大きな比高差があった。

調査期間は、昭和62年12月1日から昭和63年1月8日までの39日間であり、最終的な調査面積は377m<sup>2</sup>であった。

## 2 調査概要

今次の発掘調査によって確認された遺構は、掘立柱建物跡5棟、竪穴住居址3棟、棚列6列、溝跡3条、土壙9基及び柱穴群とみられるピット群であった。出土遺物は、事前の表採での遺物が多くたのに比べその量は少なく、総点数約2000点であった。また、これらはほとんど細片で摩耗が著しく、復元可能なものは少なかった。これらの遺構・遺物は、古墳時代から中世にかけてのものであり、この中には官衙関連とみられるものが含まれる。

## 3 層序

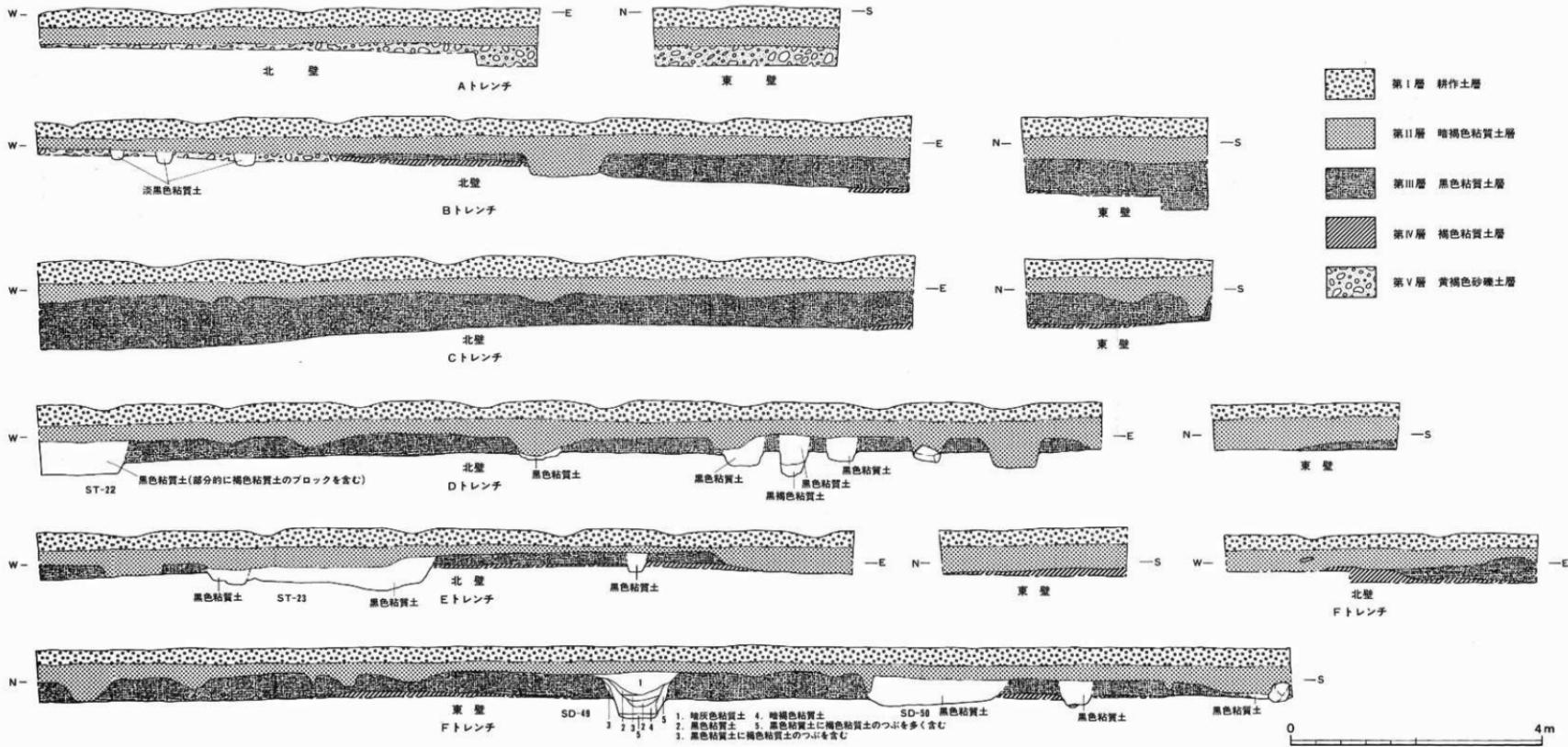
調査区において認められた基本層序は以下の通りである。

- 第Ⅰ層 耕作土層
- 第Ⅱ層 暗褐色粘質土層
- 第Ⅲ層 黒色粘質土層
- 第Ⅳ層 暗褐色粘質土層
- 第Ⅴ層 黄褐色砂礫土層

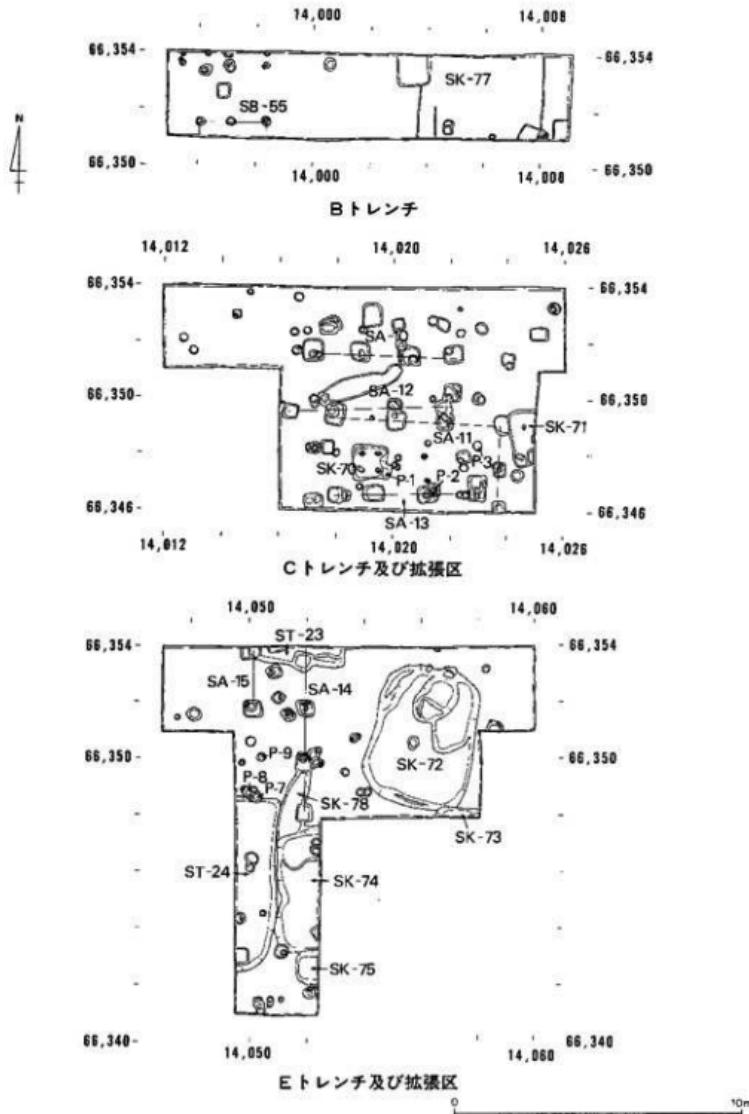
層位中、遺構が検出できたのは第Ⅳ層及び第Ⅴ層上面であった。

まず、第Ⅱ層は調査区全域で認められた遺物包含層であり、中世における削平整地の結果による人為堆積層とみられ、中世の遺構はこの層中より掘り込まれている。摩耗の著しい土師質土器片を多く含み、須恵器、土師器等も混在していた。また、この層は比江地区ほぼ全域で認められる。

第Ⅲ層は、調査区中央部を中心に認められた黒ボク（音地と呼ばれる鬼界カルデラの火山灰に腐植土の混入したもの）を多量に含む層で、東・西・北端部では確認されなかった。比江地区では、自然地形が低い部分においてこの黒ボクは認められるが、この厚さは一般的に20~30



第13図 金屋地区発掘区セクション図

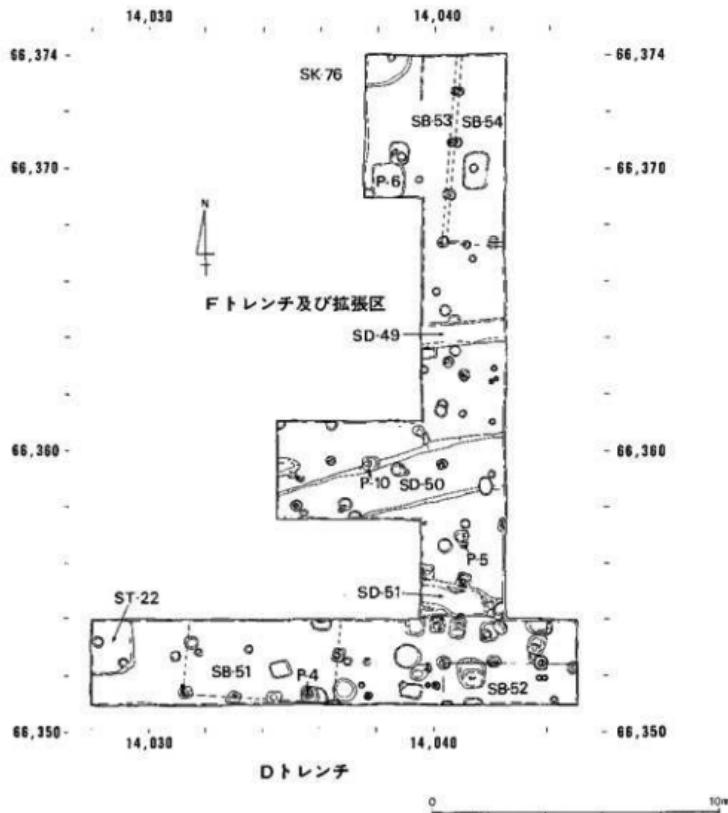


第14図 金屋地区遺構全体図1 (S=1/200)

cmである。今次の調査区では、Bトレンチの東端が最も厚く約85cmを測り、西北へはその厚さが急激に薄くなり、東へはその厚さが徐々に薄くなっている。また、BトレンチとCトレンチの間から南西に向かってさらに厚く堆積している。堆積の厚い部分では、最下層部が完全に腐植せず褐色を帯びている箇所もあった。この層は、窪んだ状態の自然地形に黒ボクが堆積上とともに流れ込んだものと考えられる。

第IV層は、無遺物層で大半の造構の検出面となっている。

第V層は、基盤の砂礫土層であり、A・Bトレンチで認められた層序である。



第15図 金屋地区造構全体図2 (S=1/200)

#### 4 造構と遺物

##### (1) 包含層出土土遺物

遺物包含層は第II層のみであり、出土遺物には、須恵器、縄釉陶器、土師器、土師質土器、瓦質土器、青磁、白磁、常滑、土鍾、石鍋等がみられ、その大半は土師質土器である。

##### 須恵器（第25図68～81）

68・69は古墳時代のもので、68が杯身、69が蓋の口縁部の破片で、口縁部外側に3ヶ所の波状文を施す。

70～81は、古代の須恵器である。70は杯蓋で平らな天井部には擬宝珠形のつまみをもつ。71～77は、高台を有する杯身であり、71の高台は底部端やや内側に付く。75・76は、大形の杯身である。77は、内傾する平面を有し、ほぼ真下におりるやや長い高台をもつ。78は、高台をもたない杯で、内外面に火だしきがかかる。79は皿、80は高杯の脚部であり、91は壺である。

##### 縄釉陶器（第25図82）

器形は杯身であるが、器面は摩耗が著しく、縄釉の残っている部分は内面と外底面の一部である。

##### 土師器（第25図83～85）

83・84は杯であり、83は平らな底部から体部は斜め上外方へほぼ直ぐ延び、84は平らな底部から斜め上方へ外反して延びる。85は皿である。

##### 土師質土器（第26図86～96）

86・87は杯で、底部は回転糸切りによる。

88～96は皿で、底部はすべて回転糸切りであり、93の底部には板状圧痕が残る。また、体部から口縁部の形態により、内湾気味に上がるものと、斜め上外方へ直ぐのびるものとに分けることができる。

##### 瓦質土器（第26図97・98）

97・98は鏡で、紐状の鈎が付く。胸部から口縁部にかけての形態は、97が内傾しているのに対し、98は外傾している。

##### 輸入陶器（第26図99・100）

99は青磁の碗であり、内面に花文がみれる。

100は白磁の碗で、玉縁の口縁をもつ。

##### 常滑（第26図101）

壺の口縁部であり、端部はN字状口縁が退化した形となっている。

##### 土鍾（第26図102～107）

すべて土師質の円筒形の土鍾で、重量は102が15.3g、103が15.0g、104が22.5g、105が15.5g、106が9.0g、107が10.0gである。

石鍋（第26図108）

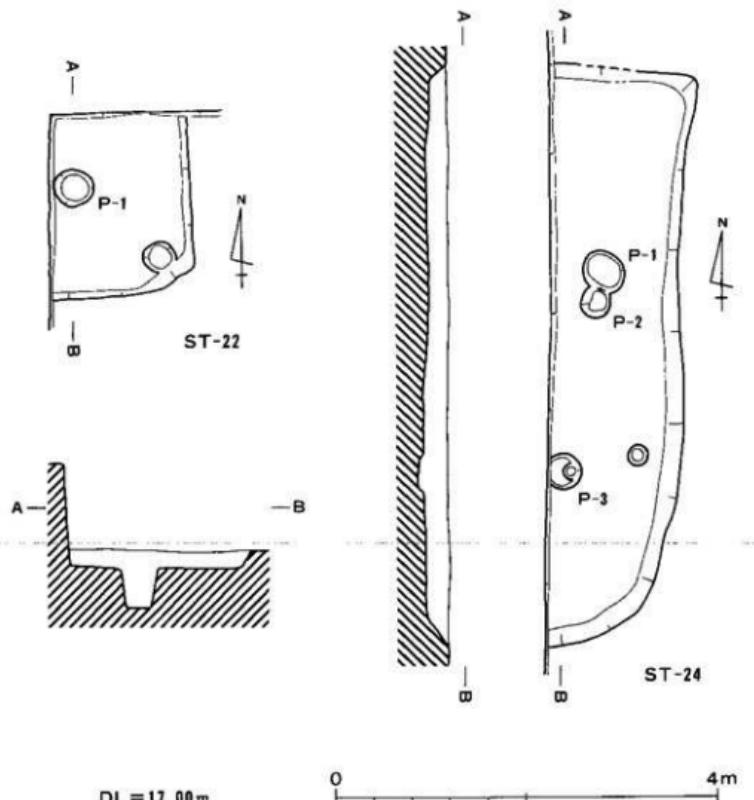
石鍋の口縁部であり、口縁部下には、長さ1.1cm、厚さ0.7~1.7cmの鉢を作り出しており、外側全面には媒が付着する。石質は滑石である。

(2) 古墳時代

堅穴住居址

S T - 22 (第16図)

S T - 22は、Cトレーニチ西端部、第IV層上面で検出した。遺構の西側と北側は調査区外に延びており、全容は不明である。遺構自体は、第III層中より掘り込まれていると考えられるが、埋土がほとんど同一であったため、第III層を除去しなければそのプランは確認できなかった。



第16図 ST-22・24

平面形は方形とみられ、長辺1.9m以上、短辺1.5m以上を測る。長軸方向は、N-3°-Wである。壁は平坦な床面から急な傾斜で上がっており、その高さは約0.2mで床面の標高は16.348～16.402mを測る。埋土は、黒色粘質土を主とし部分的に褐色粘質土をブロック状に含む。付属遺構として、2個のピットが確認されている。その内P-1は主柱穴の1つとみられ、径0.4m、深さ0.61mを測る。他の1個は深さが4cmと浅く、柱穴とは考えられない。出土遺物が皆無であり、詳細な時期については不明であると言わざるを得ない。

#### ST-23

ST-23は、Eトレンチ北端やや西寄り、第IV層上面で検出した。遺構のほとんどは調査区外へ延びており、全容は不明である。また、遺構には堀跡の柱穴2個が掘り込まれていた。平面形は方形とみられ、長辺3.2m、短辺0.65m以上を測る。長軸方向は、N-84°-Wである。壁は、ほぼ平坦な床面から急な傾斜で上がっており、その高さは約25cmで、床面の標高は16.582～16.708mを測る。埋土は、黒色粘質土が主で、一部褐色粘質土の小ブロックを含む。付属遺構としては、調査部分が少なかったため、明確なものが検出されなかったが、Eトレンチ北壁沿いに不整形プランの深さ約5cmの落ちこみと、南壁東側で小さな段部を検出した。遺物としては、古墳時代後期とみられる須恵器、土師器片が比較的多く出土しているが、すべて細片であり、図示できるもの、また、詳細な時期決定となるものはなかった。

#### ST-24（第16図）

ST-24は、Eトレンチ拡張区南側、第IV層上面で検出した。遺構の半分以上が調査区外へ延びており、全容は不明である。遺構はSK-74に切られ、さらにSK-78によって北東部が掘り込まれている。平面形は方形とみられ、長辺6.15m、短辺1.5mを測る。長軸方向は、N 2°-Eである。壁は、ほぼ平坦な床面から南側はやや緩やかに、それ以外は急な傾斜で上がっており、その高さは約15cm、床面の標高は16.583～16.716mを測る。埋土は、黒色粘質土單一層であった。付属遺構として、3個のピットを確認した。規模は、P-1が長辺0.45m、短辺0.4m、深さ9cm、P-2が径0.3m、深さ14cm、P-3が径0.35m、深さ12cmで全般的に浅いが、P-2・3が上柱穴となるのではないかと考えられる。遺物としては、古墳時代後期とみられる須恵器、土師器片が多く出土しているが、すべて細片で図示できるものはなかった。

### （3）古代

#### 掘立柱建物跡

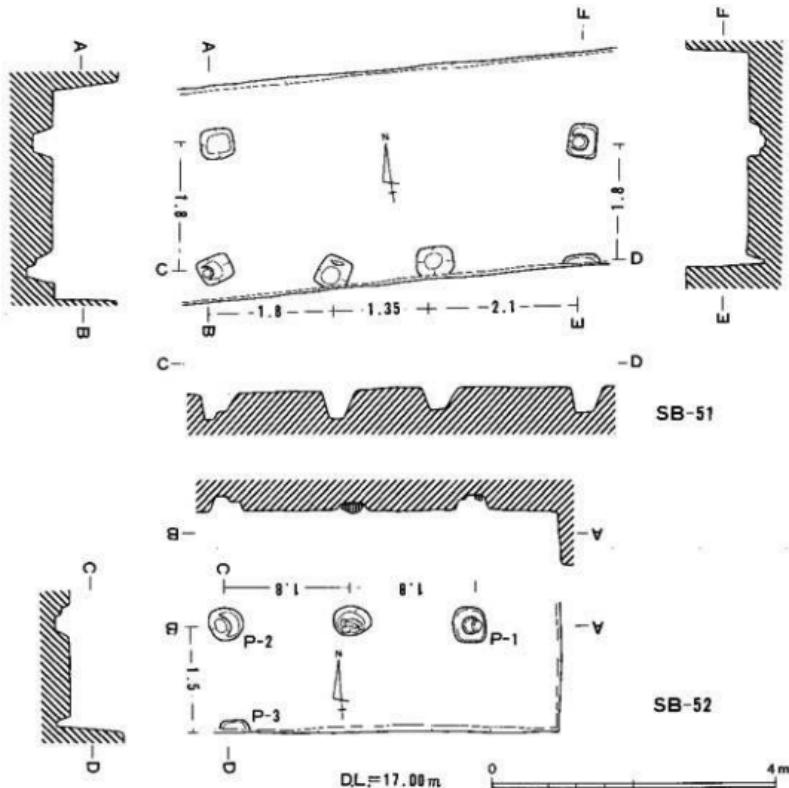
##### SB-51（第17図）

SB-51は、Dトレンチ西側で、第IV層上面で検出した桁行3間（総長約5.25m、17.5尺）梁間1間（約1.8m、6尺）以上の東西棟掘立柱建物であり、梁が調査区外へ出ている。棟方向

は、N $-85^{\circ}36'$  Wである。柱間寸法は、桁行が約1.35~2.1m (4.5~7尺)と区々で、梁間が約1.8m (6尺)である。柱穴の掘り方は方形で、一辺40~50cmを測り、柱径は15~20cmである。これら柱穴の深さは、検出面より32~40cmで、底面の標高は16.209~16.351mを測る。埋土は、黒ボクを含む黑色粘質土であり、出土遺物は皆無であった。

SB-52 (第17図)

SB-52は、Dトレーニチ東端部、第IV層上面で検出した桁行2間 (約3.6m, 12尺)以上、梁間 (約1.5m, 5尺)以上の東西棟獨立柱建物であり、桁・梁とも調査区外へ延びている。棟方向は、N $-89^{\circ}45'$  Wではほぼ真北に対し直角な形で建てられている。柱間寸法は、桁行が約1.8



第17図 SB-51・52

m (6尺) 等間隔、梁間が約1.5m (5尺) であり、桁行の方が1尺ほど長くなっている。柱穴の掘り方は、P-1が一边45cm の方形である以外はほぼ円形で径42~52cmを測り、柱径は約20cmである。これらの柱穴の深さは、検出面より10~22cmで、底面の標高は16.482~16.610mを測る。埋土は、黒ボクを含む黒色粘質土であり、遺物は、P-2より内面に同心円文のタクキ印が残る須恵器の壺胴部の細片が1点、P-3より土師器の細片が1点出土したのみで、図示できるものはなかった。

#### S B-53 (第18図)

S B-53は、Fトレンチ北端部、第IV層上面で検出した桁行3間 (約5.4m, 18尺) 以上、梁間1間 (約1.8m, 6尺) 以上の南北棟掘立柱建物であり、桁・梁とも調査区外へ延びている。棟方向は、N-4°20' Eであり、真北よりやや東へ振っている。柱間寸法は、桁行・梁間とも約1.8m (6尺) 等間隔である。柱穴の掘り方はすべて円形で、径30~35cmを測り、柱径は約10cmである。これら柱穴の深さは、検出面より15~40cmで、底面の標高は16.321~16.543mを測る。埋土は、黒ボクを含む黒色粘質土であり、出土遺物は皆無であった。

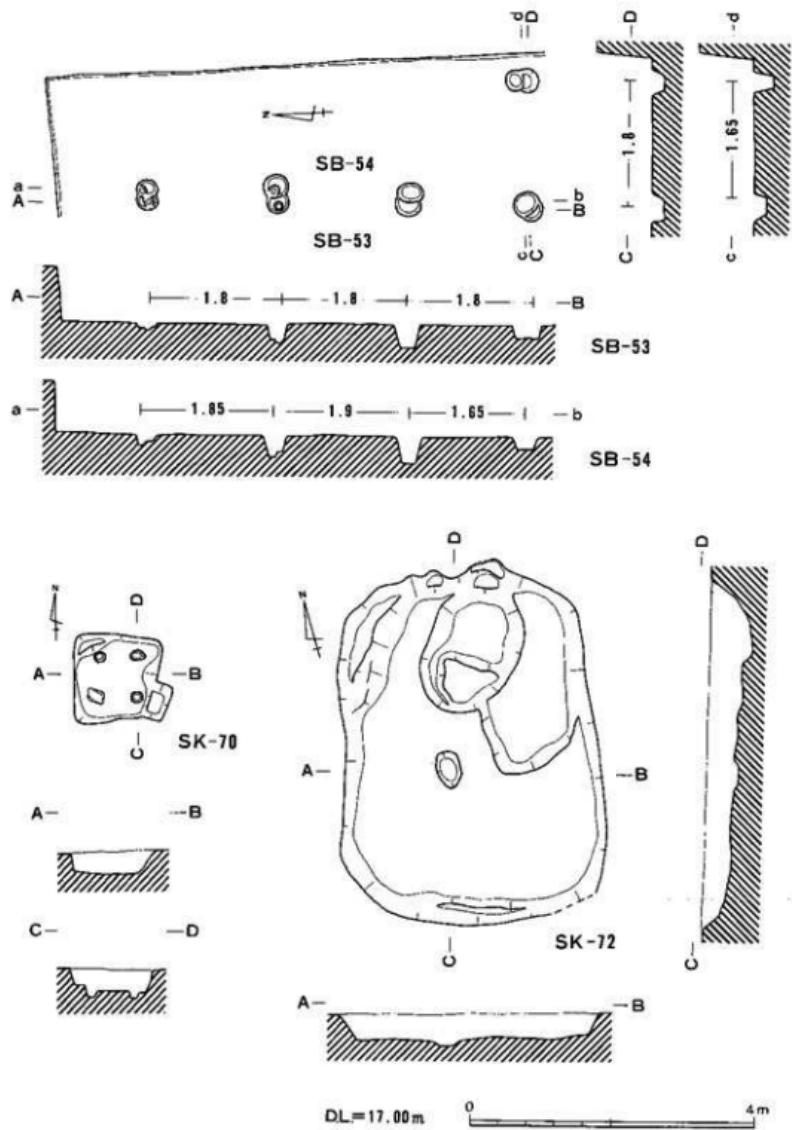
#### S B-54 (第18図)

S B-54は、Fトレンチ北端部、第IV層上面で検出した桁行3間 (約5.4m, 18尺) 以上、梁間1間 (約1.65m, 5.5尺) 以上の南北棟掘立柱建物であり、桁・梁とも調査区外へ延びている。また、S B-53の建て替えによる建物と考えられる。棟方向は、N-4°42' Eで、S B-53とほとんど同じである。柱間寸法は、桁行が1.65~1.9m (4.5~6.3尺) と日々であり、梁間が1.65m (5.6尺) である。柱穴の掘り方はすべて円形で、径30~40cmを測り、柱径は約10cmである。これら柱穴の深さは、検出面より12~35cmで、底面の標高は16.268~16.495mを測る。埋土は、黒ボクを含む黒色粘質土であり、出土遺物は皆無であった。

### 土 壤

#### S K-70 (第18図)

S K-70は、Cトレンチ拡張区、第IV層上面で検出した。古代の柱穴 (P-1) を切って掘り込まれていた。平面形は、ほぼ方形を呈し、長辺1.25m、短辺1.05m、深さ0.32mを測る。長軸方向は、N-0° Eである。断面形は、逆台形を呈し、壁はほぼ平坦な底面より急角度で上がっている。埋土は、黒ボクを含む黒色粘質土單一層であった。付属遺構として、四隅にピット3個と隣1個及び北西端部で小さな段部を確認した。ピット及び隣は、0.6m (2尺) 等間隔で配置されており、遺構を覆うための柱穴、縫隙ではなかったかとみられる。これら柱穴は、径12~15cm、深さ約10cmを測る。出土遺物は図示できた同タイプの土師器が主で、他に須恵器の細片も少量あった。



第18図 SB-53・54, SK-70・72

### 出土遺物（第26・27図109～112）

#### 土師器

すべて杯で、底部は、111が摩耗が著しく不明である以外は、回転ヘラ切り底である。109・110は、器壁が比較的厚いのに対し、111・112は薄く、口縁部の形態により、上外方へ向くものとやや外反するものに分かれ、さらに、端部を丸く仕上げるものと細く仕上げるものに分けることができる。

#### SK-71

SK-71は、Cトレンチ拡張区東端、第IV層上面で検出したが、遺構は調査区外へ延びており、全容は不明である。SΛ-11の柱穴の1個に掘り込まれていた。平面形は、ほぼ方形を呈し、長辺2.05m、短辺1.05m以上、深さ0.35mを測る。長軸方向は、N $10^{\circ}$ -Wである。断面形はほぼ逆台形を呈し、やや中産みの底面より急角度で上がっている。埋土は、黒ボクを含む黒色粘質土單一層であった。付属遺構として、発掘区の壁際でピット1個を確認したが、性格は不明である。遺物は、SK-70同様土師器を中心に、少量の須恵器が出土したが、そのほとんどは細片で図示できたのは3点であった。

#### 出土遺物

##### 須恵器（第27図113・114）

両者とも皿で、口縁部は底部から斜め上方へ延び、端部は113が細く、114が丸くしあげられている。

##### 土師器（第27図115）

皿で、口縁部は小さく内湾し丸く仕上げる。内外面にはヘラ磨きを施す。

#### SK-72（第18図）

SK-72は、Eトレンチ東側及び拡張区、第IV層上面で検出した。南東端でSK-73に切られている。平面形は、隅丸方形を呈し、長辺5.20m、短辺3.50m、深さ0.60mを測り、短辺は北側が南側よりやや細く掘り込まれている。長軸方向は、N $15^{\circ}$ -Eである。断面形は、舟底状を呈する箇所と逆台形状を呈する箇所があり、堤は、やや起状する底面より、比較的急角度で上がっている。埋土は、黒ボクを含む黒色粘質土が主で、一部黒色粘質土に褐色粘質土をブロック状に含む。付属遺構として、北側で平面形が不整橢円形を呈する浅い落ち込みとそれに隣接する平面形が不整形を呈する浅い平場と、中央部で径35～50cm、深さ6cmを測るピット1個等を確認したが、その性格については不明確である。確認したピットは、極めて浅いもので柱穴と考えるには無理がありそうである。出土遺物には、タタキ目のある須恵器をはじめとして、古代までのものが多量にあったが、ほとんどが細片で図示できたのは須恵器3点のみであった。

#### 出土遺物

##### 須恵器（第27図116～118）

116は、杯身で底部にはハの字形に開く高台が付く。口縁部は欠損する。

117は、蓋または壺の胸部の破片で、内外面にはタタキ目が残る。

118は、短頸壺の口縁部の破片で、流れ込みによるものとみられる。

#### SK-73

SK-73は、Fトレンチ拡張区東南端、第IV層上面で検出した。遺構は、北西端でSK-72を切っており、また、その大半が調査区外へ延びている。平面形は方形とみられ、長辺1.40m以上、短辺0.85m以上、深さ0.20mを測る。長軸方向は、N-85°-Wである。断面形は、ほぼ逆台形を呈するとみられ、壁は底面より急角度で上がっている。埋土は、黒ボクを含む黒色粘質土であった。付属遺構とみられるものは確認されなかったが、底面東側がやや落ち込んでいる。出土遺物は皆無であった。

#### SK-74

SK-74は、Fトレンチ拡張区、第IV層上面で検出した。遺構の半分は調査区外へ延びている。平面形は方形とみられ、長辺4.45m、短辺1.6m以上、深さ0.45mを測る。長軸方向は、N-3°-Eである。断面形は、ほぼ逆台形を呈し、壁は底面より急角度で上がっている。埋土は、黒ボクを含む黒色粘質土であった。付属遺構として、北壁に沿って平面形が不整形の浅い落込みと深さ2～8cmの極めて浅いピット3個を確認した。北側に落込みがある点でSK-72と共に通している。出土遺物には、占墳時代から古代にかけての須恵器、土師器が比較的多くあつたが、ほとんど細片で図示できたのは須恵器1点である。

#### 出土遺物

##### 須恵器（第27図119）

杯であり高台を有しない。口縁部は、平らな底部より斜め上方へやや内湾気味に上がり、端部を細く仕上げる。

#### SK-75

SK-75は、Fトレンチ拡張区南側、第IV層上面で検出した。遺構の半分は調査区外へ延びているとみられる。平面形は方形とみられ、長辺1.35m以上、短辺0.75m以上、深さ0.25mを測る。長軸方向は、N-0°-Eである。断面形は、舟底形を呈し、壁は底面より急角度で上がっている。埋土は、黒ボクを含む黒色粘質土であった。付属遺構とみられるものは確認されなかったが、南側に小さな段部を有する。出土遺物は皆無であった。

### SK-76

SK-76は、Gトレンチ北の拡張区北端、第IV層上面で検出した。遺構の大半は調査区外へ延びており、全容は不明である。平面形は、円形か隅丸方形になるのか不明確で、長径1.55m、深さ0.16mを測る。断面形は、逆台形を呈するとみられ、壁は平坦な底面よりやや角度を持って上がる。埋土は、黒ボクを含む黒色粘質土であった。付属遺構としてピット1個を確認したが、深さが5cmと浅く柱穴とは考えにくい。遺物は、古墳時代から古代にかけての須恵器、土師器の細片が数点出土したのみで図示できるものはなかった。

### 溝跡

#### SD-49

SD-49は、Fトレンチ北寄り、第IV層上面で検出した東西に延びる溝で、さらに東西に延びる。また、溝は第IV層中より掘り込まれたとみられる。溝は、幅0.8~0.9m、深さ約0.3mを測るが、断面をみると実際は幅約1.4m以上、深さ0.75m以上あったものと推定される。主軸方向は、N-85°-Eである。断面形は概ね逆台形を呈し、壁はやや西に傾斜する基底面より急角度で上がっている。埋土は、主に黒色粘質土であり、部分的に褐色粘質土の小ブロックを含む。遺物は、須恵器、土師器の細片が数点出土したのみで図示できるものではなく、時期の決め手となるものはなかった。

#### SD-50

SD-50は、Fトレンチ南寄り、第IV層上面で検出した東西に延びる溝であり、さらに、東西に延びる。方向からするとCトレンチで検出した溝状の染が、この溝と同一の可能性がある。溝は、幅1.9~2.0m、深さ約0.15mを測る。主軸方向は、N-76°-Eである。断面形は概ね舟底形を呈し、壁は緩やかに上がっている。埋土は、黒色粘質土單一層であった。遺物は、土師器の細片が7点出土したのみで、図示できるものはなかった。

#### SD-51

SD-51は、Fトレンチ南端、第IV層上面で検出した東西に延びる溝で西へさらに延びるが、東へは浅くなりほとんど終っている。溝は、幅0.75~1.3m、深さ0.28mを測る。主軸方向は、N-86°-Wである。断面形は、舟底形を呈し、壁は急角度で上がる箇所と緩やかに上がっている箇所がある。埋土は、主に黒色粘質土であり、下層に褐色粘質土の小ブロックを含む。遺物は、土師器の細片が22点出土したのみで、図示できたのは土錐1点である。

#### 出土遺物

##### 土錐（第27図120）

円筒形の土錐で、直徑約4mmの円孔が穿たれている。

## 擧列

### SA-10 (第19図)

SA-10は、Cトレンチ中央部、第IV層上面で検出した東西の掘跡である。方向は、N-88°12' - Wと真北にほぼ直交している。規模は、3間（総長約5.1m、17尺）で、柱間寸法は、約1.5~1.8m（5~6尺）である。柱穴の掘り方は、方形で、一辺65~80cmを測り、柱径はP-3に残る柱痕から推定すると径約20cmと考えられる。また、P-1・2には礎盤とみられる平偏な跡が残存しており、かつ、それは焼け赤色を呈していた。これら柱穴の深さは、検出面より20~32cmで、底面の標高は16.017~16.118mを測る。埋土は、主に黒ボクを含む黒色粘質土で褐色粘質土をブロック状に多量に含んでいた。遺物は、須恵器、土師器の細片が数点出土しているのみであった。

### SA-11 (第19図)

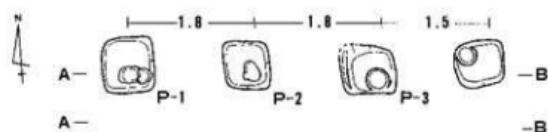
SA-11は、Cトレンチ拡張区、第IV層上面で検出した東西L字状の掘跡であり、東西の方向は、N-87°14' - WとSA-10とはほぼ同じである。規模は、東西3間（約5.85m、19.5尺）、南北2間（約3.0m、10尺）以上で、柱間寸法は、約1.5~2.25m（5~7.5尺）である。柱穴の掘り方は、P-1が不整形を呈する以外はほぼ方形で一辺40~80cmを測り、柱径は径約20cmと考えられる。これら柱穴の深さは、検出面より10~30cmで、底面の標高は16.163~16.317mを測る。埋土は、黒ボクを含む黒色粘質土であった。遺物は、土師器を中心に20点ほど出土したが、すべて細片で図示できるものはなかった。

### SA-12 (第19図)

SA-12は、Cトレンチ拡張区、第IV層上面で検出した東西の掘跡であり、SA-11とは切り合っている。方向は、N-87°21' - Eであり、SA-10・11・13とは方向を異にする。規模は、3間（5.55m、18.5尺）以上で、柱間寸法は、1.5~2.25m（5~7.5尺）と区々になっている。柱穴の掘り方は、方形で、一辺50~70cmを測り、柱径は径約20cmと推定され、P-1はSA-12の柱穴と重なっている。また、P-2で検出された跡は厚さ25cmと厚く、SA-11の柱穴で検出したような礎盤の石とは考えにくく、柱を抜き取った際に混入したものとみられる。これら柱穴の深さは、検出面より17~42cmで、底面の標高は16.100~16.190mを測る。埋土は、黒ボクを含む黒色粘質土であった。出土遺物は皆無であった。

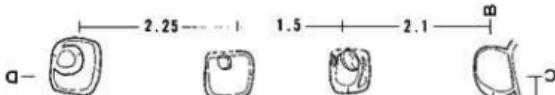
### SA-13 (第20図)

SA-13は、Cトレンチ拡張区南端、第IV層上面で検出した東西の掘跡である。方向は、N-89°16' - Wとほぼ真北に直交しており、SA-10・11と同じ方向を表す。規模は、3間（総長5.1m、17尺）で、柱間寸法は、約1.5~1.8m（5~6尺）である。柱穴の掘り方は、方形で、

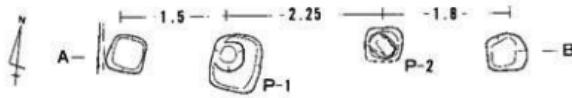


D—

C—



**SA-11**



**SA-12**

DL=17.00m

0

4m

第19図 SA-10~12

一辺50～70cmを測り、柱径は径約20cmとみられる。これら柱穴の深さは、検出面より25～40cmで、底面の標高は16.114～16.230mを測る。埋土は、黒ボクを含む黒色粘質土であり、遺物は、土師器が多く出土し、図示できたのは3点である。

#### 出土遺物

##### 土師器（第27図121～123）

121・122は皿で、121は器壁が薄く口縁部はやや外反する。122は121に比べ器壁が厚く、口縁部は斜め上方へ延び端部を丸く仕上げる。

123は甕で、内傾して延びる胴部から口縁部は大きく外反する。外面には縦方向のハケ調整を施す。

#### SA-14（第20図）

SA-14は、Fトレーニチ中央部、第IV層上面で検出した南北の堀跡で、北へさらに延びる可能性がある。方向は、N 0°46' - Eであり、ほぼ真北を向く。規模は、3間（約5.4m、18尺）以上で、柱間寸法は、約1.8m（6尺）等間隔である。柱穴の掘り方は、方形で、一辺50～65cmを測り、柱径は径約20cmと推定される。これら柱穴の深さは、検出面より35～40cmで、底面の標高は16.466～16.552mを測る。埋土は、黒ボクを含む黒色粘質土である。遺物は、須恵器、土師器の細片が11点出土したが、図示できるものはなかった。

#### SA-15（第20図）

SA-15は、Fトレーニチ、第IV層上面で検出した南北の堀跡で、さらに北へ延びる。方向は、N 0°46' - Eで、SA-14とは全く同一方向を示し、また、約1.8m（6尺）離れている。規模は、1間（約1.95m、6.5尺）以上である。柱穴の掘り方は、方形で、一辺70～75cmを測り、柱径は径約20cmとみられる。これら柱穴の深さは、検出面より21～26cmで、底面の標高は16.597～16.635mを測る。埋土は、黒ボクを含む黒色粘質土である。遺物は、土師器が10点ほど出土したが、細片で図示できるものはなかった。

#### その他の遺構と遺物

##### 遺構

遺構のほとんどは柱穴とみられ、掘り方は、方形ないし円形を呈し、黒ボクを含む黒色粘質土を埋土とする。出土遺物を掲載できた柱穴は、P-1～6の6点であった。

##### 出土遺物（第27・28図124～129）

124は、土師器の杯でP-1からの出土である。底部は回転ヘラ切りである。

125は、須恵器の甕の把手でP-2からの出土である。府中地区出土のものと酷似している。古墳時代のものとみられ、混入したものと考えられる。

126は、須恵器の杯でP-3からの出土である。第II層出土の77と同じタイプである。

127は、須恵器の高杯でP-4からの出土であり、杯底部と脚部の破片である。

128は、須恵器の杯でP-5からの出土である。底部の破片で、ハの字状に開く細長い高台が付く。

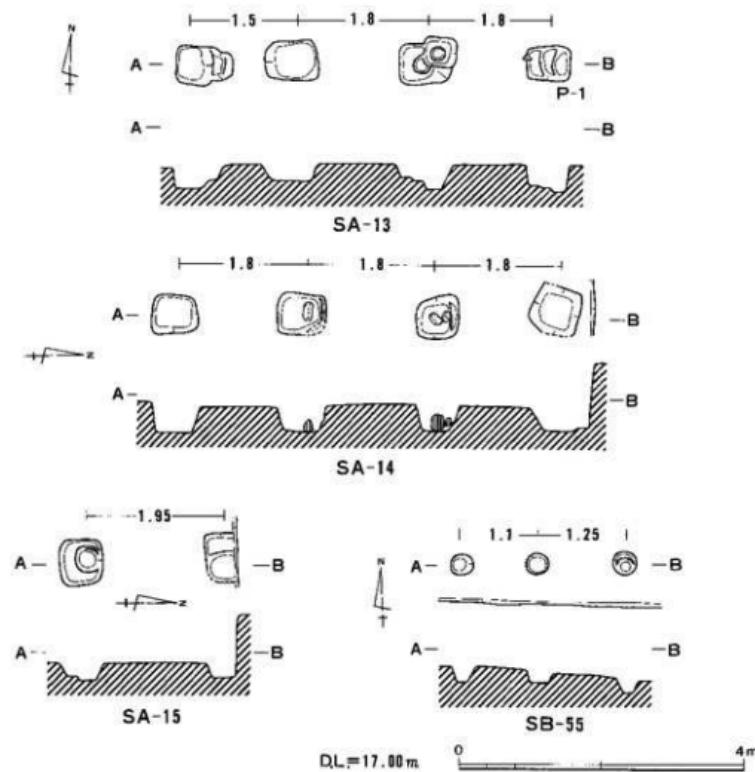
129は、須恵器の壺でP-6からの出土である。肩部から口縁部にかけては、くの字状に開く。

#### (4) 中世

##### 掘立柱建物跡

SB-55(第20図)

SB-55は、Bトレンチ西側、第III層上面で検出した2間×数間の南北棟掘立柱建物と考え



第20図 SA-13~15, SB-55

られるもので、大半は南側に延びているとみられる。検出したのは北の梁間2間（総長2.35m）分のみであり、棟方向は、N-0°58' Eと考えられる。柱間寸法は、1.10mと1.25mで、一定していない。柱穴の掘り方は、円形で径25~35cmを測り、柱径は径約15cmである。これら柱穴の深さは、検出面より15~23cmで、底面の標高は16.359~16.555mを測る。埋土は、暗褐色粘質土單一層である。遺物は、須恵器、土師器、土師質土器の細片が数点出土したのみである。

## 土 壤

### SK-77

SK-77は、Bトレーン東寄り、第Ⅲ層上面で検出した。遺構の北側は調査区外へ延びている。平面形はほぼ方形を呈し、長辺1.15m以上、短辺1.10m以上、深さ0.14mを測る。長軸方向はN-0° Eである。断面は逆台形を呈し、壁は平坦な底面より急角度で上がっている。埋土は、暗褐色粘質土單一層である。遺物は、須恵器、土師器、土師質土器の細片が20数点出土している。

### SK-78

SK-78は、Eトレーン拡張区、第Ⅲ層上面で検出した。遺構は、ST-24、SK-74、SA-14を切って掘り込まれていた。平面形は舟形を呈し、長辺4.00m、短辺1.10m、深さ0.13mを測る。長軸方向は、N-14°-Eである。断面形は、舟底形を呈し、壁は、ほぼ平坦な底面より緩やかに上がっている。埋土は暗褐色粘質土單一層であり、遺物は、須恵器、土師器、土師質土器、瓦器等があり、その量も比較的多かった。

### 出土遺物（第28図130・131）

両者とも瓦質の鍋の胴部から口縁部にかけての破片である。130は内湾して上がる胴部から、口縁部は短く外反し、131は口縁直下に縦状の鶴が付く。

## その他の遺構と遺物

### 遺 構

ほとんどが直径30cm未満の柱穴と考えられるピットで、古代の柱穴より数は少ない。また、比江地区全体からみても、内日吉地区を中心とする南部に中世の遺構が多く、この北部では、その数が減少する。これら遺構の埋土は暗褐色粘質土を主とするものである。遺物を掲載できたのは、P-7~10の柱穴から出土したものである。

### 出土遺物（第28図132~139）

132~135は小皿で、P-7からの出土である。底部はすべて回転糸切りであり、造りもほぼ同じである。133の底部には板状压痕が残る。

136・137は、P-8からの出土であり、両者とも土師質土器で136が小皿、137が杯である。

底部は回転糸切りである。

138は土師質土器の小皿で、P-9からの出土である。底部は回転糸切りによる。

139は大形の円筒形の土器で、P-10からの出土である。形態的には古代のものとみられ、混入したものと考えられる。

造構番号	平面 形態	規 模 (m)	主軸方向 (Nは真北)	柱 穴 (主柱穴)	施 設	面 積 (m <sup>2</sup> )	備 考
S T - 22	方形	1.9以上×1.5以上	N- 3°-W	1	-	(2.85)	
S T - 23	"	3.2×0.65以上	N- 84°-W		-	(2.08)	
S T - 24	"	6.15×1.5以上	N- 2°-E	2	-	(9.22)	

第6表 金星地区堅穴住居址計測表

造構番号 (建物名)	規 模			面 積 (m <sup>2</sup> )	棟 方 向 (Nは真北)	備 考
	梁 × 柱 (間) (間)	梁間 m × 柱行 m (尺) (尺)	柱 間 距 離 梁m(尺) 柱m(尺)			
S B - 51	1以上×3	1.8以上×5.25 (6) (17.5)	1.8 (6)	1.35~2.1 (4.5~7)	(5.85)	N-85°36' -W
S B - 52	1以上×2以上	1.5以上×3.6以上 (5) (12)	1.5 (5)	1.8 (6)	(5.4)	N-89°45' -W
S B - 53	1以上×3以上	1.8以上×5.4以上 (6) (18)	1.8 (6)	1.8 (6)	(9.72)	N- 4°20' -E
S B - 54	1以上×3以上	1.65以上×5.4以上 (5.5) (18)	1.65 (5.5)	1.65~1.9 (5.5~6.3)	(8.91)	N- 4°42' -E
S B - 55	2以上×1以上	2.35× (-)	1.1~1.25 (-)	-	-	N- 0°58' -E
						中世

第7表 金星地区掘立柱建物跡計測表

遺構番号	平面形態	規 模			長軸 方向 (Nは真北)	備 考
		長辺m	短辺m	深さm		
SK-70	方 形	1.25	1.05	0.32	N - 0° - E	
SK-71	"	2.05	(1.05)	0.35	N - 10° - W	
SK-72	隅丸方形	5.20	3.50	0.60	N - 15° - E	
SK-73	方 形	(1.40)	(0.35)	0.20	N 85° - W	
SK-74	"	(4.45)	(1.50)	0.45	N - 3° - W	
SK-75	"	(1.35)	(0.75)	0.25	N - 0° - E	
SK-76	不 明	(1.55)	-	0.16	-	不明確
SK-77	方 形	(1.15)	1.10	0.14	N - 0° - E	中世
SK-78	舟 形	4.00	1.10	0.13	N - 14° - E	"

第8表 金屋地区土壤計測表

遺構番号	規 模			断面形	方 向 (Nは真北)	備 考
	幅 m	深さ m	検出長 m			
S D - 49	0.8~0.9 (1.4)	0.3 (0.75)	3.0	逆台形	N 85° - E	
S D - 50	1.9~2.0 (2.5)	0.15 (0.35)	8.2	舟底形	N - 76° - E	
S D - 51	0.75~1.3 (1.5)	0.28 (0.4)	3.01	"	N - 86° - W	

第9表 金屋地区溝跡計測表

遺構番号	規 模			方 向 (Nは真北)	備 考
	柱穴数	全長 m (尺)	柱間距離 m (尺)		
S A - 10	4	5.1 (17)	1.5~1.8 (5~6)	N - 88° 12' - W	
S A - 11	6	8.85 (29.5)	1.5~2.25 (5~7.5)	N - 87° 14' - W	
S A - 12	4	5.55 (18.5)以上	1.5~2.25 (5~7.5)	N - 87° 21' - E	
S A - 13	4	5.1 (17)	1.5~1.8 (5~6)	N - 89° 16' - W	
S A - 14	4以上	5.4以上 (18)	1.8 (6)	N - 0° 46' - E	
S A - 15	2以上	1.95以上 (6.5)	1.95以上 (6.5)	N - 0° 46' - E	

第10表 金屋地区柵列計測表

## IV 総 括

本年度の調査は、松ノ下（横マクラ）地区、金屋地区の2地区を対象地として実施された。松ノ下（横マクラ）地区は、昭和59・61年度に調査を行った発掘区の北東に位置し、昨年度に南屋敷地区で検出された溝跡の延長の有無を追求する目的である。金屋地区は土佐国府推定地の中でも、その中央部に位置する未調査地であり、政庁跡所在地の確認のためには有望な地区であり、また、調査を必要とする地区でもあった。

調査の結果としては、松ノ下（横マクラ）、金屋両地区とともに、政庁に比定でき得る遺構は検出されなかつたが、掘立柱建物跡、溝跡、櫛列、土壙等の遺構が確認され、中でも溝跡は、東西と南北の方向性をもつものであり、政庁、国衙の解明にはひとつの大きな手掛かりになり得ると考えられるものである。以下に両地区における遺構、遺物について若干の考察を加え、調査結果のまとめとしたい。

### 松ノ下（横マクラ）地区

当発掘区では、古代の遺構としてSB-49・50の2棟の掘立柱建物跡、SD-46～48の3条の溝跡、SK-67～69の3基の土壙を検出した。掘立柱建物跡は方形の掘り方をもつものであり、SB-49は2×3間の東西棟、SB-50は2×4間の南北棟である。両者ともに東北及び真北に直交する棟方向をもち、規画性をみることができる。規範的には、従来の調査で検出されている掘立柱建物跡と同様であり、その性格としては周辺官衙の建物群の一部と考えることができるのではないだろうか。時期的追求には、出土遺物が量的に少なく明確にすることはできないが、SB-49のP-1出土の杯、SB-50のP-7出土の高杯等からみて、奈良時代末から平安時代にかけてと考えてよいのではないだろうか。

溝跡3条はいずれも南北方向に走るものであり、掘立柱建物跡と同じく真北を示している。中でもSD-46は幅1m前後、深さ30cm前後と規模も大きく、南端部で終ってはいるが方向性も加味して考えれば、国衙域にかかる溝の一端ではないかとの推定もなされるものである。また、SD-47は幅30cm前後と規模が小さいが真北の方向をもつことから、官衙群の区画を示す溝としての機能を考えることができるようである。SD-48については、須恵器等も出土しているものの、きわめて浅く、そのもつ意味は不明確である。

土壙3基については、今回検出された遺構の中ではまとめて遺物を出土している。しかし、平面形、位置等、統一性を示すものは存せず、性格不明と言わざるを得ないものである。

ピットの中では、P-3・8の両ピットが一辺1m前後の方形の掘り方をもち、しかも焼土、炭化物が残存し、注目されるものである。特にP-3からは須恵器の人面口縁部等を出土していることからしても柱穴以外の使用目的が考慮される。

今次の松ノ下（横マクラ）地区の調査では、出土遺物も少なく、各遺構の時期についても曇

のあるものとして把握しなければならなかった。しかし、2棟の掘立柱建物跡及び南北方向の溝跡の存在は、国衙域における官衙の在り方を示すものとして把握され、国衙域の中心部へより近づきつつあると考えられるものではないだろうか。

### 金屋地区

昨年度の調査結果によると、政庁跡存在の可能性を有する地区の1つにあげられており、しかも表面採集による遺物の密度も高く、今次の調査に大きく期待が持たれた地区であった。また、今次の調査まで周辺約150m四方は全くの未調査地区であったのである。そのような多くの期待が持たれたこの地区の今次の調査で確認でき得たものは、古墳時代、古代、中世の各時代の各遺構であり、それに伴う遺構群であった。

古墳時代の堅穴住居址は3棟検出されている。それらは発掘区の関係で全て完掘しておらず、かつ出土遺物の量が乏しく、明確な小時期の決定には至らなかった。しかし、他地区的調査例と住居址内に落ち込んだ遺物包含層の遺物等から推定すれば6世紀後半から7世紀前半にかけてのものと言うことができ得るのではないかろうか。

古代のものは、掘立柱建物跡4棟、土壙7基、溝跡3条、柵列6列、及び多数の柱穴とみられるピットである。掘立柱建物では、SB-51の柱穴の平面形が方形である以外、他の建物のそれは、すべて円形で、かつ小規模であり、直接官衙に関係するものと考えがたい。一方、SB-51は規模、柱穴の大きさからして、官衙に付随する周辺の建物とみた方が妥当と考えられる。しかし、その時期については、棟方向からして国衙盛行期以降のものとしてよくはなかろうか。

土壙の内、SK-70・71からは、比較的多くの遺物が出土しており、その出土遺物からみるとSK-70は10世紀前後、SK-71は9世紀前後のものと考えられる。SK-72は、土壙としては規模の大きなもので、深さも深く、穴倉的性格のものとみられる。また、同形態のSK-74も同じものとみてよからう。先述したSK-70・71以外の土壙は、時期決定の出土遺物が極めて少量で、その確定な時期決定はなし難いが、古代のものであることには異論は認められない。

溝跡は、3条ともFトレーナーで確認したものであり、すべて東西に延びている。SD-49・51は、ほぼ真北に直交するが、SD-50はその方向をやや異にする。確認し得た部分が短く、かつ出土遺物が皆無に近い状態であるため、今次の調査だけではその性格等について言及することができない。しかし、SD-49は、従来調査した溝の中では、その規模といい方向、掘り方も非常に良好で官衙を区画する溝との関連性も考慮され得るもので、今後の追求の必要性を感じる。

柵列は、C・Eトレーナーで確認されたもので、いずれも比較的しっかりした柱穴で構成され、その方向もほぼ真北に平行ないし直交しているものである。出土遺物は少ないが、SA-13の遺物は9世紀前後のものとみられる。そして、他の柵列もこれとほぼ同じ方向を示すところか

ら、同時期のものと考えてよからう。ただ、SΛ-10～13はともに隣接しており、多少の時期を考えなければならないことは当然である。

建物跡の確認には至らなかったが、P-6及びその東部約2.4m程離れて検出された柱穴は、規模も大きく、そこに大きな建物跡の存在が推測される。今次の発掘区外であるので、全容は出せなかつたが、その時期は、P-6の検出遺物からして、8世紀後半から9世紀前半にかけてのものであることは間違いない。

中世関係では、掘立柱建物跡1棟、土壙2基が検出されている。うち、SK-78出土の遺物は、その形態からして13世紀のものと考えられる。そして、遺物包含層出土の中世の遺物もほぼこの時期のもので占められていたことも付加しておきたい。

以上、金屋地区では、政庁跡の一部となるものは確認できなかつたが、今後、今次の調査で確認した溝跡等の規模・性格について追求していくことが、比江地区北東部を解明する一つの有力な手掛りとなるのではなかろうか。

番号	器種 形	出土層位 出土遺構	法量(cm)			特徴
			口徑	器高	底径	
1	須恵器 杯蓋	第三層 出土遺構	14.2	3.1	—	丸味をおびた天井部をもち、約1/2をヘラ削り。
2	〃 杯身	〃	14.0	(2.1)	—	口縁部の破片である。受部は外上方へ短く伸び、立ち上がりは内傾する。
3	〃 〃	〃	11.9	(2.9)	—	丸味をおびた体部をもち、受部、立ち上がりとともに短く、立ち上がりは内傾する。
4	杯蓋	〃	—	(1.3)	—	平坦な頂部に圓宝珠形のつまみをもつ。
5	〃 〃	〃	14.2	(1.4)	—	口縁部の破片であり、口縁部は小さく下方へ屈曲し終わる。
6	〃	〃	21.7	(1.4)	—	平坦な天井部をもち、口縁部は若干下方へ傾斜し、端部は丸く終わる。白灰色を呈し、摩耗する。
7	杯身	〃	—	(2.4)	8.6	底部であり、台形を呈する直立気味の高台をもつ。
8	〃 〃	〃	—	(2.0)	7.5	底部であり、台形を呈する高台をもち、高台外面に強くナデ調整を施す。白灰色を呈し摩耗する。
9	〃	〃	—	(4.2)	10.2	底部であり、外傾する台形の高台をもつ。高台上部外面の一部にヘラ削りがみられる。
10	土師器 杯	〃	—	(2.1)	10.8	わずかに外傾する台形の高台をもつ。赤褐色を呈し、やや摩耗する。
11	〃 壺	〃	12.4	(4.8)	—	強く屈曲し、内溝気味に明く口縁部であり、端部は丸味をおびた面をなす。外面ともに摩耗する。
12	〃 壺	〃	14.4	(4.6)	—	直線的に開く口縁部であり、外面ともにナデ調整。赤褐色を呈し、胎土、焼成ともに良好。
13	土鉢	〃	全長 (5.6)	全幅 2.0	重量(g) 16	筋縫形を呈する十鉢であり、端部を欠損する。 孔径は7mmである。
14	土師質土器 杯	〃	14.0	(3.2)	—	緩やかに内溝し立ち上がる体部から口縁部はやや外反し終わる。外面ともにロクロによるナデ調整。
15	白磁	〃	11.3	(2.7)	—	内溝する口縁部であり、白濁色の施釉である。
16	瓦器 碗	〃	—	(0.9)	5.3	断面三角形の粗雑な貼付高台をもつ底部であり、外面ともに摩耗する。
17	土師質土器 杯	〃	—	(2.3)	5.4	底部より直立気味に立ち上る体部をもつ。底部は回転糸切りであり、内面にロクロ目を残す。
18	須恵器 杯身	〃	12.8	(2.4)	—	口縁部であり、短い受部から立ち上がりは小さく内傾する。
19	〃 杯蓋	〃	24.0	(1.4)	—	平坦な天井部をもち、口縁部は小さく下方に傾斜し、端部はわずかに内溝し丸く終わる。
20	瓦器 壺	〃	34.2	(8.6)	—	大きく外反し開く口縁部であり、端部は丸味をおびた面をなし、下端部はわずかに垂下する。
21	土師器 壺	〃	25.0	(6.1)	—	内溝気味に立ち上がる口縁部であり、頭部外面を強くナデ調整。赤褐色を呈し砂粒を多く含む。

第11表 出土遺物計測表1

番号	器形	出土層位 遺物名	法量(cm)			特徴
			口径	器高	底径	
22	土師土器 椀	第Ⅲ層	14.9	3.6	7.1	体部から口縁部にかけて緩やかに立ち上り開く。底部は円錐形で切られる。体部外側にロクロ目を残す。
23	土鍤	"	全長 7.6	全幅 2.6	重量(g) 42	紡錘形の土鍤であり、ほぼ完形。孔径は6mmである。
24	"	"	"	"	"	やや圓筒形に近い土鍤であり、ほぼ完形。孔径は5mmである。
25	須恵器 杯蓋	ST-20	13.8 (3.3)	-	-	丸味をおびた天井部をもち、口縁部は小さく屈曲する。
26	杯身	"	11.6 (2.1)	-	-	受部は水平であり、立ち上りはきわめて小さくやや内傾する。
27	"	"	12.0 (2.6)	-	-	受部は水平であり、立ち上りは内傾する。
28	叩石	ST-21	全長 12.3	全厚 2.1	重量(g) 330	不整橢円形の鋸平側面を使用しており、縁辺部を中心に敲打痕がみられる。石材は砂岩である。
29	須恵器 杯身	SB-49 P-1	"	"	(2.0)	平坦な底部から直立気味に立上る。外傾する台形の高台をもつ。
30	土師器 杯	SB-50 P-7	13.3	2.3	-	体部から口縁部にかけて緩やかに内溝する。赤褐色を呈し、外側は摩耗するが、内側はへら削きを残す。
31	須恵器 高杯	"	"	"	(9.6)	高杯の瓶底であり、緩やかに開く瓶底と内窓気味に開く体部をもつ。体部外側に乱碰なへら削りを残す。
32	土鍤	P-5	全長 (4.0)	全幅 1.9	重量(g) 12	紡錘形の土鍤であり、約1/2を欠損する。孔径は5mmである。
33	須恵器 杯蓋	SK-67	-	(1.5)	-	平坦な頂部に璇室珠形のつまみをもつ。
34	"	"	23.2	(1.9)	-	平坦な天井部から下方へ傾斜し、口縁部は屈曲し終る。灰白色を呈し、全体に摩耗する。
35	土師器 杯	"	-	(1.8)	5.8	外傾する高台を有し、体部は直立気味に立ち上る。全体に摩耗する。
36	須恵器 蓋	"	-	(2.7)	10.0	内窓気味の台形を呈する安定した高台をもつ。
37	"	"	14.6	(3.3)	-	緩やかに外反する口縁部であり、端部はわずかに内溝し丸味をおび、下端部はナデ調整により段をなす。
38	土師器 高杯	"	20.0	(3.5)	-	ほぼ平坦な底面であり、口縁部は屈曲立ち上り端部は直線を呈する。赤褐色を呈し、内外面ともにへら削きがみられる。
39	"	"	22.5	(4.4)	-	強く屈曲し直線的に開く口縁部であり、頭部内面に横方向、外面には縱方向のハケ目がみられる。
40	須恵器 杯身	SK-68	14.0 (2.5)	-	-	直立気味に立ち上る口縁部であり、端部はやや薄く丸味をおびる。
41	土鍤	"	全長 (4.7)	全幅 2.3	重量(g) 22	円筒形の土鍤であり、両端を欠損する。孔径は5mmである。
42	須恵器 杯蓋	SK-69	13.8	(1.6)	-	平坦な天井部から下方へ傾斜し、口縁部は丸くおさめる。

第11表 出土遺物計測表2

番号	器種 形	出土層位 出土遺構	法量(cm)			特徴
			口径	器高	底径	
43	須恵器 杯	SK-69	14.7	(2.1)	—	平坦な天井部からやや強く下方へ傾斜し、端部は丸くおさめる。灰白色を呈し全体に摩耗する。
44	“ 杯 身	“	10.1	(2.7)	—	直線的に開く口縁部であり、端部は丸くおさめる。
45	“ 甕	“	27.2	(4.8)	—	緩やかに外反する口縁部であり、端部は屈曲し上面及び外面は面をなす。
46	“ 壺	“	—	(2.2)	7.8	外傾する高台をもつ底部であり、体部は平坦な底部より直立し、立ち上る。
47	土師器 杯	“	—	(1.6)	9.0	外傾する低い高台をもつ底部である。黄赤褐色を呈し全体に摩耗する。
48	土師器 椀	“	—	(2.7)	9.2	強く外傾する高い高台をもつ。赤褐色を呈し胎土、焼成とともに良好。
49	“ 杯	“	7.4	3.5	11.6	やや丸味をおびた底盤から直立気味に立ち上り、口縁部は内湾し丸くおさめる。外面に横方向のヘラ巻きがみられる。
50	“ “	“	14.7	(3.0)	—	内湾気味の体部から口縁部は強くナデ調整により内溝する。赤褐色を呈する。
51	土鍾	“	全長 4.6	全幅 1.9	重(㌘) 13	紡錘形に近い土鍾であり、ほぼ完形。孔径は6mmである。
52	土師器 高杯	SD-46	—	(5.3)	—	脚部であり、直線的に開き外反する。赤褐色を呈する。
53	須恵器 壺	SD-48	—	(3.7)	10.3	外傾する高台をもつ底部であり、体部は直線的に立ち上る。
54	土鍾	P-1	全長 7.0	全幅 2.5	重(㌘) 34	紡錘形の光形の土鍾である。孔径は8mmである。
55	土師器 椀	P-2	16.6	(5.1)	—	体部から口縁部にかけて緩やかに内溝する。内面に斜格子とみられる暗文が施されるが、全体に摩耗する。
56	“ 甕	“	25.0	(3.8)	—	仙出し直線に開く口縁部であり、端部は面をなす。内面には横方向のハケ目がみられ、外面は縱方向のハケ目をナデ消す。
57	須恵器 壺	P-3	—	(8.9)	—	長颈壺の頭部であり、緩やかに外反し開く。内面には胴部への接合痕がみられる。
58	杯 身	“	—	(1.4)	9.6	台形の高台をもつ底部であり、灰白色を呈し摩耗する。
59	“ 甕	“	45.0	(19.2)	—	強く屈曲し大きく外反する口縁部であり、端部は内湾し上方へ拡張する。外面には4~5条を1単位とする3本の断続波状文を施す。
60	鉢	“	29.0	(6.8)	—	体部は緩やかに内湾し、口縁部は小さく外反する。端部は丸くおさめる。内外面には、タタキ目を残す。
61	土師器 壺	P-4	22.8	(17.1)	—	丸底をおびた胴部から強く屈曲し、直線的に開く口縁部をもつ。胴部内外面に横方向の細いハケ調整を施す。
62	須恵器 杯 身	P-5	—	(2.4)	8.6	外傾する高台をもつ底部であり、全体に摩耗する。
63	土師器 椀	P-6	16.2	5.0	7.4	緩やかに内湾し立ち上り、口縁部はやや外反する。外面にロクロ目を残し底部は回転糸切りである。

第11表 出土遺物計測表3

番号	器種 器形	出土層位 出土遺構	法 寸	星(cm)		特 徴
				径	深	
64	須恵器 杯	P 7	15.2	(2.4)	-	やや内溝気味に立ち上る口縁部である。
65	土師器 椀	"	-	(3.3)	5.9	回転糸切りの底部に丸味をおびた高台をもつ。赤褐色を呈し、全体に摩耗する。
66	須恵器 高杯	"	-	(5.5)	-	脚部であり、緩やかに外反し開く。
67	土師器上器 皿	P-8	10.0	1.9	-	底部は回転糸切りであり、体部は直線的に立ち上がる。
68	須恵器 杯身	第二層	11.8	3.7	-	中腹みの底部から体部は斜め上方へのびる。受部は短く斜め上方を向く。立ち上がりは短く内傾する。底部方に回転ヘラ削り。他は回転ナデ調整。色調は外面とも青灰色を呈す。全体的に造りが確である。
69	" 臺	"	-	(6.8)	-	口縁部の破片で断面鈍い三角形の凸帯を挟んで上に3本単位の波状文、下に7本・4本単位の波状文を施す。色調は外面とも灰黒色を呈す。
70	杯蓋	"	-	(2.2)	-	平らな天井部に擬宝珠形のつまみが付く。天井部方に回転ヘラ削りを施す。色調は外面とも灰色を呈す。
71	杯身	"	13.8	3.6	9.2	平らな底部にハの字状の高台が付く。口縁部は内溝気味に上がり、端部は細い。器面は摩耗が著しい。外面とも灰色を呈す。
72	"	"	16.2	4.2	11.2	"
73	"	"	-	(1.3)	9.8	高台はハの字状に開き、端部は下方を向く平面を有す。色調は外面とも灰色を呈す。
74	"	"	-	(2.0)	7.4	高台はハの字状に開き、端部は丸い。色調は外面とも灰色を呈す。器面は回転ナデ調整。
75	"	"	17.4	5.5	12.8	高台は下方を向き、端部は凹面を有す。口縁部は斜め上方へ上がり、端部は短く仕上げる。色調は外面とも黄橙色を呈す。
76	"	"	-	(3.4)	13.4	大型の杯で、高台はハの字状に開き、端部は内傾する平面を有す。色調は外面とも灰白色を呈す。
77	"	"	-	(2.5)	10.2	平らな底部には高さ1cmの高台が付く。端部は内傾する平面を有す。
78	"	"	13.6	3.6	8.8	底部は回転ヘラ切り。口縁部は上外方へ上がり端部は丸い。外面に火だしきがかかる。
79	皿	"	15.2	1.3	12.2	底部は回転ヘラ切り。口縁部は短く外反し、端部は丸い。色調は外面とも灰色を呈す。
80	高杯	"	-	(4.7)	4.8	脚部は斜め下方に下り、裾部で大きく開き、端部を下方へ細く曲る。器面は摩耗が著しい。
81	臺	"	16.8	(7.7)	-	口縁部は、肩部からハの字状に曲る。端部は外傾する平面を有す。肩部外面は平行のタタキの後ハケ調整、内面は同心円文のタタキの後、ナデ調整。

第11表 出土遺物計測表4

番号	器種 形	出土層位 山上遺構	法量(cm)			特徴
			L	径	器高	
82	錐輪陶器 杯	第II層	-	(1.3)	10.2	器面は摩耗が著しく、内底面と外底面の一部に錐輪が残存する。
83	上師器 杯	"	13.2	3.8	7.4	底部は回転ヘラ切り。口縁部は斜め上外方へのび、端部は細く外傾する。色調は内外面とも橙色を呈す。器面は摩耗が著しく調節不明。
84	" "	"	-	(2.9)	6.8	底部は半らで、回転ヘラ切りによる。体部は外反してのびる。内外面とも回転ナデ調整で、にぶい橙色を呈す。
85	" 皿	"	12.6	1.5	11.0	底部は回転ヘラ切り。器面は摩耗が著しく調節不明。色調は内外面とも橙色を呈す。
86	瓦質上器 杯	"	-	(2.0)	6.0	底部は回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい橙色を呈し、内面はナデ調整。
87	" "	"	13.0	3.7	7.4	"
88	小皿	"	6.9	1.7	4.3	底部は回転糸切りによる。II縁部は1ヶ所を小さく曲げる。器面は摩耗が著しい。
89	" "	"	7.4	1.8	4.6	底部は回転糸切りによる。口縁部は内溝気味に上がり、端部は丸い。色調は内外面とも橙色を呈す。
90	" "	"	7.2	1.7	7.0	"
91	" "	"	6.7	1.8	5.4	底部は回転糸切りによる。口縁部は内溝気味に上がり、端部は丸い。色調は内外面とも淡緑色を呈す。
92	" "	"	6.4	1.8	4.0	底部は回転糸切りによる。口縁部は斜め上外方へ上がり、端部は丸い。色調は内外面とも橙色を呈す。
93	" "	"	6.7	2.0	4.4	"
94	" "	"	7.8	1.8	4.6	"
95	" "	"	6.8	1.5	4.6	"
96	" 瓦質上器 鍋	"	6.8	1.6	4.8	"
97	" 鍋	"	20.0	(5.1)	-	胸部からII縁部にかけて内傾してのび、端部は内傾する平面を有す。口縁下には紐状の跡が付く。
98	" "	"	25.8	(5.0)	-	胸部から口縁部にかけて内溝気味に上がり、端部は外傾する平面を有す。口縁下には紐状の跡が付く。
99	青磁 碗	"	16.6	(4.9)	-	I縁部には斜め上外方へのび、端部は細く仕上げる。見込みには花文が施されている。器面には貫入あり。
100	白磁	"	-	(3.1)	-	II縁状のII縁部を持つ。
101	常滑 壺	"	-	(7.5)	-	II縁部は内反して上がり、端部を折り曲げる。常滑Ⅲ期の壺である。

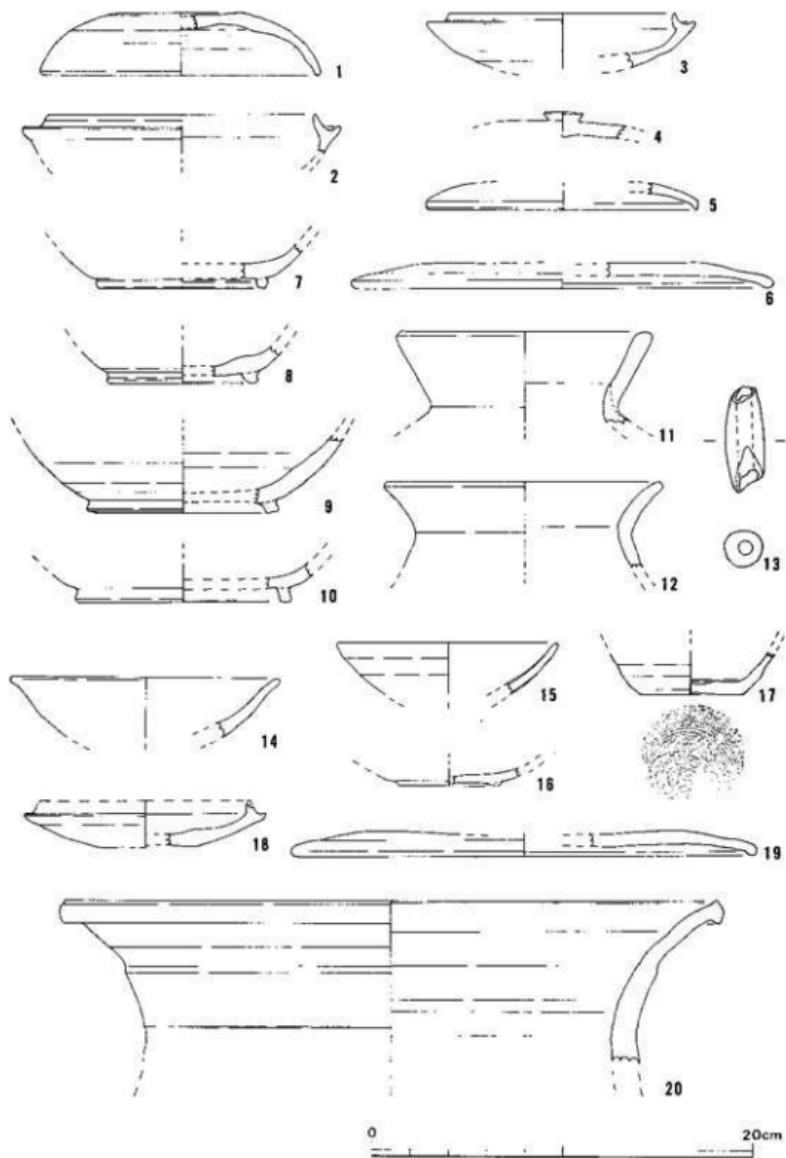
第11表 出土遺物計測表5

番号	器 器 形	出 土 層 位	法 量(cm)				特 徴
			口 径	器 高	底 径	全 長	
102	土 雞	第II層	3.9	2.2	0.9		円筒形の土師質の土雞。径6mmの円孔を穿つ。
103	"	"	4.1	1.9	0.7		"
104	"	"	4.8	2.3	0.9		"
105	"	"	4.1	2.3	0.9		"
106	"	"	4.5	1.8	0.7		円筒形の土師質の土雞。径5mmの円孔を穿つ。
107	"	"	4.3	1.9	0.7		円筒形の土師質の土雞。径6mmの円孔を穿つ。
108	土 雞	"	(6.0)	-			口縁下に幅1.1cmの鉗を造り出す。外面には煤が付着する。滑石製。
109	土 師 器 杯	SK-70	13.4	3.7	7.6		底部は回転ヘラ切りによる。口縁部は斜め上外方へのび、端部は丸い。器面は摩耗する。
110	"	"	(2.7)	9.0			底部は回転ヘラ切りによる。体部は斜め上外方へ上がる。色調は内外面とも橙色を呈す。
111	"	"	13.4	3.0	8.0		底部は回転ヘラ切りによる。口縁部は内湾気味に上がり、端部を細く仕上げる。色調は内外面とも橙色を呈す。
112	"	"	12.0	2.3	6.6		底部は回転ヘラ切りによる。口縁部は斜め上外方へのび、丸く仕上げられた端部はやや外反する。
113	須 恵 器 皿	SK-71	14.8	1.8	12.4		底部は回転ヘラ切りによる。口縁部は斜め上外方へのび、端部を細く仕上げる。器面はハダ荒れする。
114	"	"	18.4	2.0	13.4		底部は回転ヘラ切りによる。口縁部は斜め上外方へ細くのび、端部を細く仕上げる。底部には、焼成時の歪がみられる。
115	土 師 器	"	17.0	1.6	14.6		底部は回転ヘラ切りによる。口縁端部を小さく折り曲げる。外面にヘラ磨きを施す。
116	須 恵 器 杯 身	SK-72	(2.5)	8.6			高台は大きくハの字状に開き、端部は外傾する平面を有す。器面は回転ナデ調整で、青灰色を呈す。
117	"	"	-	(8.4)	-		内面に同心円文のタタキ、外面に平行のタタキのあとと部分的に回転カキ口調整。
118	"	"	12.4	(4.1)	-		口縁部は短く斜め上外方へのび、端部内面に段を有す。色調は内外面とも灰色を呈す。
119	杯 身	SK-74	11.8	4.3	7.0		底部は回転ヘラ切りによる。口縁部は内湾気味に上がり、端部を細く仕上げる。器面は摩耗する。
120	土 雞	SD-51	全 長	全 幅	全 厚		円筒形の土師質の土雞。径4mmの円孔を穿つ。
121	土 師 器 皿	SA-13	5.1	1.7	0.7		底部は回転ヘラ切りによる。口縁部は短く外反し、端部は細い。器面は回転ナデ調整。

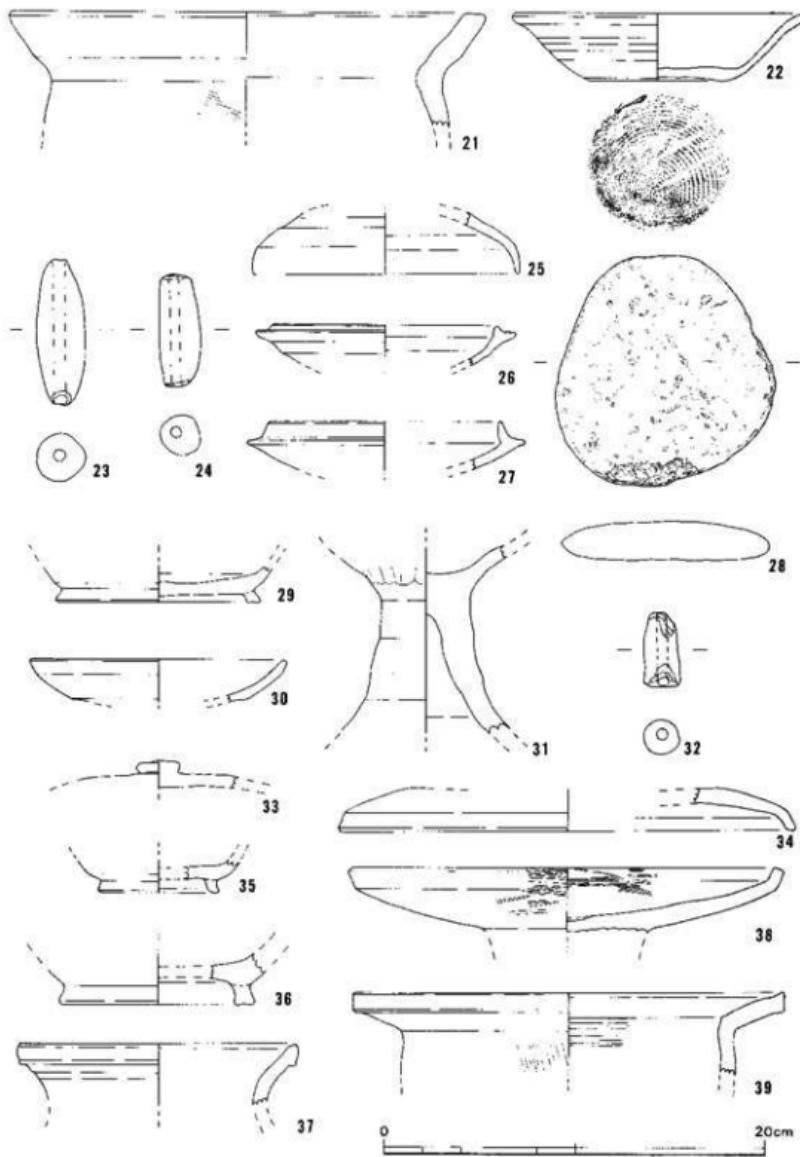
第11表 出土遺物計測表6

番号	器種 器形	出土層位 SA-13	法量(cm)			特徴
			口径	器高	底径	
122	上師器皿		15.0	1.6	12.0	底部は回転ヘラ切りによる。口縁部は短く上外方へのび、端部は丸い。器面は摩耗する。
123	" 瓢	"	23.6	(7.4)	-	脚部は内傾してのび、口縁部は大きく外傾し、脚部は外傾する凹面を有す。胴部外面には縱方向のハケ調整、内面頭部にハケ調整が一部残存する。
124	" 杯	P-1	14.4	3.4	8.2	底部は回転ヘラ切りによる。口縁部は斜め上外方へのび、端部を丸く仕上げる。器面は摩耗が著しい。
125	須恵器手把	P-2	全長 3.2	全幅 4.0	全厚 2.8	器の把手とみられる。
126	" 杯	P-3	-	(3.1)	8.6	高さ7mmのハの字状に聞く高台が付く。端部は内傾する平面を有す。体部は内湾気味に上がる。色調は外面ともにぶい橙色を呈す。
127	須恵器高杯	P-4	-	(4.8)	-	外反して斜め下方へ下だる脚部。器面は摩耗する。
128	" 杯	P-5	-	(2.8)	7.4	高さ1.8cmで、大きくハの字状に聞く高台が付く。底部は回転ヘラ切りのあとナデ調整。
129	" 瓢	P-6	21.0	(7.0)	-	肩部から口縁部にかけてハの字状をなす。肩部外面には平行タスキ、内面に同心円文のタスキを施す。口縁部は回転ナデ調整、内外面灰色を呈す。
130	瓦質土器 鍋	SK-78	19.0	(7.6)	銅錫 18.6	胴部は内湾気味に上がり、口縁部は短く外傾し、端部を丸く仕上げる。外面口縁下には煤が付着する。器面には指頭圧痕が残る。
131	" "	"	16.0	(6.2)	" 16.0	胴部は内湾気味に上がり、口縁部は真上を向く。口縁下には紐状の鉤が付く。鉤より下には煤が付着する。器面には指頭圧痕が残る。
132	土師質土器 小皿	P-7	6.6	1.4	5.0	底部は回転糸切りによる。口縁部は短く上外方へのび、端部は丸い。色調は外面とも橙色を呈す。
133	" "	"	7.0	1.7	4.2	"
134	" "	"	7.8	1.6	4.6	"
135	" "	"	7.5	1.7	4.6	"
136	" "	P-8	6.4	1.5	5.8	"
137	" 杯	"	11.8	3.6	7.2	底部は回転糸切りによる。口縁部は斜め上外方へのび端部を丸く仕上げる。色調は外面とも橙色を呈す。
138	" 小皿	P-9	7.2	1.5	4.6	底部は回転糸切りによる。口縁部は短く上外方へのび端部を丸く仕上げる。色調は外面とも橙色を呈す。
139	土 鍋	P-10	全長 6.7	全幅 3.4	全厚 1.5	大形の円筒形の土鍋で、土師質である。径9mmの円孔を穿つ。

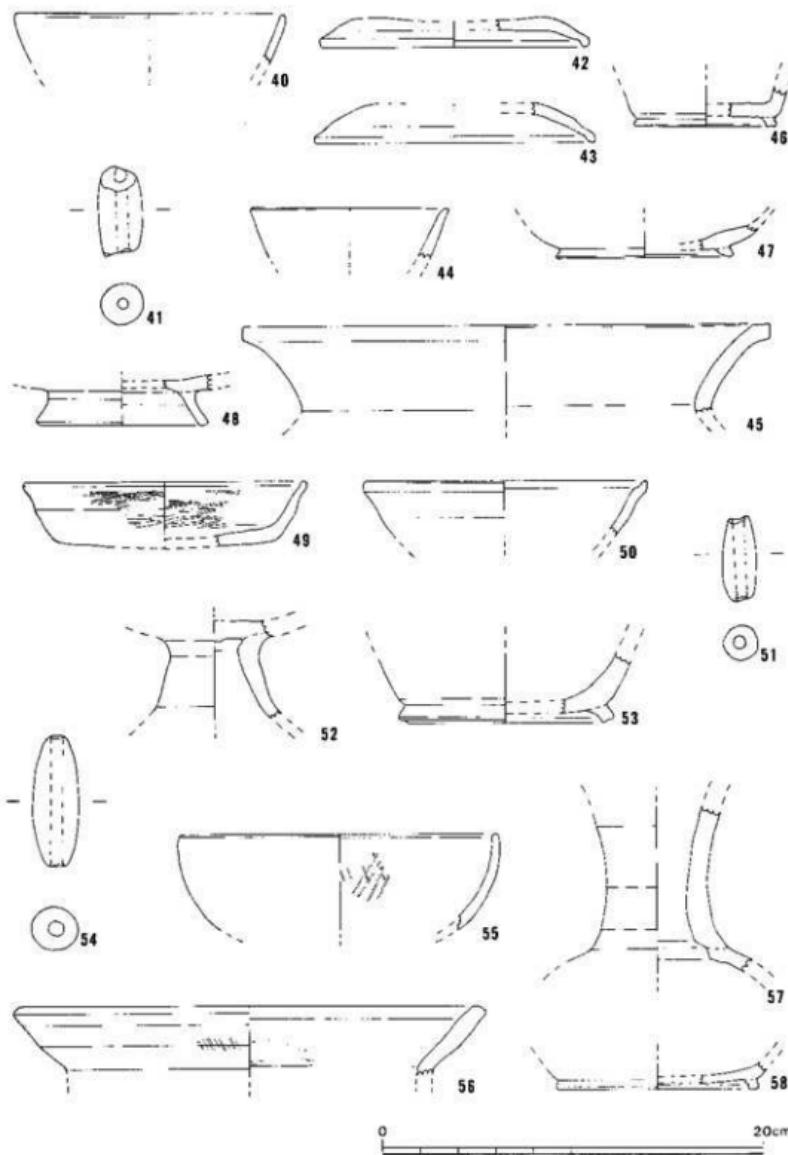
第11表 出土遺物計測表7



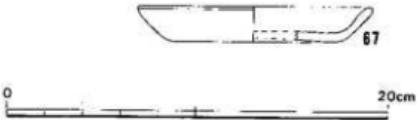
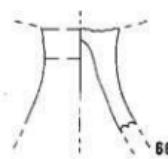
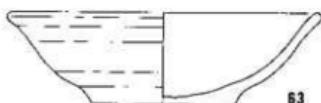
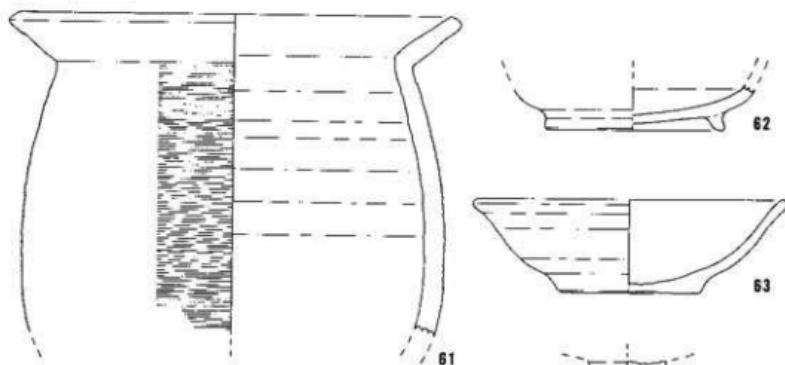
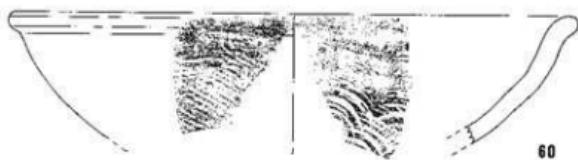
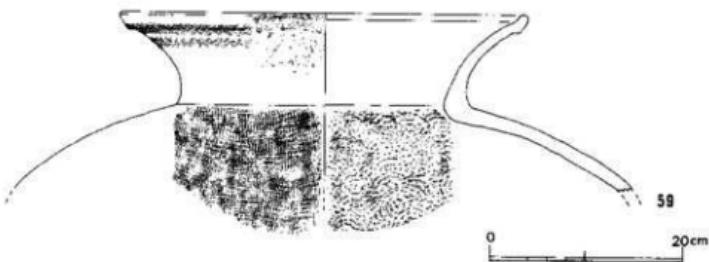
第21図 松ノ下（横マクラ）地区第III・IV層出土遺物



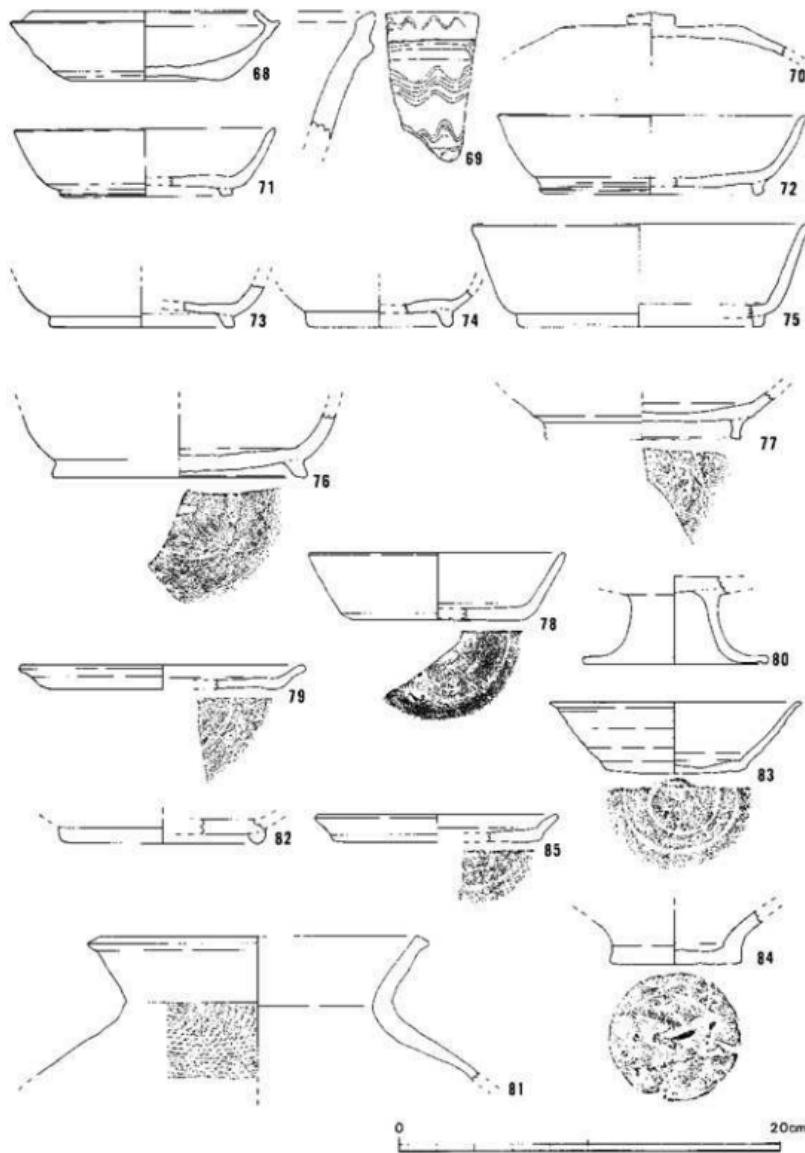
第22図 松ノ下（横マクラ）地区第IV層、ST-20・21、SB-49・50、SK-67出土遺物



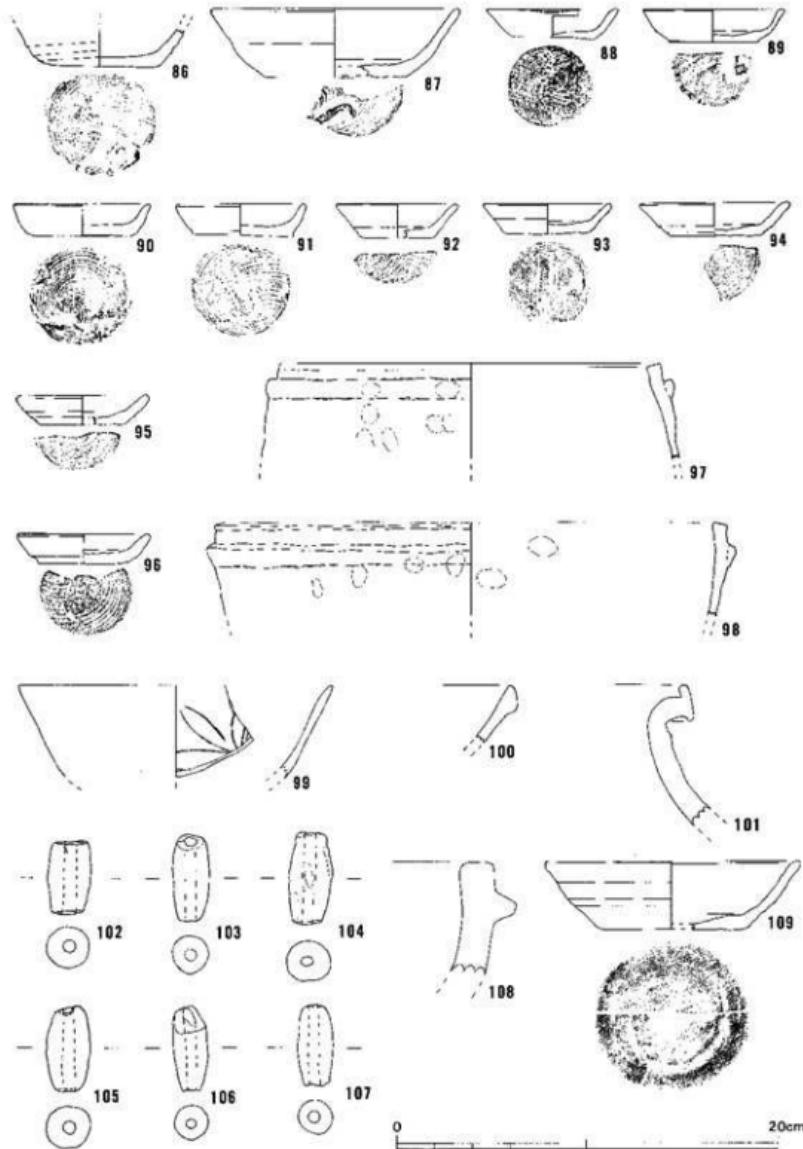
第23図 松ノ下（横マクラ）地区 SK-68・69, SD-46・48, P-1~3出土遺物



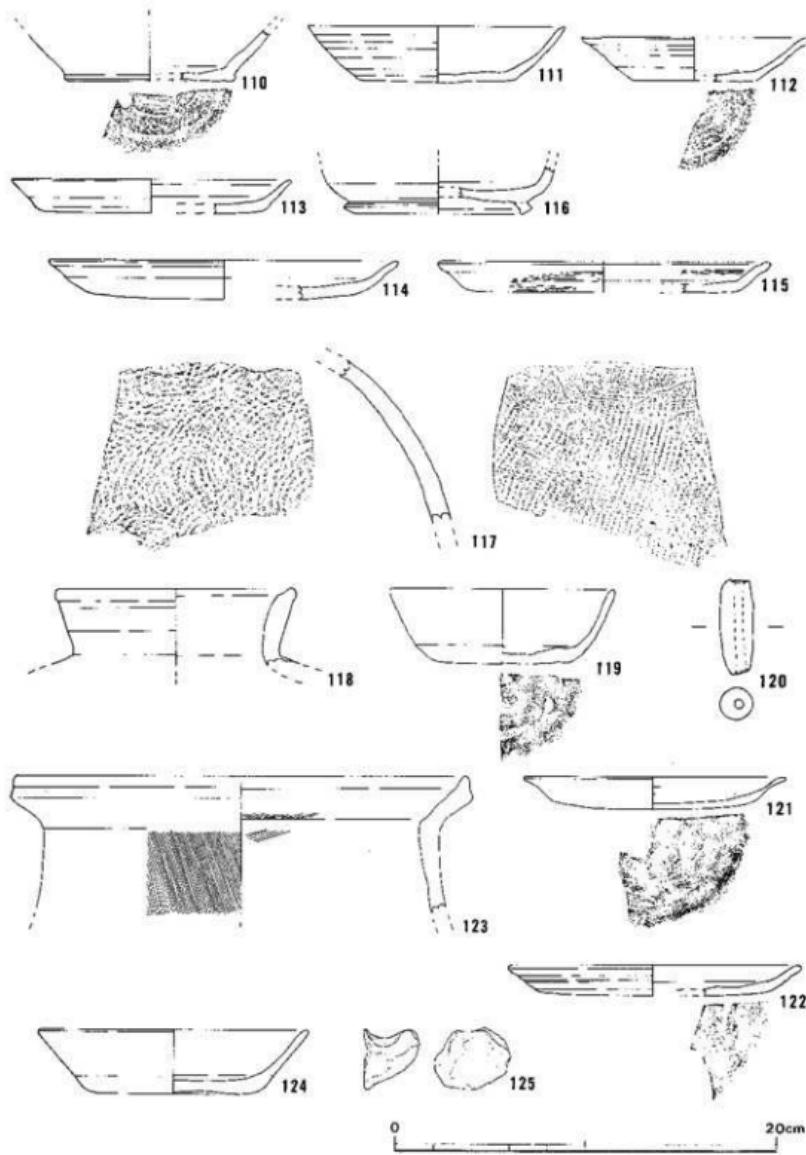
第24図 松ノ下(横マクラ)地区P-3~8出土遺物



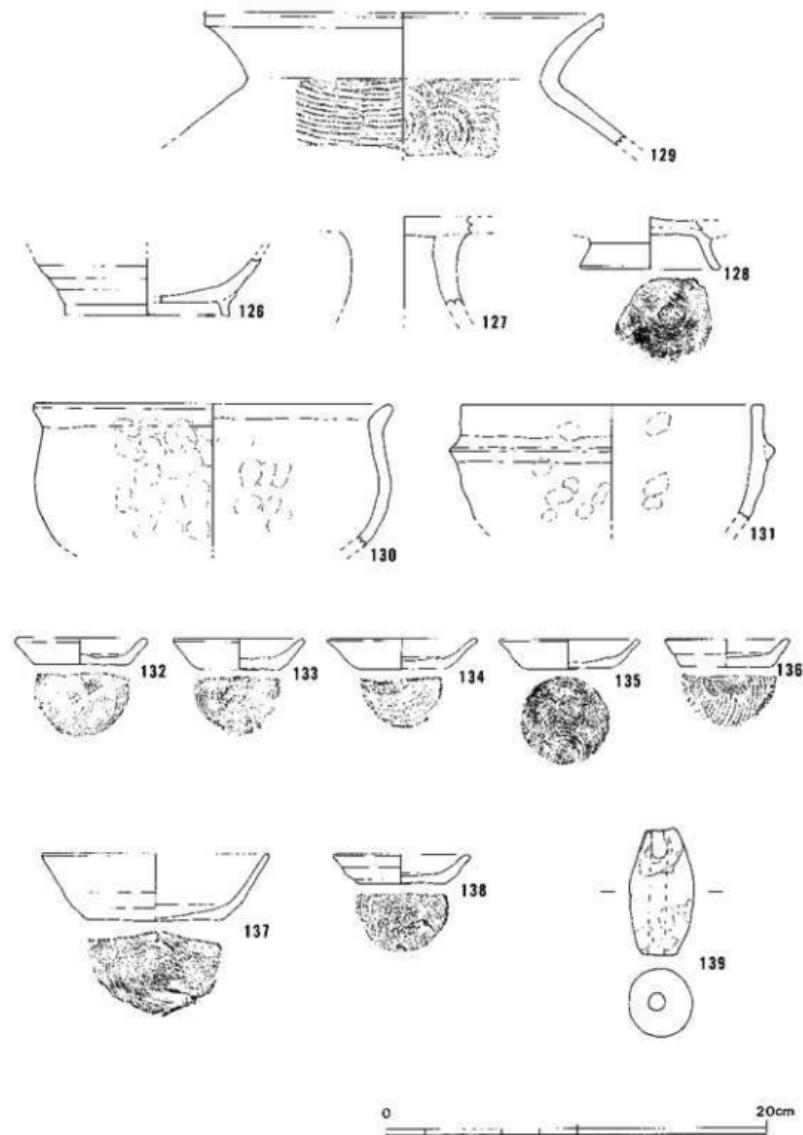
第25図 金屋地区第II層出土遺物



第26図 金屋地区第II層・SK-70出土遺物

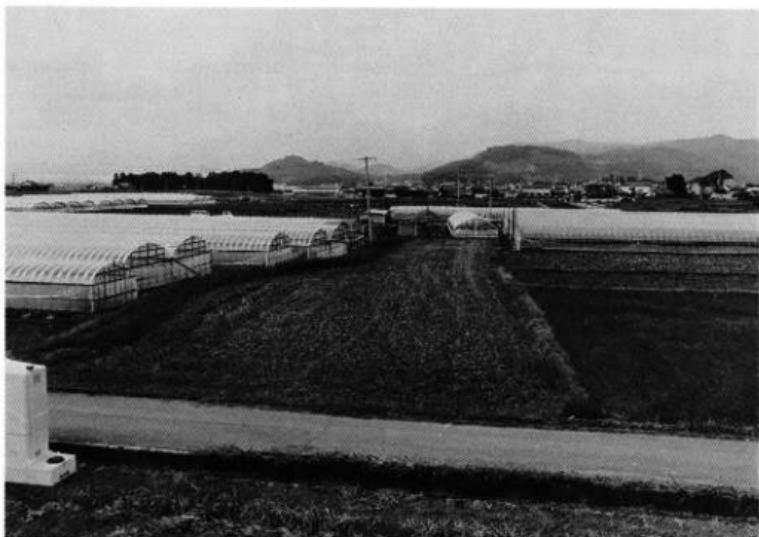


第27図 金屋地区 SK-70~72・74, SD-51, SA-13, P-1・2出土遺物

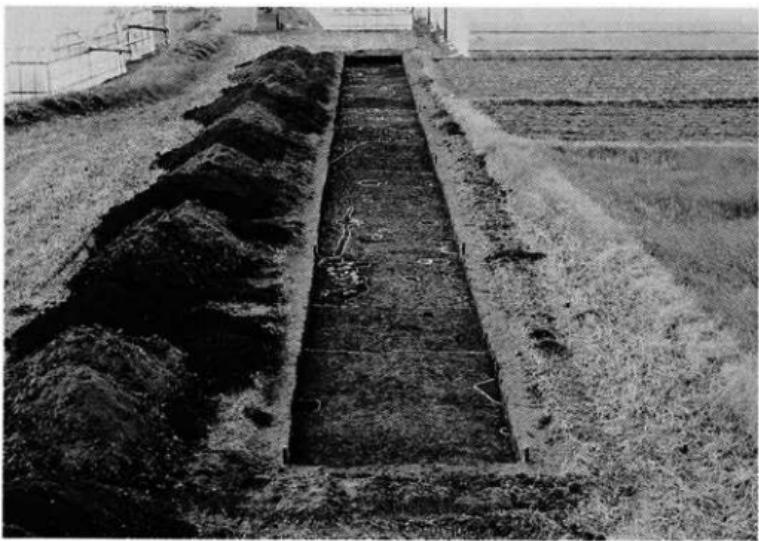


第28図 金屋地区 P-3~10出土遺物

# 図版



調査前全景（東より）



遺構検出状態（東より）

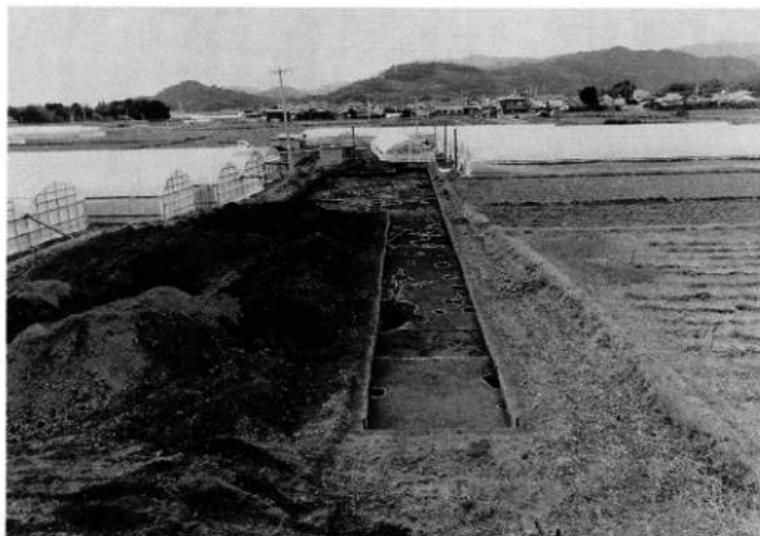
図版 2



遺構検出状態（西より）



拡張区遺構検出状態（東より）



完掘全景（東より）

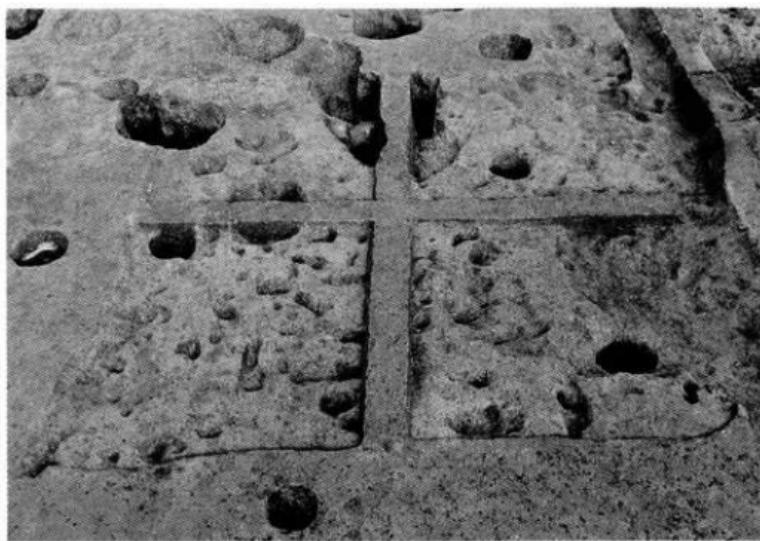


拡張区完掘（東より）

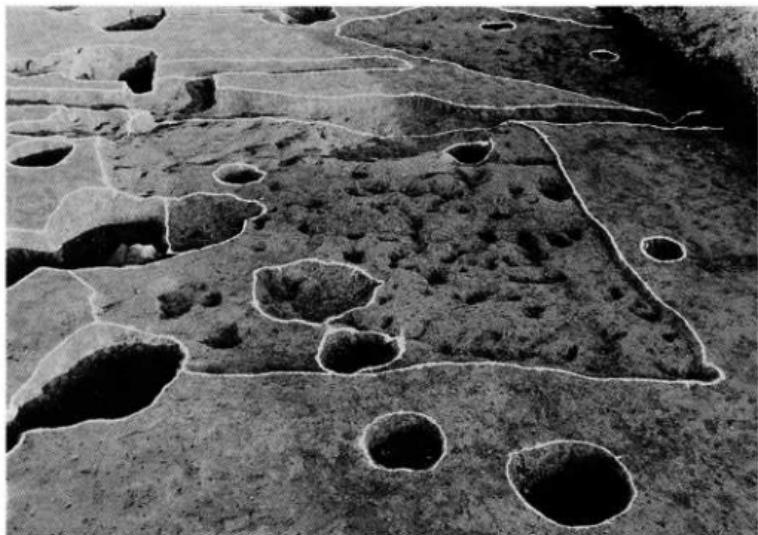
図版 4



東半部完掘（西より）



ST-19（南より）



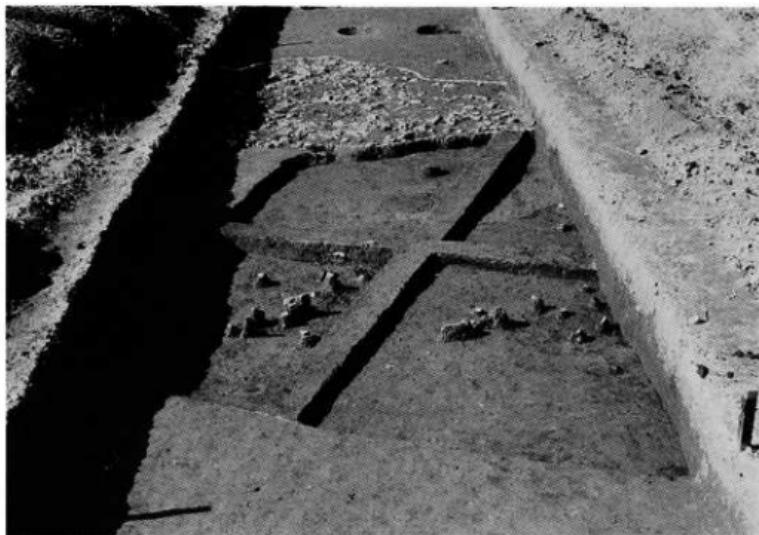
ST-19 (西より)



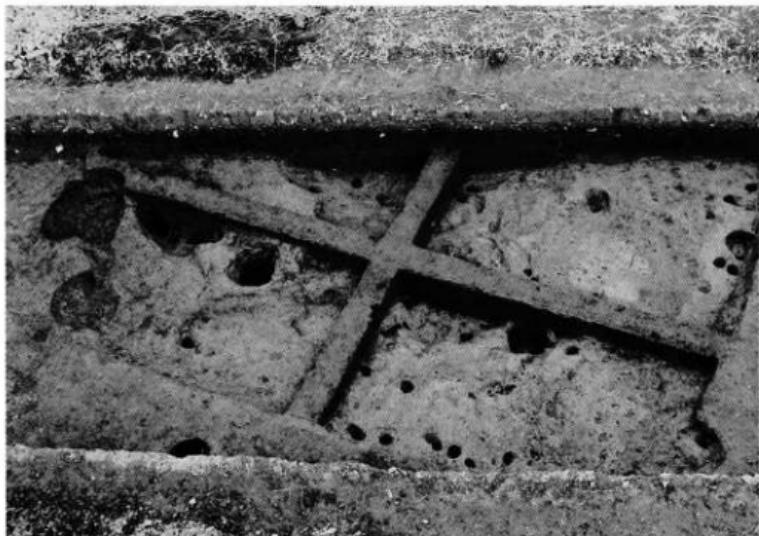
ST-20 (東より)



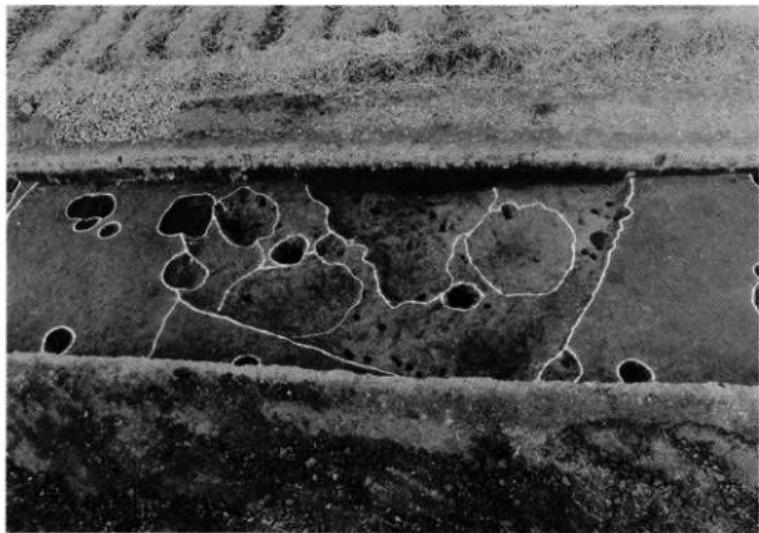
ST-20 (南より)



ST-21 遺物出土状態 (東より)



ST-21 (南より)



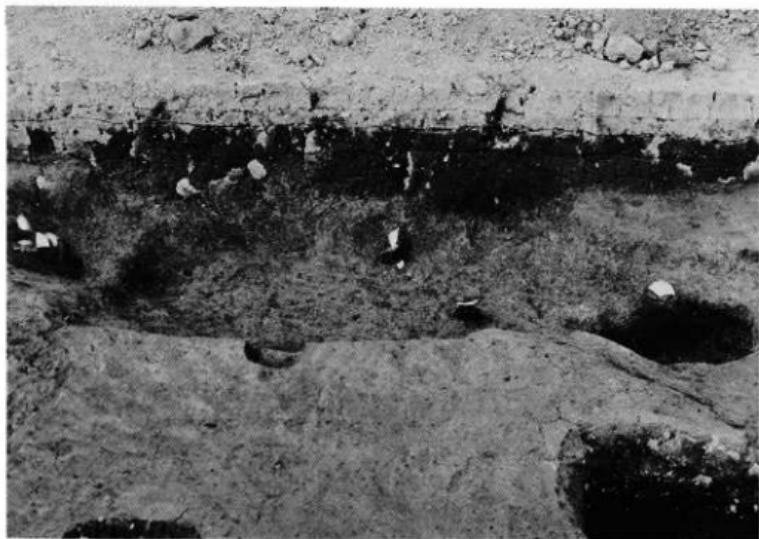
ST-21 (南より)



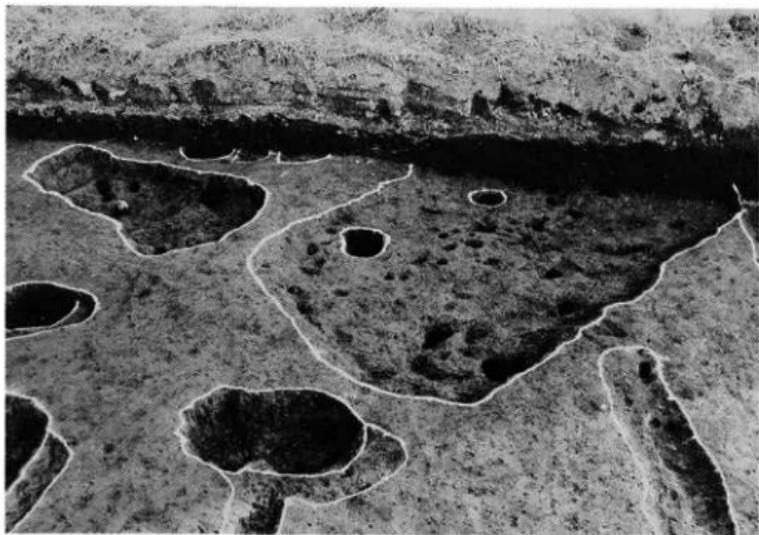
SB-49 (西より)



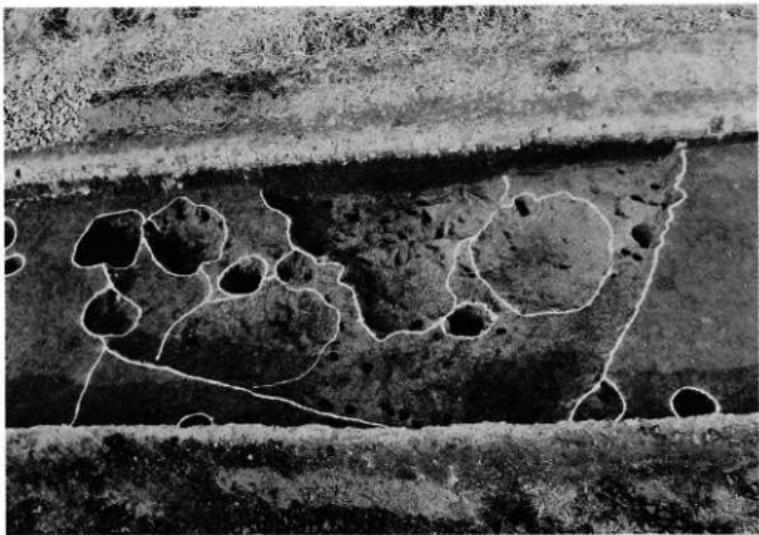
SB-50 (東より)



SK-67 (南より)



SK-68 (北より)



SK-69 (南より)



SK-69 遺物出土状態



SD-46 (北より)



SD-46 北壁セクション

図版12



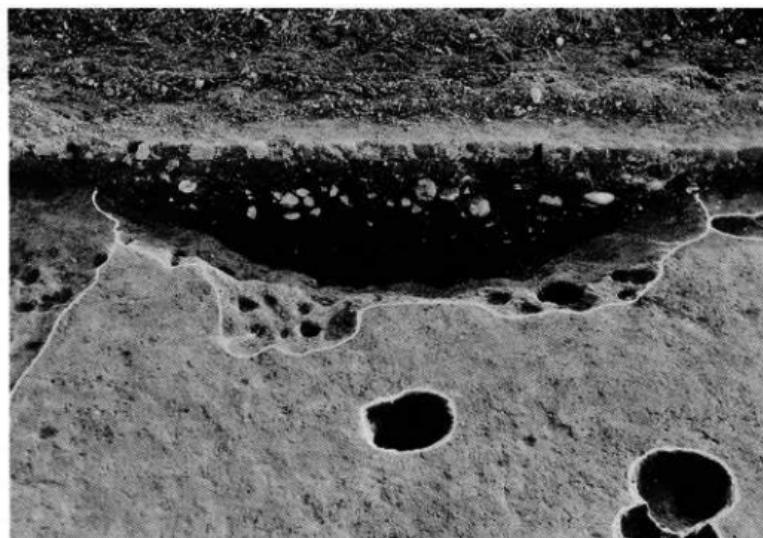
SD-47 (北より)



SD-48 (南より)



SE-03 検出状態



SE-03 (北より)



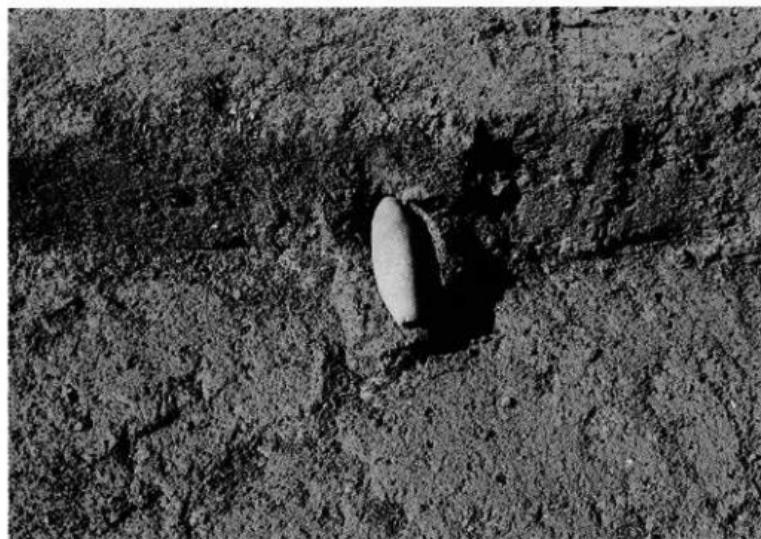
P-3 造物出土状態（南より）



P-3 出土遺物



P-4 遺物出土状態（南より）



第IV層 遺物出土状態



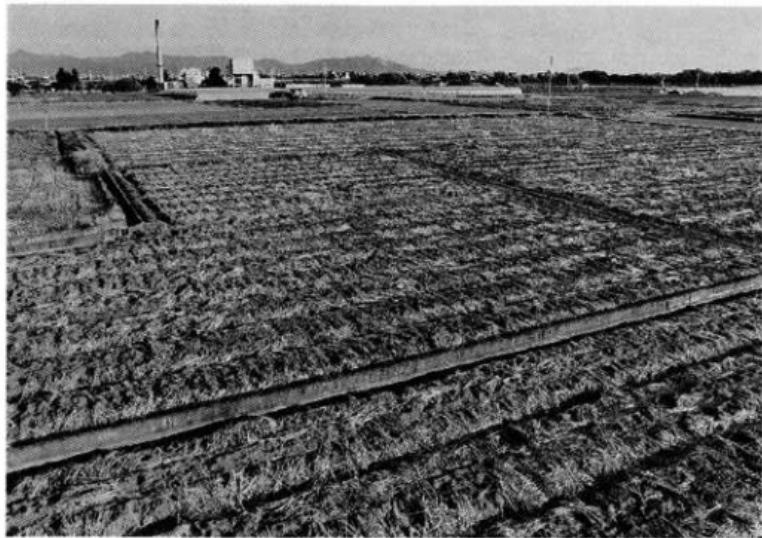
拡張区第IV層 遺物出土状態



第IV層 遺物出土状態



調査前全景（北より）



調査前全景（北より）



遺構検出状態（西より）



遺構完掘状態（西より）



A トレンチ（東より）



A トレンチ（西より）



Bトレンチ 造構検出状態（西より）



Bトレンチ 完掘状態（西より）



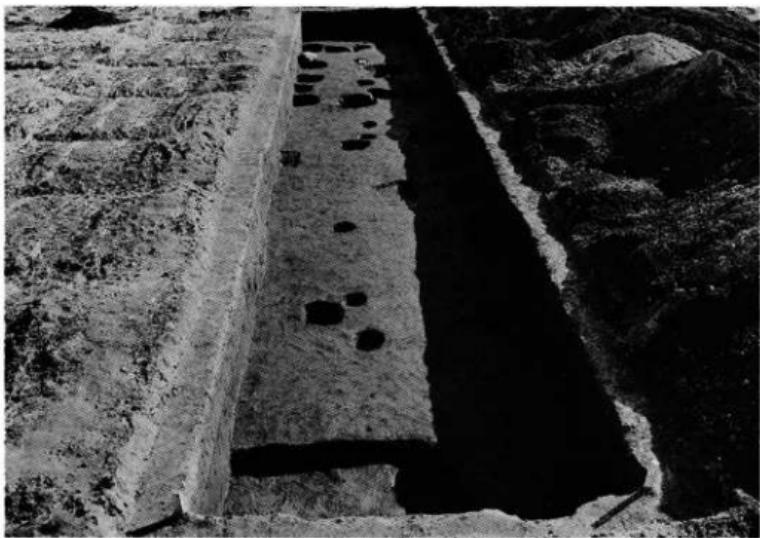
C トレンチ 遺構検出状態（西より）



C トレンチ 完掘状態（西より）



Dトレンチ 造構検出状態（西より）



Dトレンチ 完掘状態（西より）



E トレンチ 遺構検出状態（西より）



E トレンチ 完掘状態（西より）

図版24



Fトレンチ 遺構検出状態（北より）



Fトレンチ 完掘状態（北より）



C トレンチ拡張区 遺構検出状態（北より）



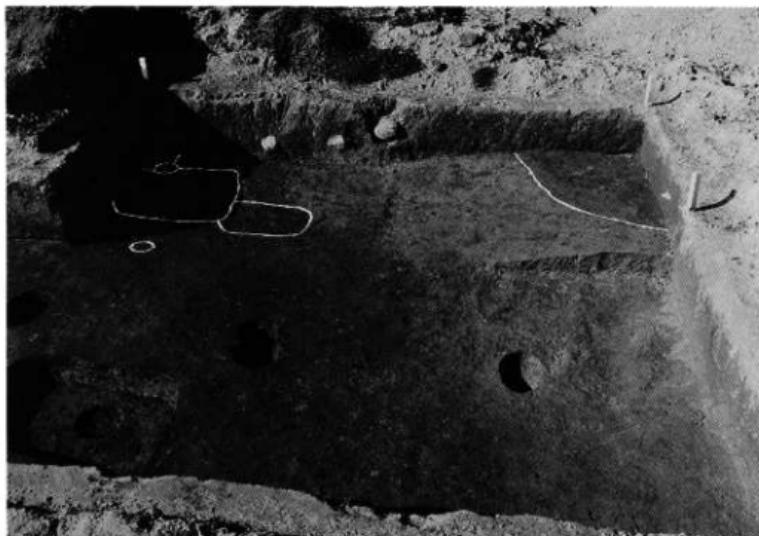
C トレンチ拡張区 完掘状態（北より）



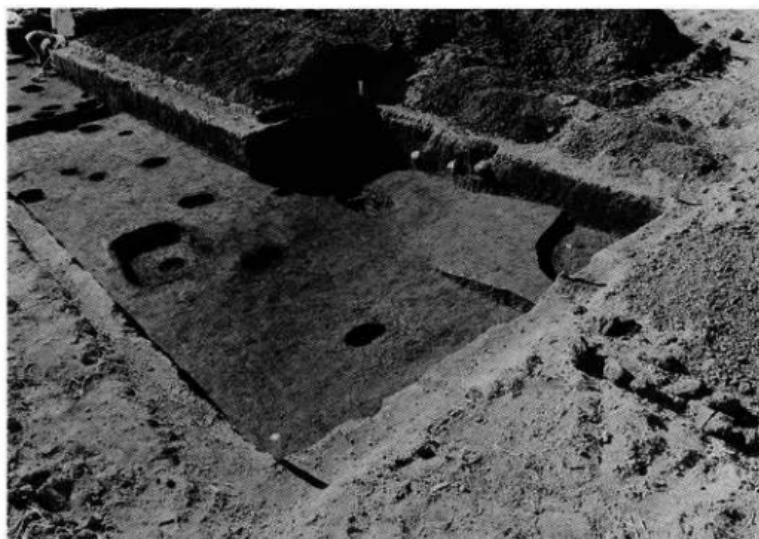
E トレンチ拡張区 造構検出状態（北より）



E トレンチ拡張区 完成状態（北より）



F トレンチ北拡張区 遺構検出状態（東より）



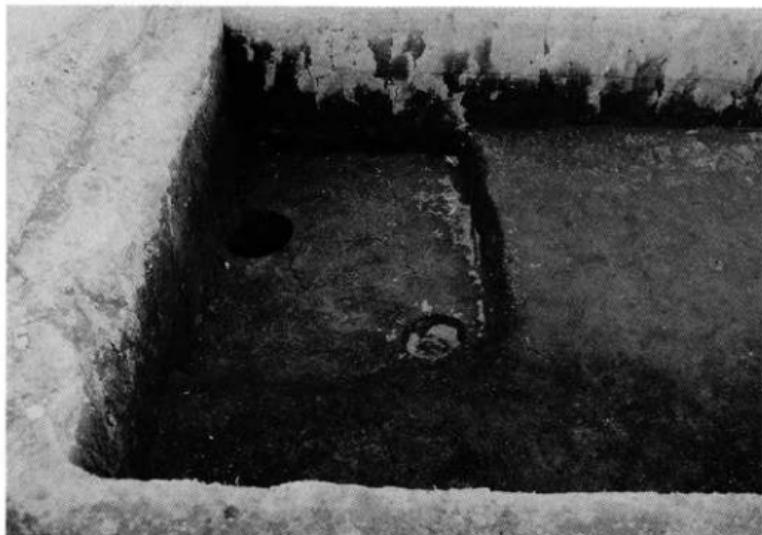
F トレンチ北拡張区 完成状態（北より）



F トレンチ南拡張区 造構検出状態（東より）



F トレンチ南拡張区 完掘状態（東より）

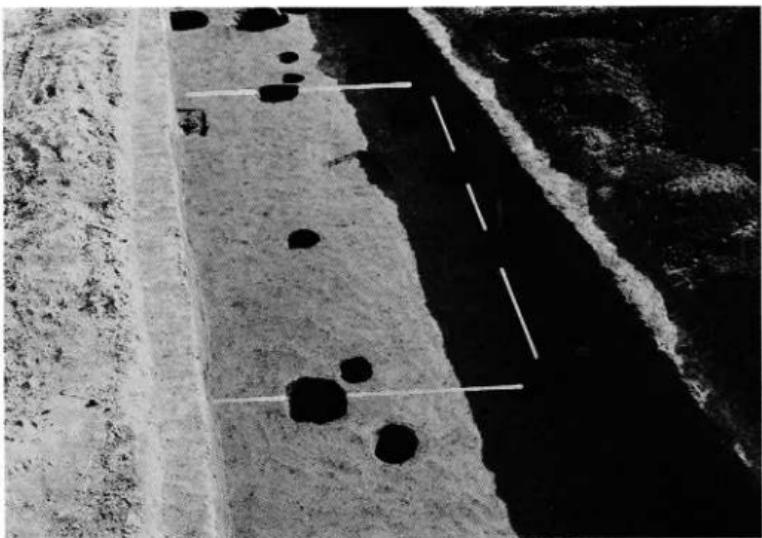


ST-22 (南より)

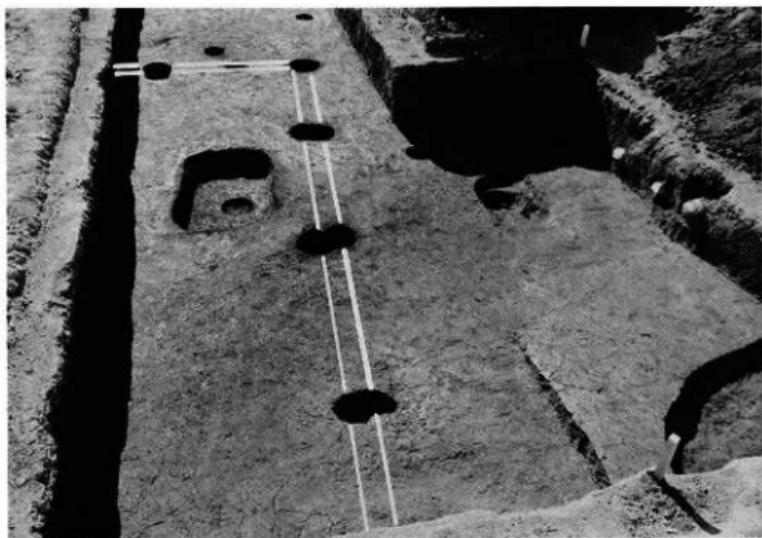


ST-24 (東より)

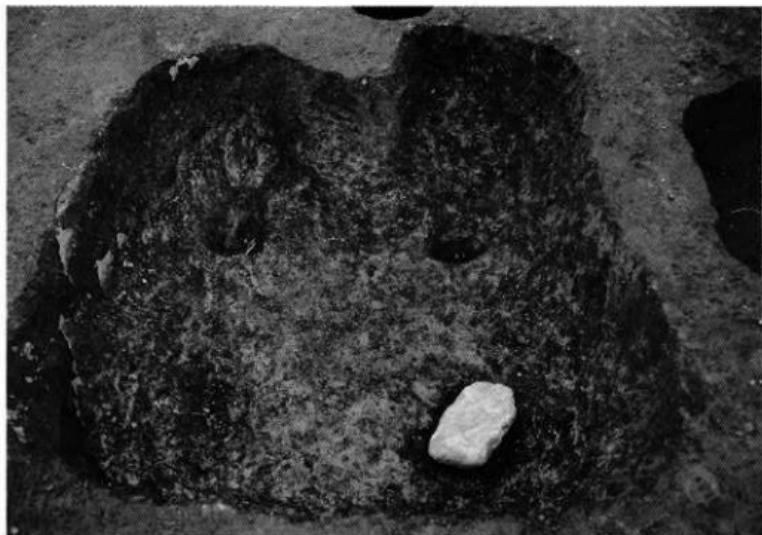
図版30



SB-51 (西より)



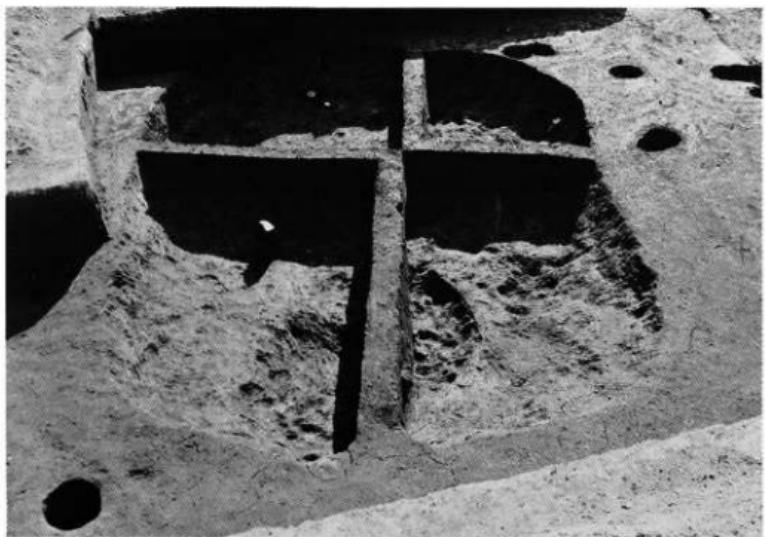
SB-53・54 (北より)



SK-70 (西より)



SK-71 (西より)



SK-72 (北より)



SK-72 (北より)



SK-74, ST-24 (北より)



SK-74 (東より)



SK-75 (西より)



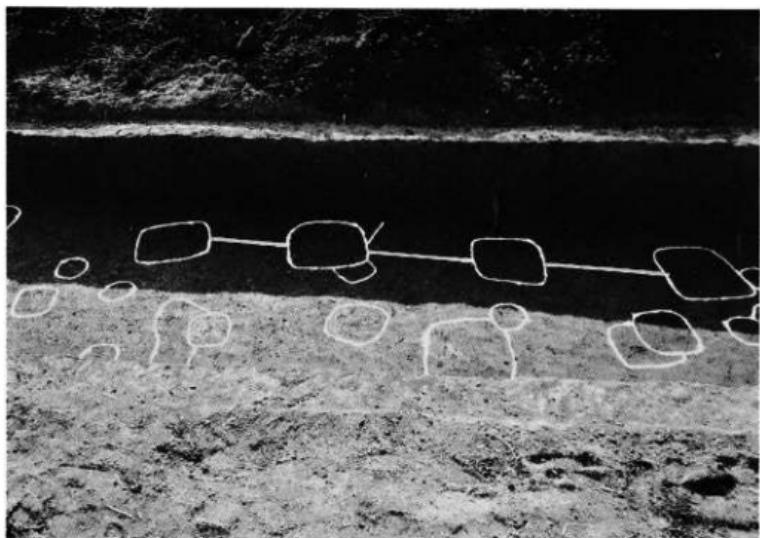
SK-76 (南より)



SD-49 (西より)



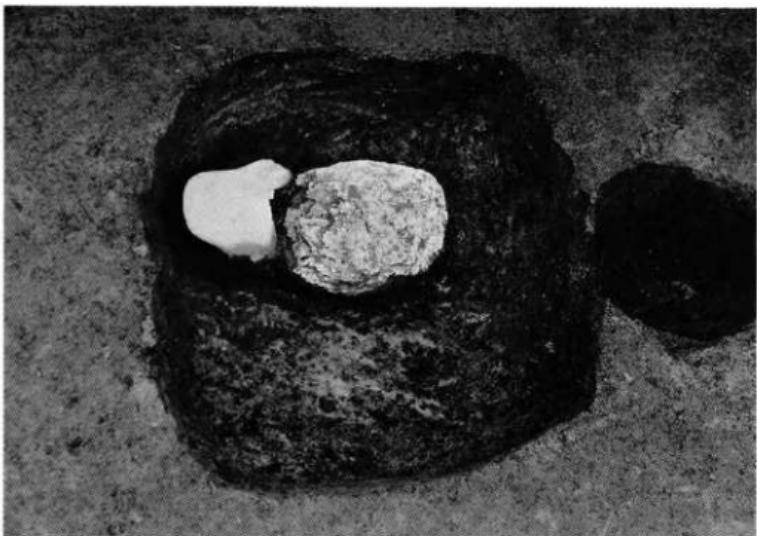
SD-49 (西より)



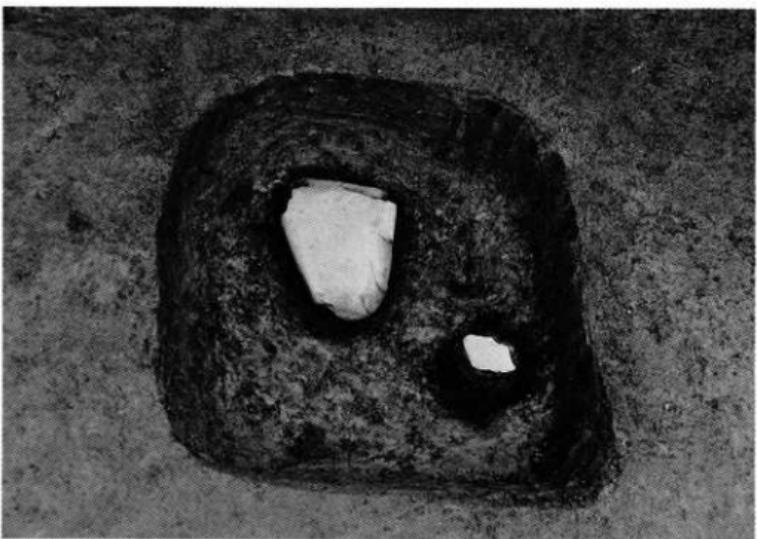
SA-10 検出状態（北より）



SA-10 (北より)



SA-10のP-1 (北より)



SA-10のP-2 (北より)



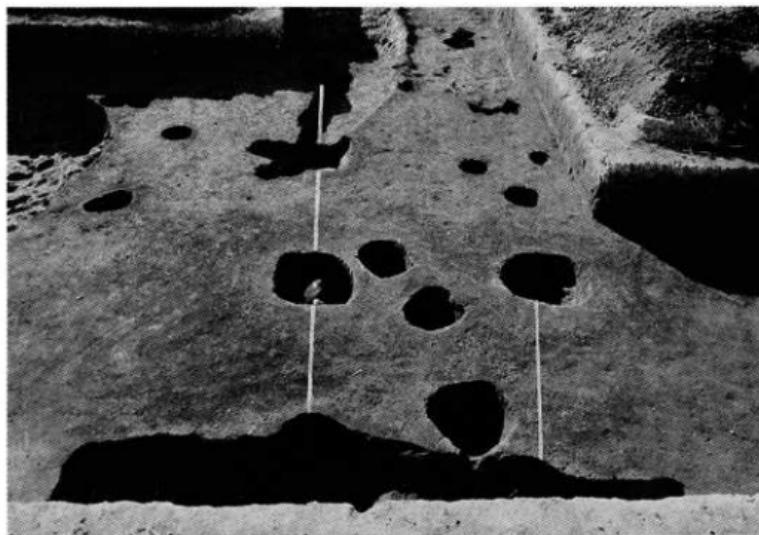
SA-11 (西より)



SA-12 (西より)



SA-13 (西より)



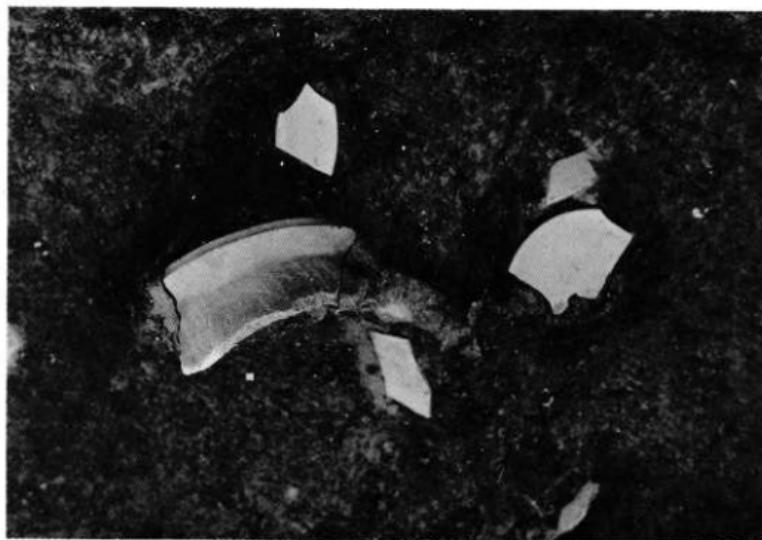
SA-14・15 (北より)



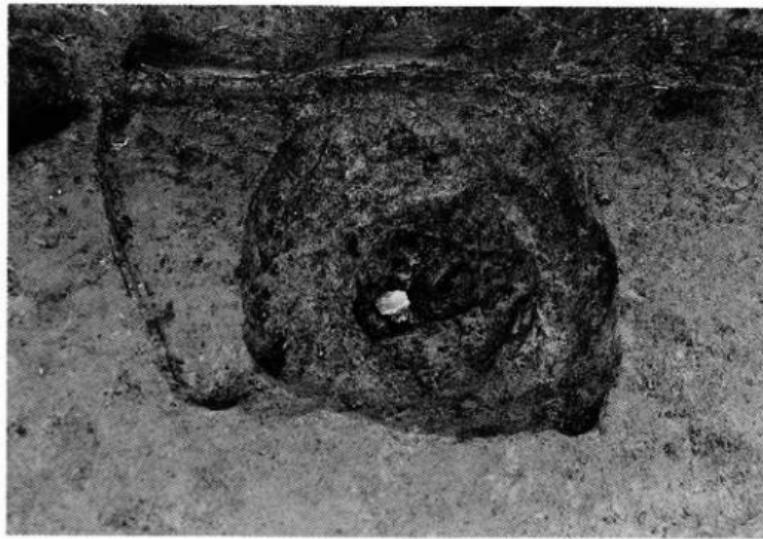
SA-14のピット（北より）



P-6（東より）



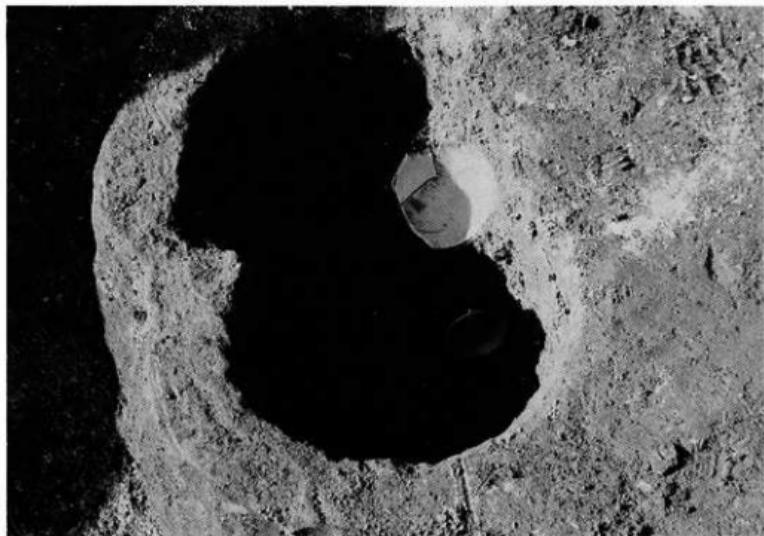
P-1 遺物出土状態（北より）



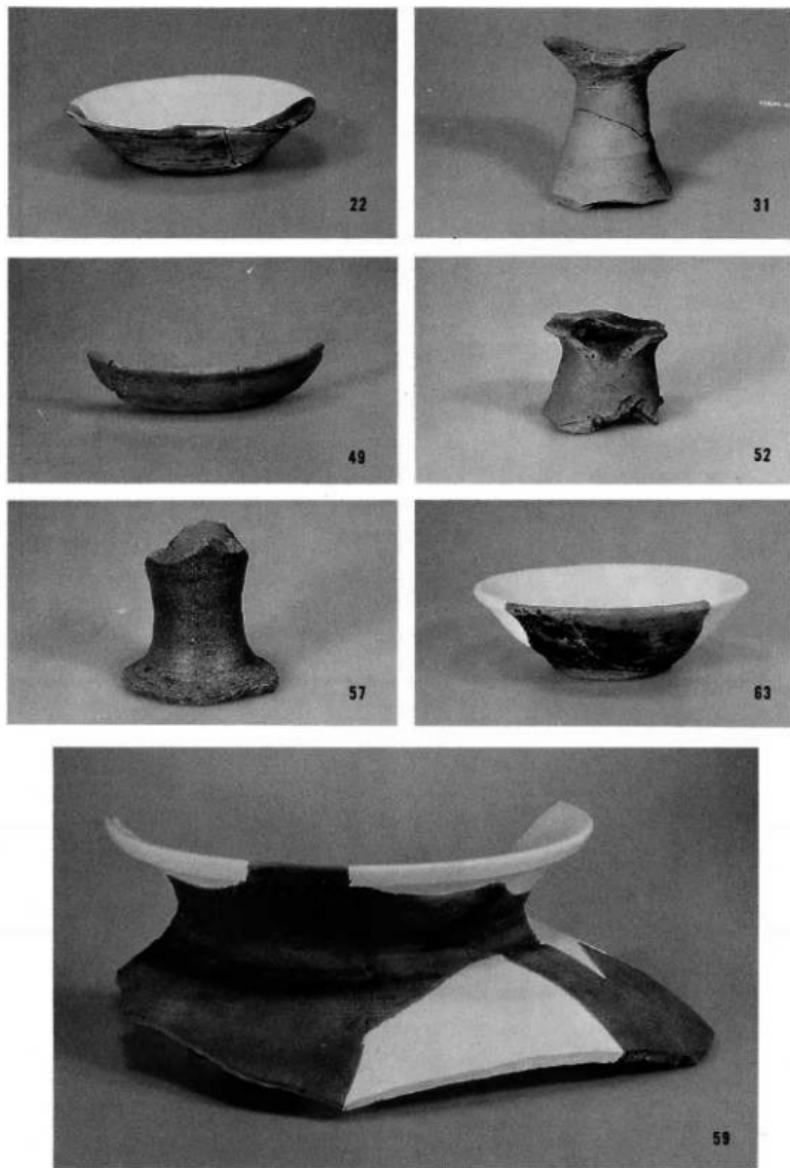
P-4 遺物出土状態（北より）



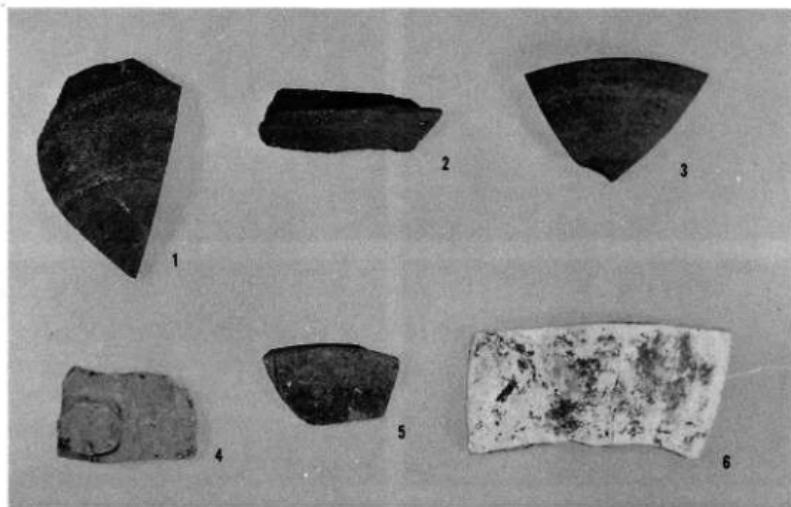
P-6 遺物出土状態（南より）



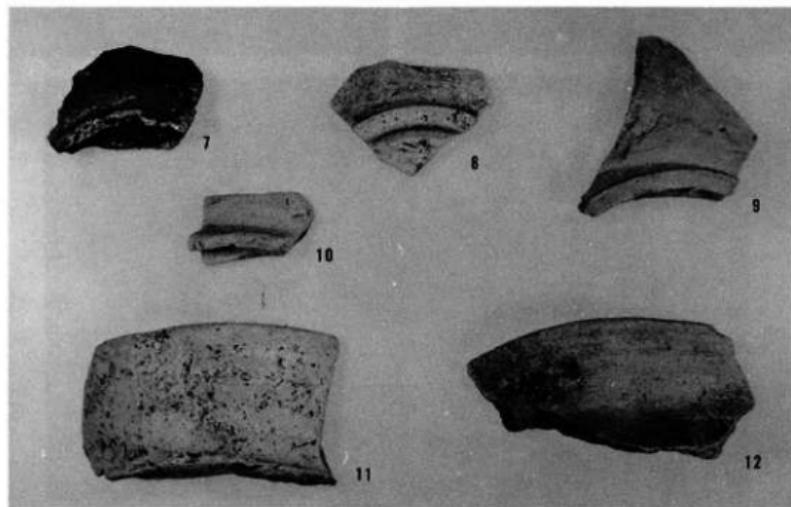
P-8 遺物出土状態（東より）



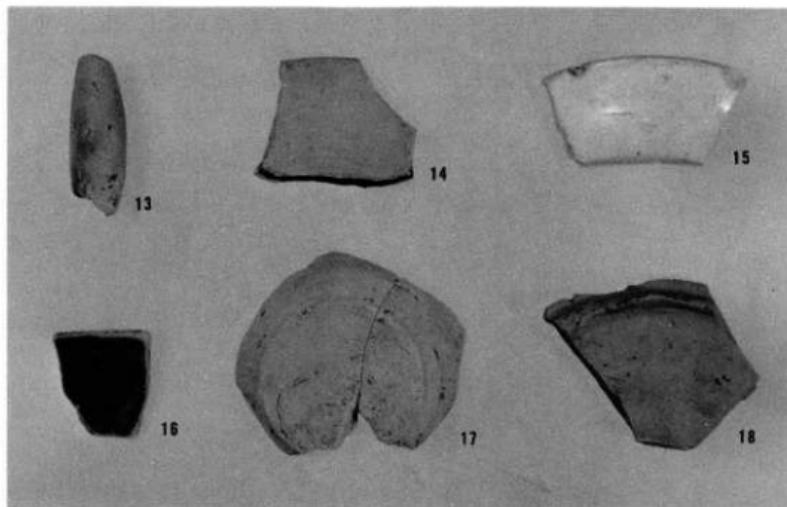
第IV層、SB-50、SK-69、SD-46、P-3+6 出土遺物



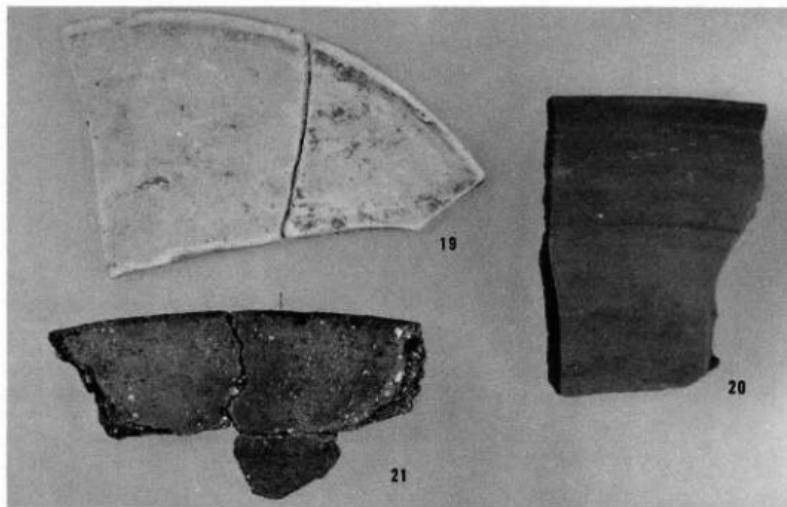
第III层 出土遗物



第III层 出土遗物

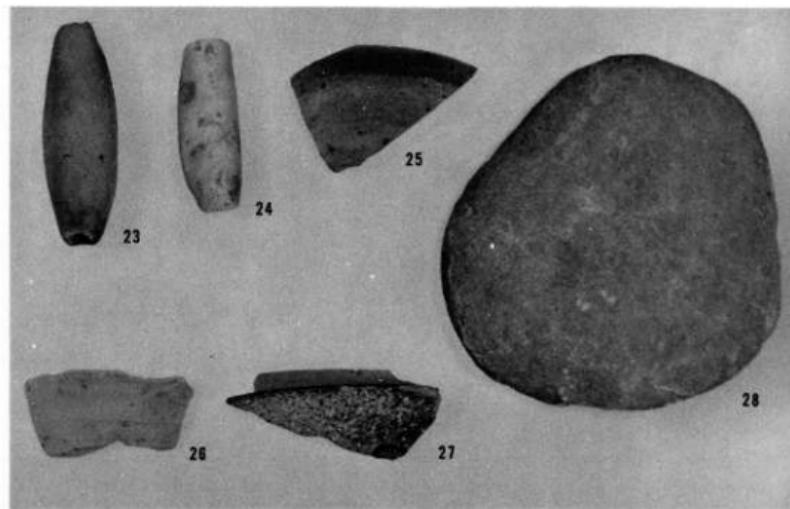


第三・IV層 出土遺物

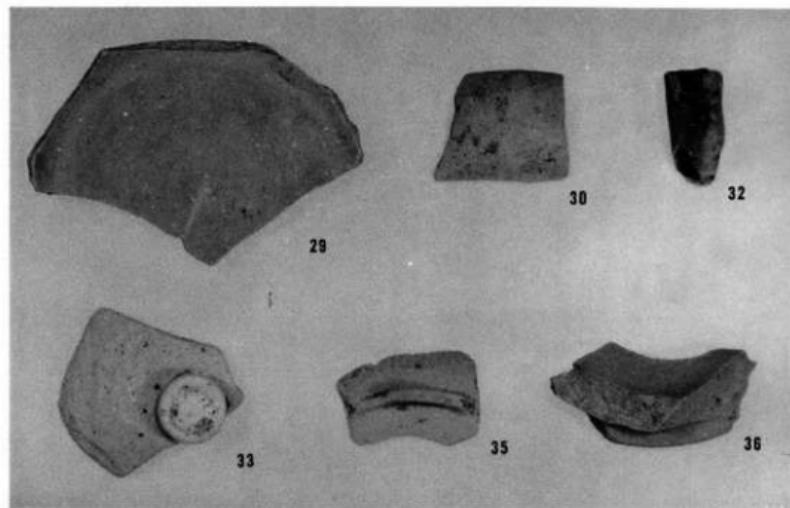


第四層 出土遺物

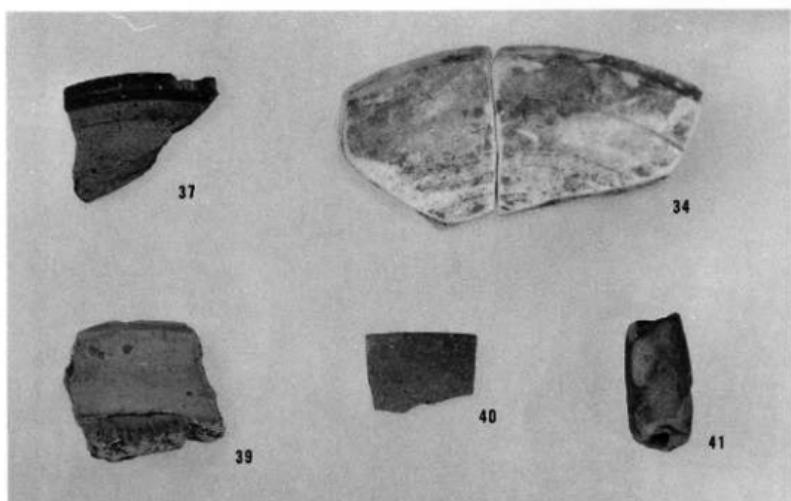
图版46



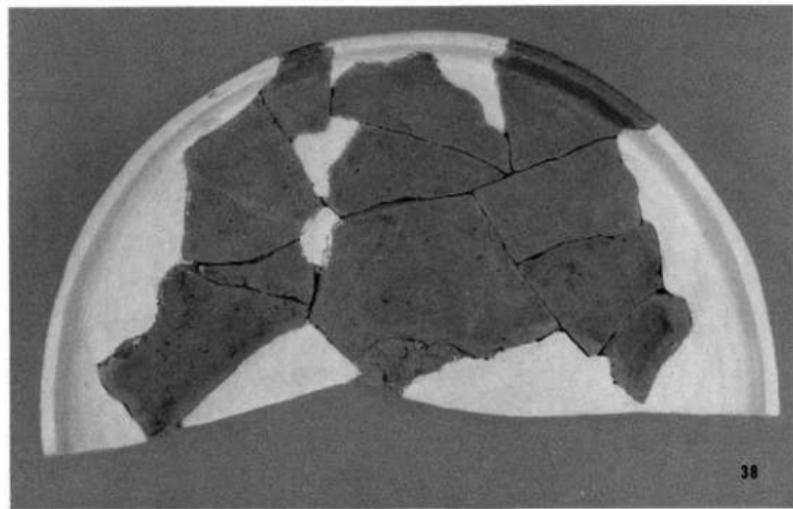
第IV层，ST-20+21出土遗物



SB-49+50, SK-67出土遗物

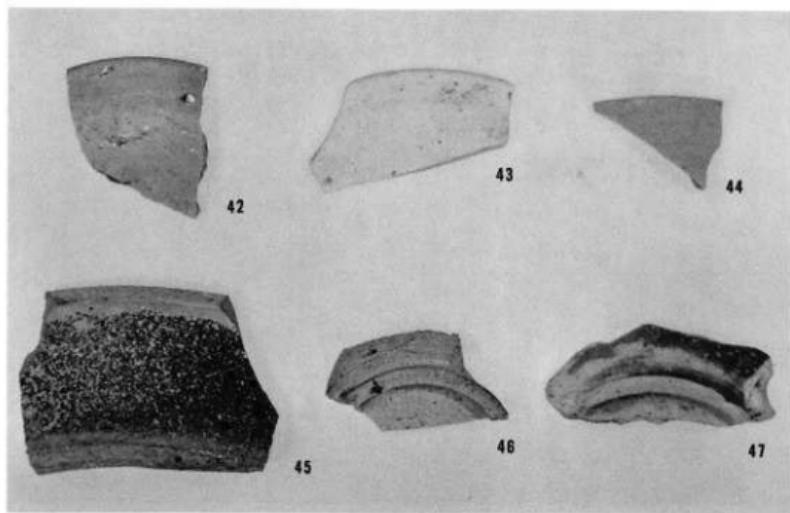


SK-67・68 出土遺物

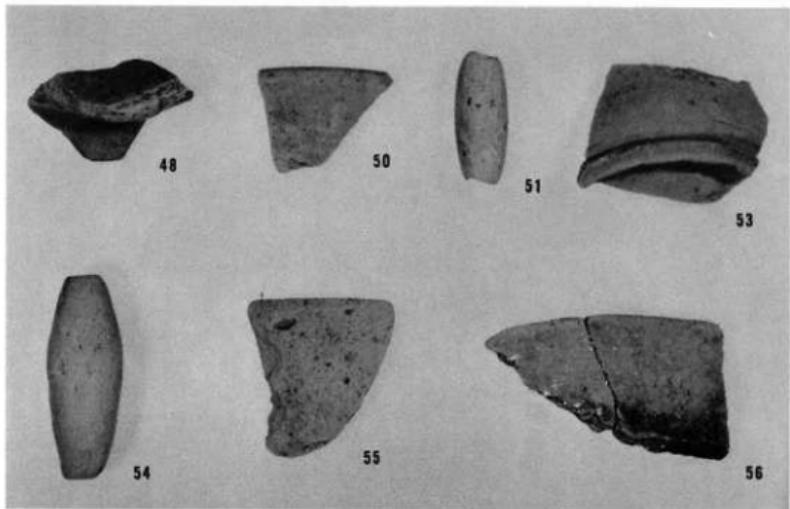


SK-67 出土遺物

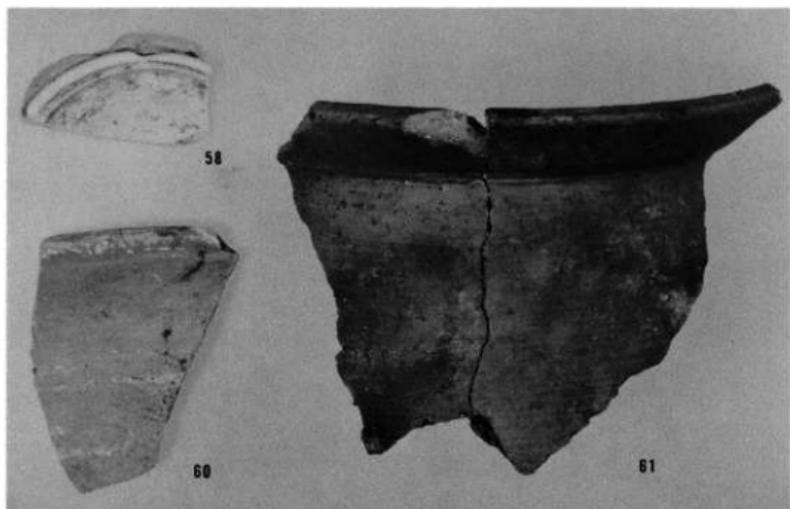
図版48



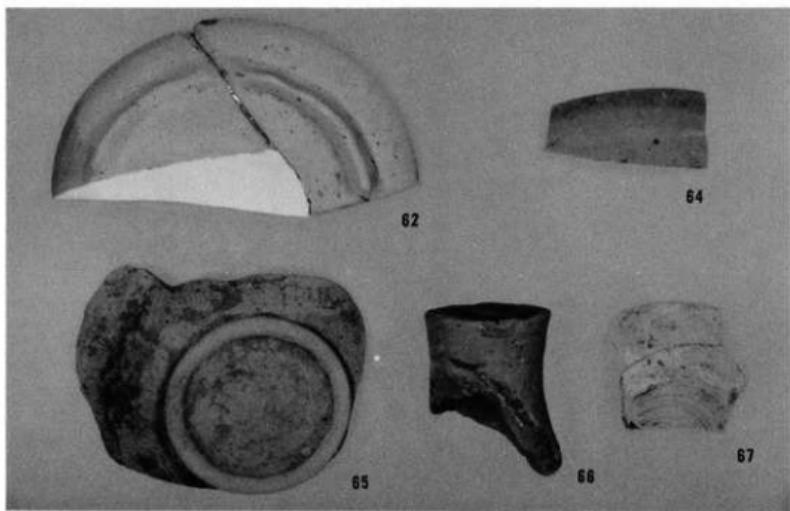
SK-69 出土遺物



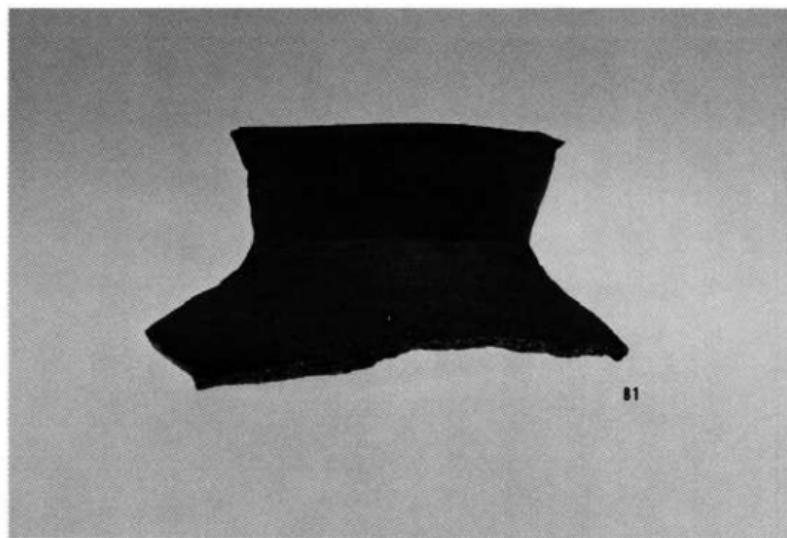
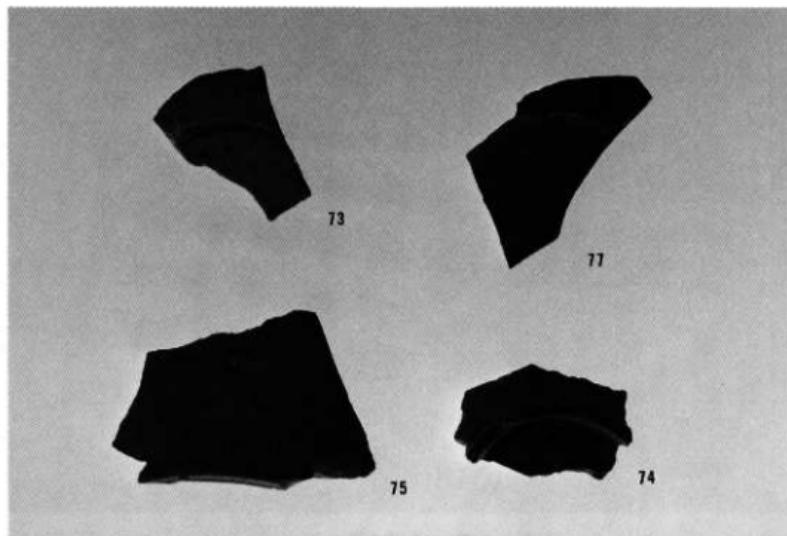
SK-69, SD-48, P-1・2 出土遺物



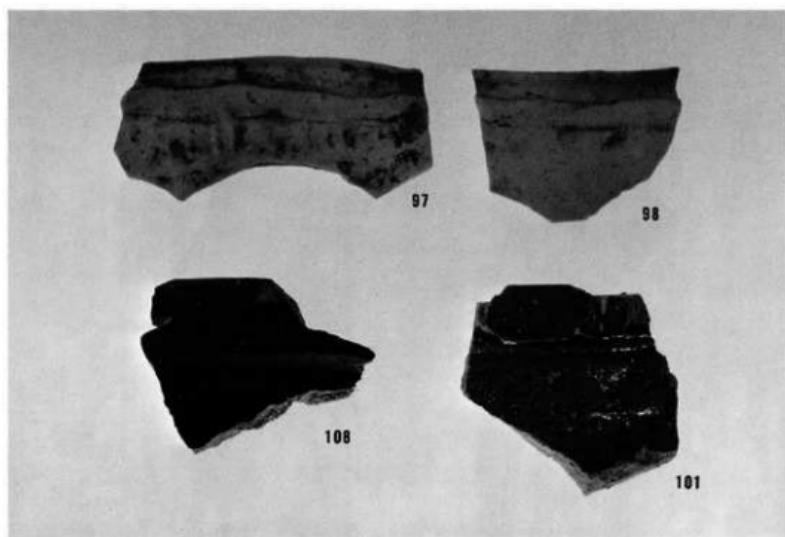
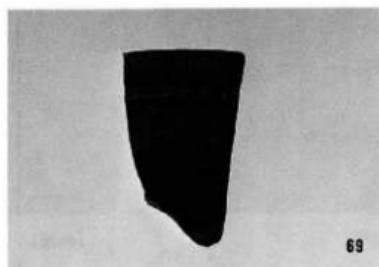
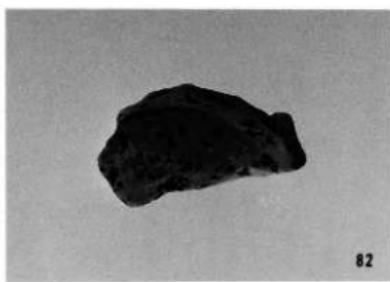
P-3-4 出土遺物



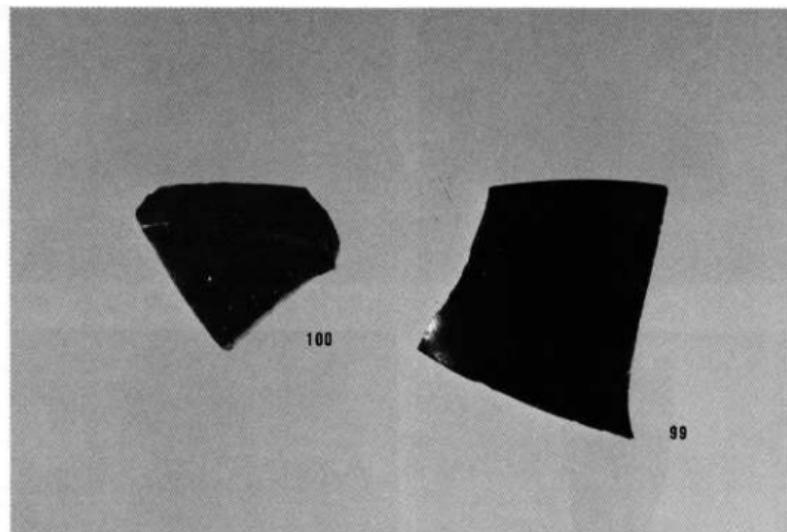
P-5-7-8 出土遺物



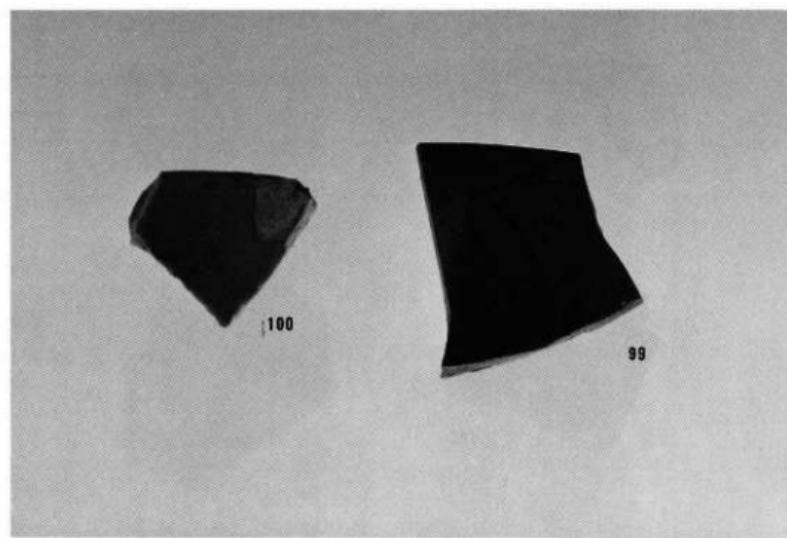
第II層 出土遺物



第II層 出土遺物

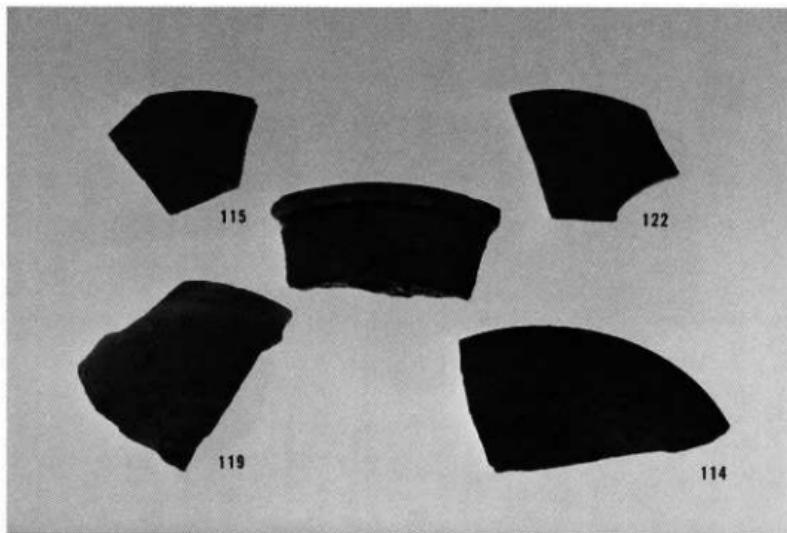


(外面)

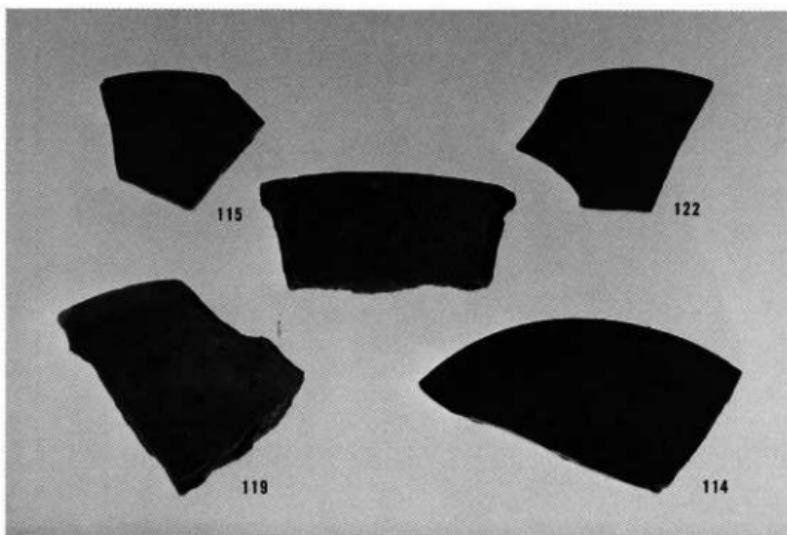


第II層 出土遺物

(内面)

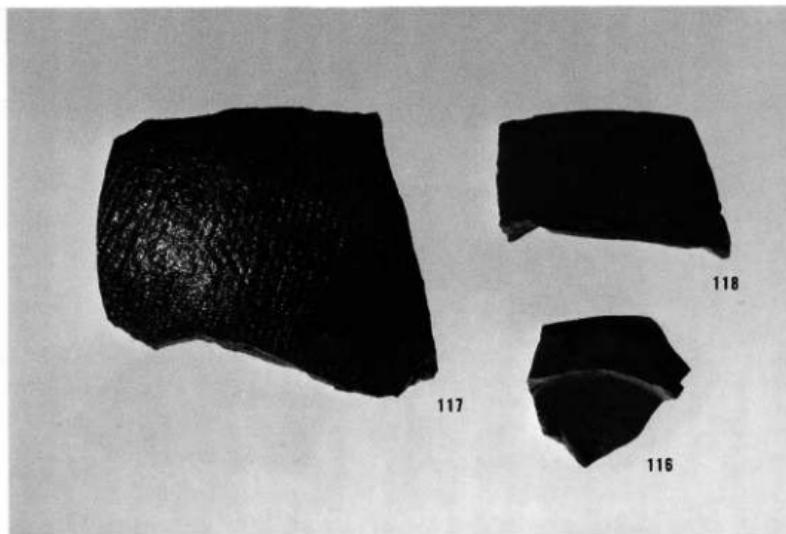


(外面)

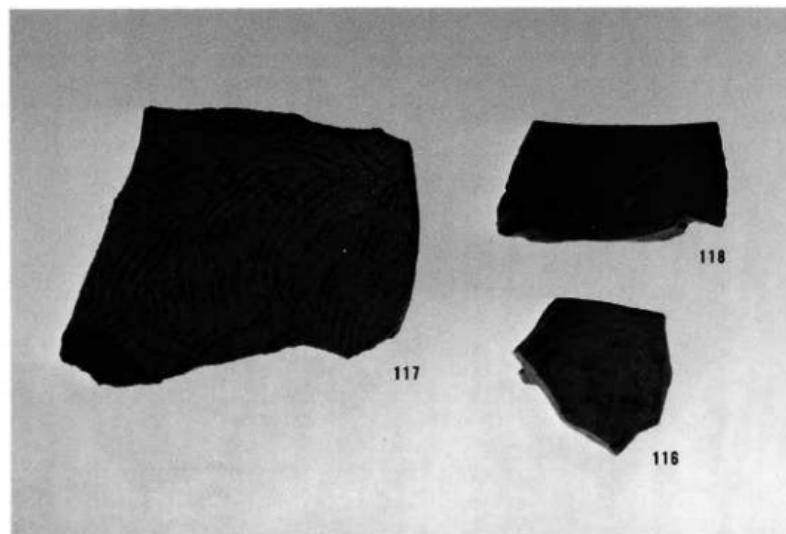


SK-71・74, SA-13 出土遺物

(内面)

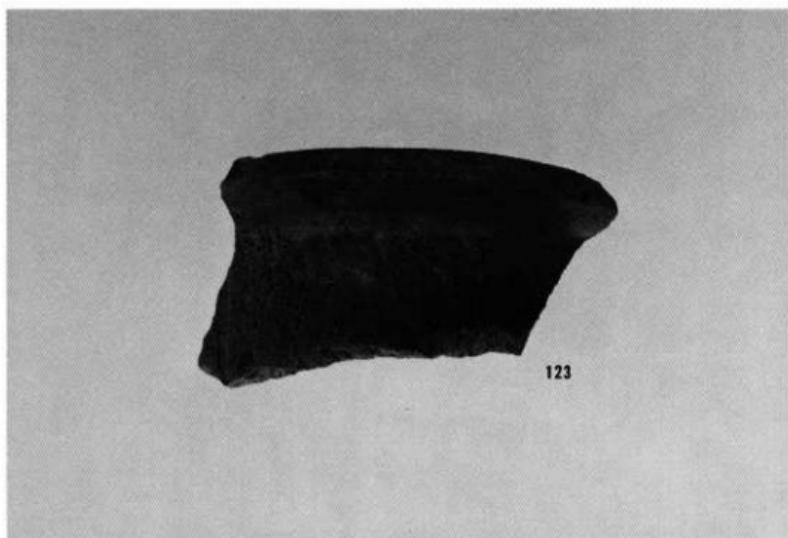


(外面)



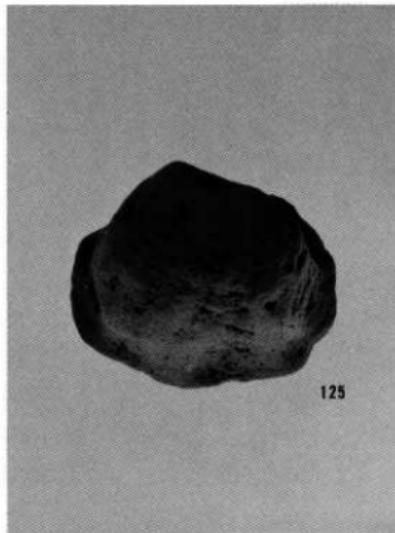
SK-72 出土遺物

(内面)



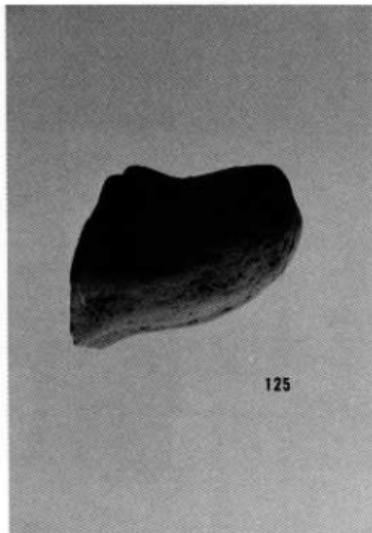
123

SA-13 出土遺物



125

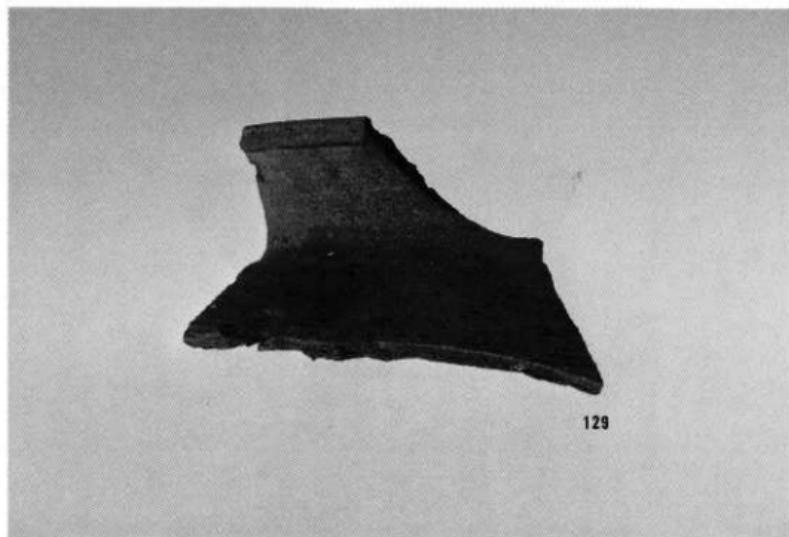
(正面)



125

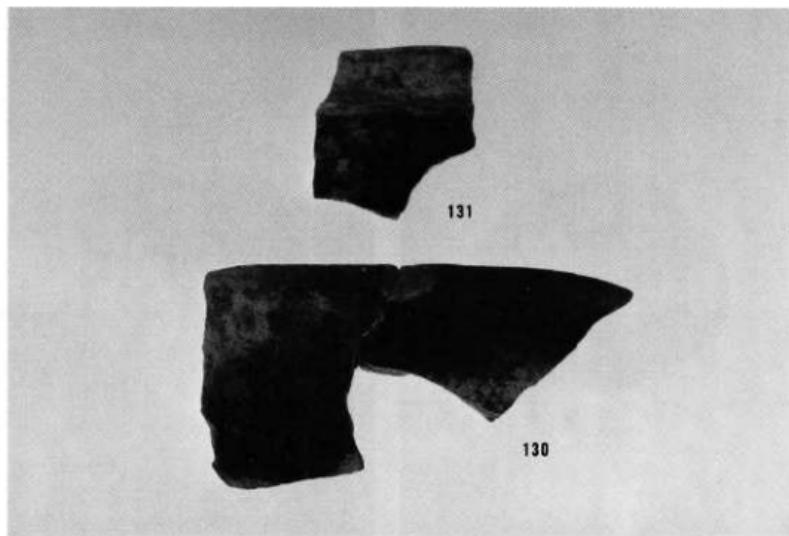
P-2 出土遺物

(側面)



129

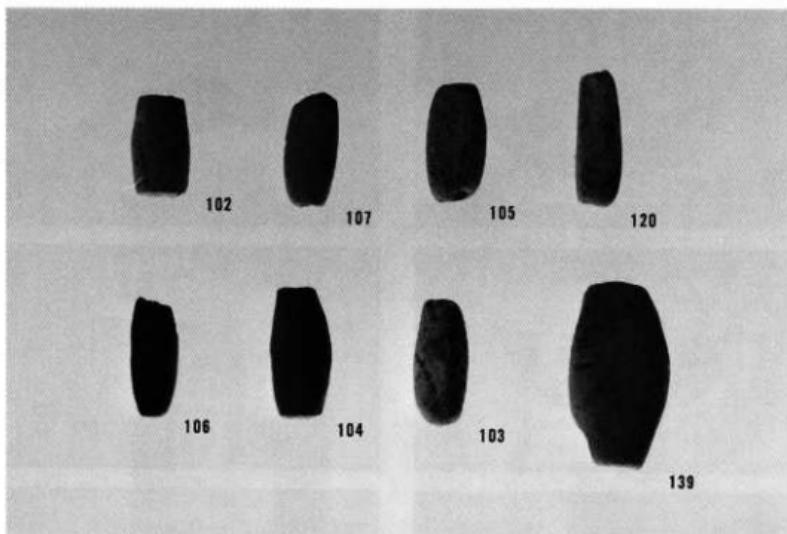
P-6 出土遺物



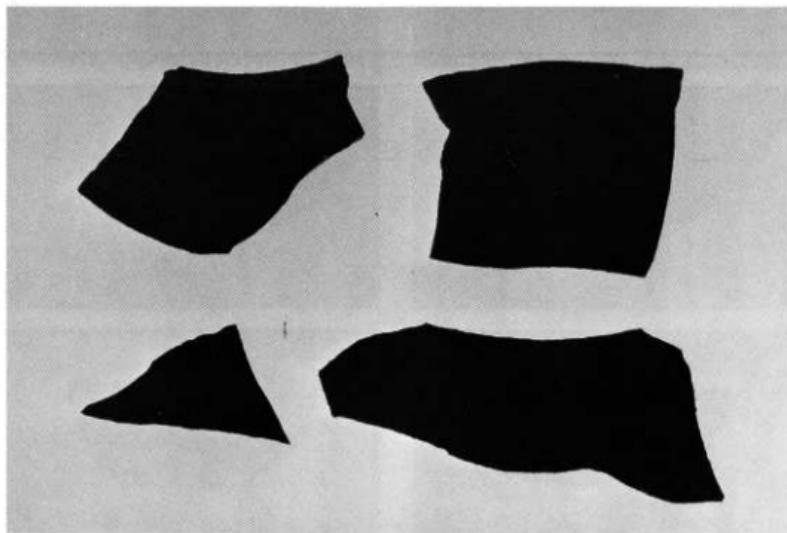
131

130

SK-78 出土遺物



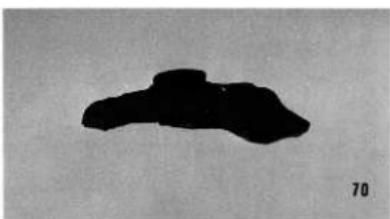
第II層, SD-51, P-10 出土遺物



SK-72 出土遺物



68



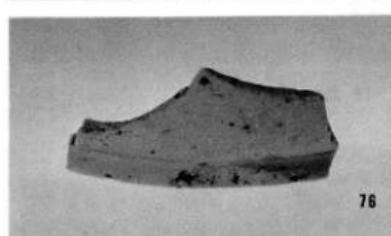
70



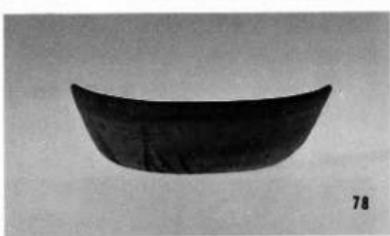
71



72



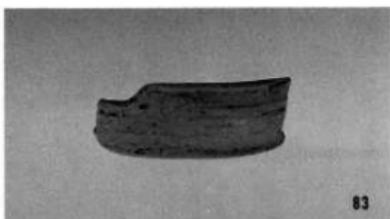
76



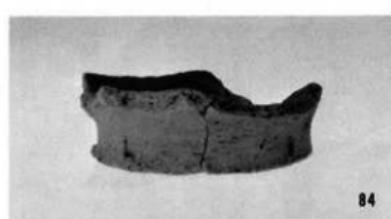
78



79



83

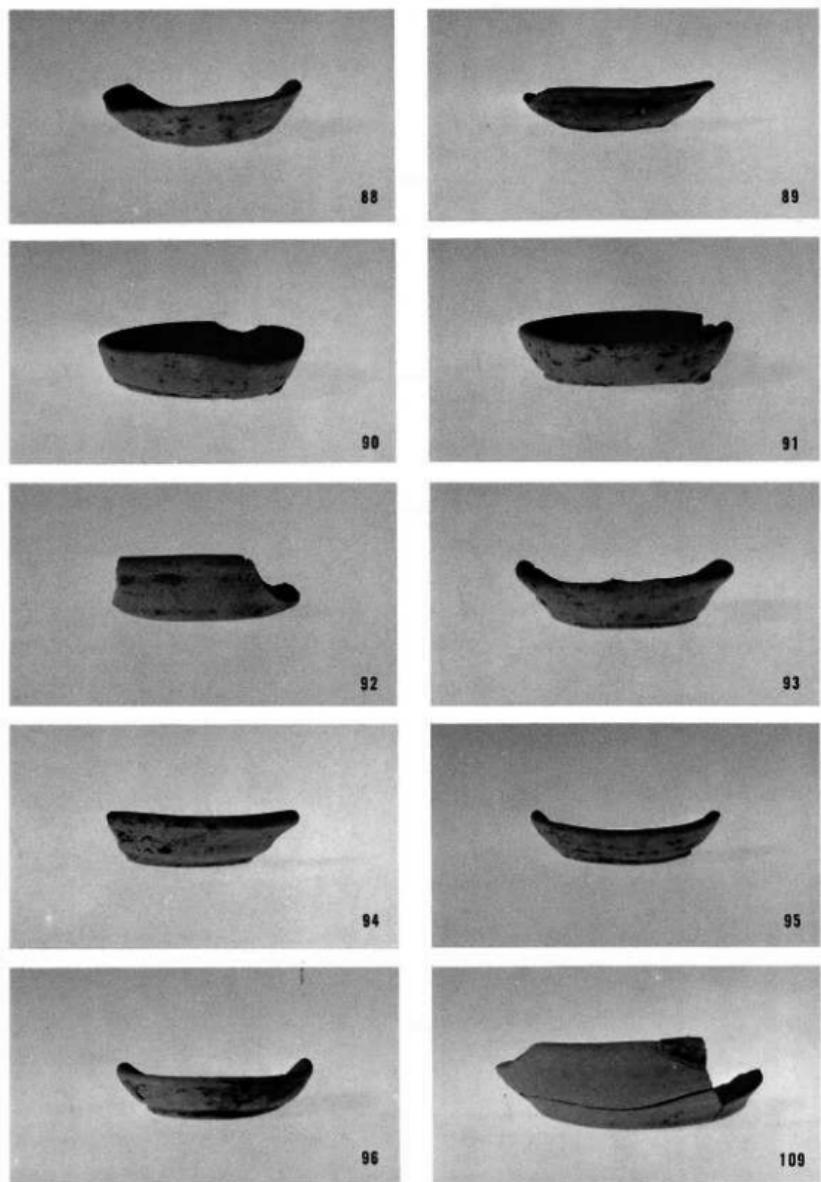


84

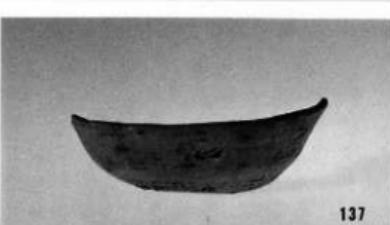
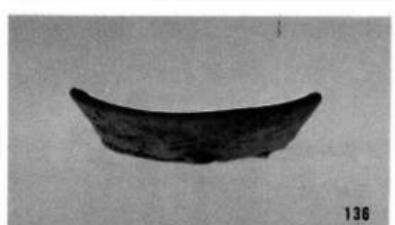
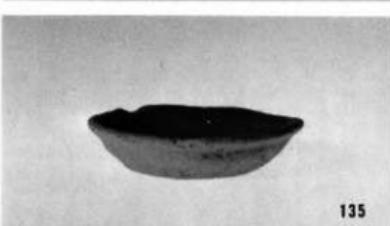
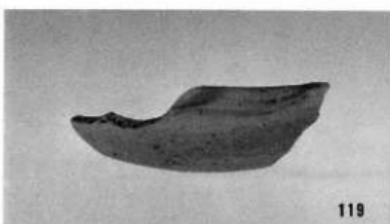
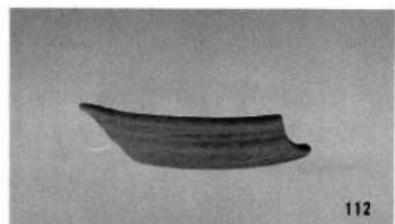
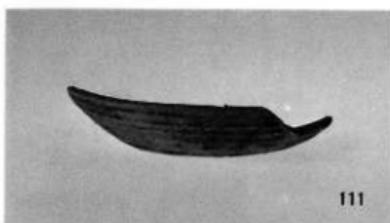


87

第II層 出土遺物



第II層、SK-70 出土遺物



土佐国衝跡発掘調査報告書

第 8 集

-松ノ下・金屋地区-

昭和63年3月31日

編集・発行 高知県教育委員会

(高知市丸の内1-7-52)

印 刷 中央印刷株式会社

